

解題

諸體詩則 二卷

林 義 卿 著

林義卿、字は周父、東溟と號し、周介と稱す、長門の人、少時山縣周南に師事し、州學明倫館に寓す、年十三にして、擧げられて生員となる、世に同門の士、和智棟卿、瀧長愷と竝べ稱して、山縣門の三傑とす、後ち京攝の間に在りて、講説を業とし、専ら徂徠の學を鼓吹せり、晩に江戸に出て、老莊の學を爲し、紫碧仙叟と號し、詩酒優游以て歿す、時に安永九年九月二十五日なり、享年七十二。

此書は、藤園一派の詩を作るもの、爲めに法式を論じ、明詩の唐詩に淵源せるを述べ、詩體詩法命題句法等、凡そ二十三項に分ちて説明せり、其の載する所は、概ね古人の所説を抄撮したるものにして、別に創見あるに非ず。

詩則序

物夫子之化行而斯道之明如月之恆如日之升親受其業者述而文歌而詩各其材也若其超乘而上者關以西有周南關以東有南郭虎視鷹揚以風靡一世二先生實護園之游夏孰不仰止其彬彬之德乎夫子雖已歿夫子未歿也士之游事其門者亡論感是翩翩一時之雋雖應門五尺童亦能知晚唐宋元爲醜也巨矣哉護園之化也詩有之自南自北亡思不服其斯之謂乎予不佞雖後哉有興起於此縱雖不能負笈於千里亦其緒言不在於斯乎凡於徠家之書未嘗不讀也讀必私淑之然尙恨固陋未見正之於其人焉前者聞東溟林先生以古文辭倡洛攝之間往以謁焉始得親與聞徠翁周南之奧旨遂信之甚矣猶公之於周南也周南蓋其師友也自此厥后從游之士日多一日凡京畿之間操觚周旋藝苑者稍稍知

脩スレテ護ホシ園ノ之ヲ業ヲ者ハ實ニ公ノ爲ス之ヲ嚆シ矢ト也ナリ其ノ功ハ不レ亦レ偉ト乎ナリ間者著ス詩則漢魏
 暨シ盛レ唐之則レ具ニ備ム好シ文之士一讀之乃レ曰ク世始有レ詩則焉昔皇甫士
 安之未レ至短宋玉曰ク風雅之則於是乎乖予乃大贊此書曰ク詩賦之
 則於是乎明ト

元文辛酉春二月

河陽 森明叔拜撰

諸體詩則凡例

一護園之詩教興，而世無詩式者尙矣。樂府古詩以上最爲甚也。余倡徠翁學，育髦士於洛攝之間者十年，所于此指授無所不至也。亦猶欲使他方異鄉未得與聞徠家詩教者，有所賴焉。間纂述此書，期年始脫稿矣。而都下之士傳寫相祕，不肯與大方共甚者，竊取驕人，非余之志也。今茲仲春，刻之塾中，以廣于海內。庶或藉此詩道有至焉者。

一此書以諸體詩則爲號，蓋以自四言古至律絕之大體言之，非多舉異體變體之謂也。

一此書以纂述爲主，其不冠某云字者，皆余錯綜出入古人說，或戕賊寸斷以爲之義，暨發古人所未及者已。

一凡稱故某云，故又云者，皆是引古人說以益實余言者也。蓋又字

各指其前條說者。

一凡稱古人云者，余所抄出來書，亦皆略其姓氏者，而未遑廣考之諸書者也。

諸體詩則目錄

卷之上

詩門一

詩體一九

命題二七

造語三八

雙字四二

用事四四

沿襲五二

明詩三

詩法二四

句法三七

下字四〇

壓韻四三

屬對四九

音韻五四

卷之下

四言古詩一

楚辭九

賦二二

樂府一六

日本詩話叢書

五言古詩 三六 歌行 四一

律詩 一一 五言律詩 一一四

七言律詩 一二〇 排律 一二六

絕句 一三〇 五言絕句 一三四

七言絕句 一三七 書品 一四八

附載 一五三

諸體詩則卷之上

◎詩門

詩道須從高妙入、故嚴滄浪云、學詩者以
 識爲主、入門須正、立志須高、以漢魏晉盛
 唐爲師、不作開元天寶以下人物、若自退
 屈卽有下劣詩魔、入其肺腑之間、由立志
 之不高也、行有未至、可加工力、路頭一差、
 愈驚愈遠、由入門之不正也、故曰、學其上
 僅得其中、學其中斯爲下矣、又曰、見過於
 師、僅堪傳授、見與師齊、減師半德也、工夫

諸體詩則卷之上

長陽 林義卿 周父 纂述
 西越 田玄徽 仲琴 同校
 北作 直春卿 士宗

◎詩門

詩道は須らく高妙より入るべし、故に嚴滄浪云ふ詩を
 學ぶには識を以て主と爲す、門に入るは須らく正しか
 るべく、志を立つるは須らく高かるべし、漢魏晉盛唐
 を以て師と爲し、開元天寶以下の人物と作らざれ、若
 し自から退屈せば卽ち下劣の詩魔ありて、其の肺腑の
 間に入らん、志を立つるの高からざるに由るなり、行
 ひ未だ至らざる有らば、工夫を加ふべし、路頭一たび
 差はど、愈驚せて愈遠し、門に入るの正しからざる
 に由るなり、故に曰く、其の上を學べば僅に其の中を
 得、其の中を學べば斯に下と爲ると、又た曰く、見師に
 過ぐれば僅に傳授するに堪へ、見師と齊きときは師
 に半德を減すと、工夫は須らく上より做し下だすべし、

須從上做下、不可從下做上、先須熟讀楚詞朝夕諷詠以爲之本、及讀古詩十九首、樂府四篇、李蘇漢魏五言、皆須熟讀、即以李杜二集、枕藉觀之、如今人之治經、然後博取盛唐名家、醞釀胸中、久之自然悟入、雖學之不至、亦不失正路、此乃是從頂顛上來、謂之向上一路、謂之直截根源、謂之頓門、謂之單刀直入也。

賦比興有古義、梁鍾嶸云、文已盡而意有餘、興也、因物喻志、比也、直書其事、寓言寫物、賦也。

古人不專用賦比興、故又云、興比賦三義酌而用之、幹之以風力、潤之以丹彩、使味之者無極、聞之者動心、是詩之至也、若專

下より做し上る可からず、先づ須らく楚詞を熟讀し、朝夕諷詠して以て之が本と爲すべし、及び古詩十九首、樂府四篇、李蘇漢魏の五言を讀んで皆な須らく熟讀すべし、即ち李杜の二集を以て枕藉し、之を觀ること、今人の經を治むるが如くし、然る後博く盛唐の名家を取り胸中に醞釀せば、久しくして自然に悟入せん、之を學んで至らずと雖も、亦た正路を失はず、此れ乃ち頂顛上より來る、之を向上一路と謂ひ、之を直截根源と謂ひ、之を頓門といひ、之を單刀直入と謂ふなり。

賦比興に古義あり、梁の鍾嶸云ふ、文已に盡きて意餘りあるは興なり、物に因りて志を喻すは比なり、直に其の事を書し、寓言、物を寫すは賦なり。

古人は賦比興を專用せず、故に又た云ふ、興比賦の三義は酌んで之を用ゆ、之を幹するに風力を以てし、之を潤すに丹彩を以てし、之を味ふ者をして極りなく、之を聞かざる者をして心を動かさしむ、是れ詩の至りなり、若

用比興、則患在意深、意深則詞躑、若但用賦體、則患在意浮、意浮則文散。

作詩不過情景二端、比興卽情也、賦卽景也、情景又謂之虛實也。

古有風雅頌三體、出自闕巷、謂之風、出自朝廷、謂之雅、用之郊廟、謂之頌、然後傳者、闕巷風人所賦之遺響已。故胡蘭溪云、風雅頌竝列聖經、第風人所賦、多本室家行旅悲歡聚散感歎憶贈之詞、故其遺響後世獨傳。

後人動以拙手強作比體、殊不知唐人不好比體也、獨老杜時時有之、亦可觀者寡矣、且注者謂杜詩皆托物爲之穿鑿附會、可

以一笑、故又云唐人賦興多、而比少、惟

し、専ら比興を用ゆるときは、則ち患は意の深きに在り、意深きときは則ち詞躑づく、若し但に賦體を用ゆるときは、則ち患は意の浮なるに在り、意浮なるときは則ち文散す。

詩を作るは情景の二端に過ぎず、比興は則ち情なり、賦は則ち景なり、情景は又た之を虚實と謂ふ。

古に風雅頌の三體あり、闕巷より出づる之を風と謂ふ、朝廷より出づる之を雅と謂ふ、之を郊廟に用ゆる之を頌と謂ふ、然れども後の傳ふる者は闕巷風人の賦する所の遺響のみ、故に胡蘭溪云ふ、風雅頌は竝に聖經に列す、第だ風人の賦する所は多くは室家行旅悲歡聚散感歎憶贈の詞に本づく、故に其の遺響は、後世獨り傳ふ。

後人動もすれば拙手を以て強ひて比體を作る、殊に知らず唐人の比體を好まざるを獨り、老杜は時々これあるも、亦た觀るべき者寡し、且つ注する者は謂ふ、杜の詩は皆な物に托すと、之が穿鑿附會を爲す、以て一笑すべし、故に又た云ふ唐人は賦興多くして比少な

杜時時有之、如寒花隱亂草、宿鳥擇深枝、獨鶴歸何晚、昏鴉已滿林之類、然杜所以勝諸家、殊不在此、後人穿鑿附會、動輒笑端、余嘗謂千家注杜、類五臣注選、皆俚儒荒陋者也、

王楊近體未脫陳隋之氣習、李杜二集亦有去取、故又云、正聲不取四傑、余初不能無疑、盡取四家讀之、乃悟廷禮鑒裁之妙、蓋王楊近體未脫梁陳、盧駱長歌、有傷大雅、律之正始、俱未當行、惟照鄰寶王二排律、合作則正聲亟收之、至李杜二集、以前諸公、未有措手者、而廷禮去取精覈、特愜人心、真藝苑功人、詞壇偉識也、

有大家、有名家、名家有所不爲、所不能也、大

し、惟、杜は時々之あり「寒花は亂草に隱れ、宿鳥は深枝を擇ぶ」「獨鶴歸る何ぞ晚き、昏鴉已に林に滿つ」の類の如し、然れども杜の諸家に勝る所以は、殊に此に在らず、後人穿鑿附會し、動もすれば輒ち笑端す、余嘗て謂へらく、千家の杜に注するは、五臣の選に注するに類す、皆な俚儒荒陋なる者なり、

王楊の近體は未だ陳隋の氣習を脱せず、李杜の二集も亦た去取あり、故に又た云ふ、正聲は四傑を取らず、余初めは疑なきこと能はず、盡く四家を取りて之を讀み、乃ち廷禮の鑒裁の妙を悟る、蓋、王楊の近體は未だ梁陳を脱せず、盧駱の長歌は大雅を傷くること有り、之を正始に律するに、俱に當行ならず、惟、照鄰寶王の二排律、合作なれば、則ち正聲亟に之を收む、李杜の二集に至りては、以前の諸公は未だ手を措く者あらず、而るに廷禮の去取精覈、特に人心に愜ふ、真に藝苑の功人にして、詞壇の偉識なり、

大家あり、名家あり、名家は爲さざる所能はざる所あり、

家無所不爲所不能也、故又云、清新秀逸、冲遠和平、流麗精工、莊嚴奇峭、名家所擅、大家之所兼也、浩瀚汪洋、錯綜變幻、渾雄豪宕、闕廓沉深、大家之所長、名家之所短也。

大家所爲、後學不可爲法者多矣、故又云、太白多率語、子美多放語、獻吉多粗語、仲默多淺語、于鱗多生語、元美多巧語、皆大家常態、後學不可爲法、右丞浩然、龍標、昌穀、子業、明卿、卽不爾、然終不以彼易此、古今四大家不可不知也、魏陳思王、唐李杜、明王元美是也、

徂徠先生亦大家也、最長歌行、其於近體絕句、效正變於李杜王李者也、故有深句、有雄

大家は爲さざる所能はざる所なし、故に又た云ふ、清新秀逸、冲遠和平、流麗精工、莊嚴奇峭は、名家の擅にする所にして、大家の兼ゆる所なり、浩瀚汪洋、錯綜變幻、渾雄豪宕、闕廓沉深は、大家の長ずる所にして、名家の短なる所なり。

大家の爲す所は、後學の法と爲す可からざる者多し、故に又た云ふ、太白に率語多く、子美に放語多く、獻吉に粗語多く、仲默に淺語多く、于鱗に生語多く、元美に巧語多し、皆な大家の常態にして、後學は法と爲すべからず、右丞浩然、龍標、昌穀、子業、明卿は卽ち爾らず、然れども終に彼を以て此に易へず。

古今の四大家は知らざるべからず、魏の陳思王、唐の李杜、明の王元美是なり。

徂徠先生も亦た大家なり、最も歌行に長ず、其の近體絕句に於ける、正變を李杜王李に效ふ者なり、故に深句あり、雄句あり、仙句あり、豪句あり、放句あり、粗句あり、

句有仙句有豪句有放句有粗句有秀句、有麗句有老句有不可讀句然比之老杜無險句拙句累句巧句有字眼句而陶潛枯句西漢質句建安雅句間入之近體絕句中卻見妙故專學先生律絕者雖格不落開天以下調或見不可名者也非經廷禮再生之品選不可爲初學之法者多矣有古不忘而今忌者故王敬美云詩有古人所不忘而今人以爲病者摘瑕者因而酷病之將併古人無所容非也然古今寬嚴不同作詩者既知是瑕不妨併去如太史公蔓辭累句常多班孟堅洗削殆盡非謂班勝於司馬顧在班分量宜爾今以古人詩病後人宜避者略具數條以見其餘

秀句あり、麗句あり、老句あり、讀可からざる句あり、然れども之を老杜に比すれば險句拙句累句巧句、字眼ある句なし、而して陶潛の枯句、西漢の質句、建安の雅句は、間之を近體絶句の中に入る、卻て妙を見る、故に専ら先生の律絶を學ぶ者は、格は開天以下に落ちずと雖も、調は或は名づく可からざる者を見るなり、廷禮再生の品選を経るに非ずんば、初學の法と爲す可からざる者多し。

古は忌まずして今は忌む者あり、故に王敬美云ふ、詩に古人忌まざる所にして、今人以て病と爲す者あり、瑕を摘む者は因て酷だ之を病とし、將に古人を併せて容るゝ所なからんとするは、非なり、然れ共古今寬嚴同じからず、詩を作る者は、既に是の瑕を知らば、併せ去るを妨げず、太史公の蔓辭累句常に多きが如き、班孟堅、洗削して殆ど盡くす、班は司馬に勝れりと謂ふに非ず、顧ふに班の分量に在りては宜しきのみ、今、古人の詩病にして後人の宜しく避くべき者を以て、略、數條を具して以て、其餘を見はず、重韻ある者の如き、

如、有重韻者、若任彥昇、哭范僕射、一詩三
 壓情字、老杜排律亦時誤有重韻、有重字
 者、若沉雲、卿天長地瀾之三句、至王摩詰
 尤多、若暮雲空積玉、靱角弓、二馬俱壓在
 下、一從歸白社、不復到青門、青菰臨水映、
 白鳥向山翻、青白重出、此皆是失點檢處、
 必不可借以自文也、又如風雲雷雨有二
 聯中接用者、一二三四有八句中六見者、
 今可以爲法邪、此等病、盛唐常有之、獨老
 杜最少、蓋其詩卽景後必下意也、又其最
 隱者、如雲卿、嵩山石淙、前聯云行漏香爐、
 次聯云神鼎帝壺、俱壓末字、岑嘉州雲隨
 鶴雨洗兵、花迎蓋柳拂旌、四言一法、摩詰
 獨坐悲雙鬢、白髮終難變、語異意重、九成

任彥昇の范僕射を哭するが若き、一詩に三たび情の字
 を壓す、老杜の排律も亦た時に誤りて重韻あり、重字
 ある者は、沈雲卿の「天長く地瀾し」の三句の若し、王摩
 詰に至りては尤も多し、暮雲空積玉靱角弓の若き、二
 馬俱に壓して下に在り、「一たび白社に歸りて従り、復
 た青門に到らず、青菰、水に臨んで映じ、白鳥山に向つ
 て翻へる」は青白重出す、此れ皆な是れ點檢を失する
 處にして、必ず借りて以て自から文る可からざるな
 り、又た風雲雷雨の二聯の中に接用する者あり、一二
 三四に八句中に六見する者有るが如き、今以て法と爲
 す可けんや、此れ等の病は、盛唐に常に之れあり、獨り
 老杜最も少なし、蓋、其の詩は卽景の後ち必ず意を下
 せばなり、又た其の最も隱たる者は、雲卿の嵩山石淙
 の如き、前聯に云ふ「行漏香爐」次聯に云ふ「神鼎帝
 壺」、俱に末字に壓す、岑嘉州が「雲、馬に隨ひ、雨、兵を
 洗ふ、花蓋を迎へ、柳、旌を拂ふ」は、四言の一法なり、摩
 詰の「獨坐、雙鬢を悲しみ、白髮終に變じ難し」は、語異に
 して意重なる、九成宮に暑を避くる三四に「衣上鏡中」、
 五六に「林下樓前」彼に在りては正に自から覺えざれ
 ども、今之を用ひば能く人の擲擲を受くる無からん

宮避暑三四衣上鏡中五六林下巖前在
 彼正自不覺今用之能無受人擲揄至於
 失嚴之句摩詰嘉州特多殊不妨其美然
 就至美中亦覺有微缺陷如吾人不能運
 便自誦不流暢不爲可也至於首句出韻
 晚唐作俑宋人濫觴尤不可學又胡蘭
 溪云古詩語重者如今日良宴會請爲遊
 子吟之類自是樸茂之過建安諸子洗削
 殆盡晉宋不應復蹈嗣宗多言焉所告繁
 辭將訴誰士衡迅雷中宵激驚電夜光舒
 太冲豈必絲與竹何事待嘯歌康樂尤不
 勝數皆後學所當戒

後人學杜徒學其拙者陋者巧者僻者險者
 易者粗者放者已宜乎其不能至也故

八

や、失嚴の句に至りては、摩詰嘉州特に多し、殊に其の
 美を妨げず、然れども至美の中に就き、亦た微しく缺
 陥あるを覺ゆ、吾人の運する能はざるが如き、便ち自
 ら誦して流暢ならずんば爲さずして可なり、首句の出
 韻に至りては、晚唐作俑、宋人濫觴す、尤も學ぶ可
 からず、又、胡蘭溪云ふ、古詩は語重なる者は、今日
 良宴會請ふ遊子の吟を爲さん^の類の如き、自らは是れ
 樸茂の過なり、建安の諸子洗削して殆んど盡す、晉宋
 は應に復た踏むべからず、嗣宗が「多言焉くんぞ告ぐ
 る所あらん、繁辭將に誰に訴へんとす」士衡の「迅雷中
 宵に激し、驚電夜光に舒ぶ」、太冲が「豈に必ずしも絲と
 竹とならん、何ぞ嘯歌を待つを事とせん」と、康樂は尤
 も數ふるに勝へず、皆な後學の當に戒むべき所なり。

後人の杜を學ぶは、徒だに其拙なる者、陋なる者、巧なる
 者、僻なる者、險なる者、易なる者、粗なる者、放なる者を
 學ぶのみ、宜べなるかな、其至る能はざるや、故に胡

蘭溪云、杜七言律、通篇太拙者、聞道雲南
 麴米春之類、太粗者、堂前撲棗任西鄰之
 類、太險者、城尖徑仄旌旆愁之類、杜則可、
 學杜則不可。

後世學杜者、以一字奇巧稱字眼、寄精神於
 此者久矣、不知老杜大家、古今衆體莫不有
 者、是此字眼、則六朝之纖巧、而盛唐諸公所
 無、老杜惟有之、亦詩中之一病、然杜而無之、
 何足爲杜、是亦所謂杜則可、學杜則不可者
 也、明人及我徠家之所以越宋續唐者、以無
 此字眼已、故又云、盛唐句法渾涵如兩漢
 之詩、不可以一字求、至老杜而後、句中有
 奇字爲眼、才有此句法、便不渾涵、昔人謂
 石之有眼爲研之一病、余謂句中有眼爲

蘭溪云、杜の七言律、通篇太だ拙なる者は、聞ならく
 雲南の麴米の春の類、太だ粗なる者は、堂前撲棗を撲
 て西鄰に任すの類、太だ險なる者は、城尖に徑仄ちて
 旌旆愁ふ一の類にして、杜は則ち可なり、杜を學ぶは則
 ち不可なり。

後世の杜を學ぶ者は一字の奇巧を以て字眼と稱し、精神
 を此に寄する者久し、知らず老杜は大家にして、古今
 の衆體、有らざる者なきことを、是れ此の字眼は則ち
 六朝の纖巧にして、盛唐諸公の無き所なり、老杜は惟
 り之れあるも、亦た詩中の一病なり、然れども杜にし
 て之れ無くんば、何ぞ杜と爲すに足らんや、是れも亦
 た謂はゆる杜は則ち可なり、杜を學ぶは則ち不可なる
 者なり、明人及び我が徠家の宋を越え唐に續ぐ所以
 の者は、此の字眼なきを以てのみ、故に又た云ふ、盛唐
 の句法は、渾涵として兩漢の詩の如し、一字を以て求
 む可からず、老杜に至りて而して、後ち句中に奇字あり
 て眼と爲す、才かに此の句法あれば、便ち渾涵ならず、
 昔人謂へらく石の眼あるは研の一病たりと、余も謂へ
 らく、句中に眼あるは詩の一病たりと、地拆けて江帆

詩之一病、如地拆江帆、墜天清木葉、開故不、如地卑荒野大、天遠暮江遲也、如返照入江、翻石壁、歸雲擁樹、失山村、故不如藍水遠、從千澗、落玉山、高竝兩峯、寒也、此最詩家三昧、具眼自能辨之、齊梁以至初唐、率用豔字爲眼、盛唐一洗、至杜廼有奇字、又云、老杜用字、入化者、古今獨步、中有大奇巧處、然巧而不尖、奇而不詭、猶不失上乘、如孤燈燃客夢、寒杵搗鄉愁、則尖矣、流星透疎木、走月逆行雲、則詭矣。

詩入儒生氣象言語、非詩本色、故又云、曰仙曰禪、詩中本色、惟儒生氣象一毫不得、著詩、儒者語言、一字不可入詩、而杜往往兼之、不傷格、不累情、故自難及。

一〇
隠れ、天高くして木葉開ゆの如きは、故に地卑して荒野大に、天遠くして暮江遲しに如かず、返照、江に入りて石壁を翻へし、歸雲樹を擁して山村を失ふの如きは、故に「藍水速く千澗より落ち、玉山高く兩峯に竝んで寒し」に如かず、此れ最も詩家の三昧にして、具眼は自ら能く之を辨ぜん、齊梁より以て初唐に至るまで、率ね豔字を用て眼と爲す、盛唐には一洗し、杜に至りて廼ち奇字あり、又た云ふ、老杜の字を用ふる、化に入る者、古今獨歩、中に大奇巧の處あり、然れども巧にして尖ならず、奇にして詭ならず、猶ほ上乘を失はず、「孤燈客夢を燃やし、寒杵郷愁を搗く」の如きは、則ち尖なり、「流星疎木に透り、走月行雲に逆ふ」は則ち詭なり。

詩に儒生の氣象言語を入れるは詩の本色に非らず、故に又た云ふ、曰く仙、曰く禪は、詩中の本色、惟、儒生の氣象、一毫も詩に著くるを得ず、儒者の語言、一字も詩に入る可からず、而るに杜は往々にして之を兼ねて、格を傷らず、情を累さず、故に自ら及び難し。

宋元無詩、故又云、語詩于宋元、卑卑甚矣。

卽以亡詩、夫孰曰不然。

詩不以敏捷稱、以精工稱也、苟不精工、則雖

一日千首、奚以爲、故吳韋庵云、詩不廢思、

古有十年成詠、三載卒吟者、彼非短於才

也、特以好句難得耳、今人纔諳吟咏、便自

負敏捷、率爾成篇、字句鄙陋、豈云絕構。

學詩者、毋紛然雜作諸體、欲作五律、須先取

唐明五律、工手之諸作、以熟讀、然後始攬筆

作一體、殆百首以上、如七律、五七言絕、古詩

樂府、亦皆然也、其作一體之久、自然各悟、入

其奧旨、遂至於古今衆體、莫不備、有諸我焉、

是吾徂徠先生詩教第一義也。

和韻非古也、蓋中唐元白皮陸以下之醜也、

宋元に詩なし、故に又た云ふ、詩を宋元に語るは、卑々

甚だし、卽ち詩なきを以てすとも、夫れ孰か然らずと

曰はん。

詩は敏捷を以て稱せず、精工を以て稱す、苟も精工なら

ずんば、則ち一日千首と雖も、奚を以てせん、故に吳韋

庵云ふ、詩は思を廢せず、古に十年に詠を成し、三載に

吟を卒る者あり、彼れ才に短なるに非ざるなり、特に

好句の得難きを以てのみ、今人は纔に吟咏を諳んずれば、

便ち自ら敏捷を負ふ、率爾に篇を成し、字句鄙陋なり、

豈に絶構と云はんや。

詩を學ぶ者は、紛然として諸體を雜作する母れ、五律を

作らんと欲せば、須らく先づ唐明五律の工手の作を取

り以て熟讀し、然る後ち筆を攬り、一體を作ること殆

んど百首以上なるべし、七律五七言絶、古詩樂府の如

き、亦た皆な然り、其の一體を作るの久しき、自然に各、

其の奧旨に悟入し、遂に古今の衆體、諸を我に備有せ

ざる無きに至る、是れ吾が徂徠先生の詩教の第一義なり。

和韻は古に非らず、蓋中唐、元白皮陸以下の醜なり、古

古者廣和答其來意而已、初不爲韻所縛、嚴羽卿云、和韻最害人詩、信然也、故于鱗集無一詩和韻者、而本邦學士、效尤中晚宋元之、久豈徒己欲之、又責之於人、是以雖徂徠先生、亦有不可辭者乎、間有次韻、是亦獵較之道已、學者毋效尤。

◎明詩

本邦三十年來、徂徠先生之學化被海內、是以一時後進、皆能知開元天寶後、又有明詩、因明學、唐則自然、至於盛唐、惟黃髮諸老先生、尙或守先入不移矣、固哉。

唐明之獄、不斷者久矣、余嘗斷之以兄弟之間、夫明人取材於選、效法於唐、取材於選者、與唐共其父母也、效法於唐者、以唐兄從之、

は廣和は其の來意に答ふるのみ、初より韻に縛せられず、嚴羽卿云ふ、和韻は最も人の詩を害すと、信に然り、故に于鱗の集に一詩の和韻なる者なし、而るに本邦の學士は、尤に中晚宋元ちゆうばんそうげんに效ふの久しき、豈に徒に己れ之を欲するのみならんや、又た之を人に責む、是を以て徂徠先生と雖も、亦た辭す可からざる者あるか、間、次韻あり、是れ亦た獵較の道のみ、學者は尤に效ふこと母れ。

◎明詩

本邦三十年來、徂徠先生の學化海内に被る、是を以て一時の後進は、皆な能く開元天寶の後に、又た明詩あり、明に因て唐を學ぶときは、則ち自然に盛唐に至ることを知る、惟、黃髮の諸老先生は、尙ほ或は先入を守りて、移らず、固なるかな。

唐明の獄斷ぜざる者久し、余は嘗て之を斷するに兄弟の間を以てす、夫れ明人は材を選に取り、法を唐に效ふ、材を選に取る者は、唐と其の父母を共にするなり、法を唐に效ふ者は、唐を以て之に兄從するなり、其の趣

也、其趣與唐少異者、兄弟之面不必相似也、不必相似者、以各有其性所不可變化者也、若夫事業所就、唐難爲兄、明難爲弟、

唐多大家、明多名家、唐得卽景造意、明得用事三昧、故因唐學、唐則雖如易入、其蔽也放縱淺俗、因明學、唐則雖如難入、自然明密高妙、而其覺唐易入、明難入者、學力未至也、其實則明易入、唐難入矣。

明唐以上之祖述、宋元自家之妄作、故胡蘭溪云、詩至於唐而格備、至於絕而體窮、宋人不得不變而之詞、元人不得不變而之曲、詞勝而詩亡矣、曲勝而詞亦亡矣、明不致工於作、而致工於述、不求多於專門、而求多於具體、所以度越宋元苞綜漢唐。

の唐と少異なるは、兄弟の面必ずしも相ひ似ざるなり、必ずしも相ひ似ざるは、各其の性の變化す可からざる所の者あるを以てなり、若し夫れ事業の就る所は唐は兄たり難く、明は弟たり難し。

唐には大家多く、明には名家多し、唐は景に卽いて意を造るを得、明は用事三昧を得、故に唐に因て唐を學ぶときは則ち入り易きが如しと雖も、其の蔽や放縱淺俗なり、明に因て唐を學ぶときは則ち入り難きが如しと雖も、自然に明密高妙にして、而も其の唐は入り易く、明は入り難きを覺ゆる者は、學力の未だ至らざるなり、其の實は則ち明は入り易く、唐は入り難し。

明は唐以上の祖述にして、宋元は自家の妄作なり、故に胡蘭溪云、詩は唐に至りて格備はり、絶に至りて體窮る、宋人は變じて詞に之かざるを得ず、元人は變じて曲に之かざるを得ず、詞勝ちて詩亡び、曲勝ちて詞も亦た亡ぶ、明は工を作に致さずして、工を述に致し、多を専門に求めずして、多を具體に求む、宋元を度越し漢唐を苞綜する所以なり。

明人學唐也。學正調而不學變調也。于鱗七言律，不過學此數聯，以至於斯也。學者宜熟讀。

紫氣關臨天地濶，黃金臺貯俊賢多。萬里

悲秋長作客，百年多病獨登臺。少陵句

九天閭闔開宮殿，萬國衣冠拜冕旒。雲裏

帝城雙鳳闕，雨中春樹萬人家。王維句

秦地立春傳太史，漢宮題柱憶仙郎。南州

杭稻花侵縣，西嶺雲霞色滿堂。李頎句

三山半落青天外，二水中分白鷺洲。瑤臺

含霧星辰滿，仙蟠浮空島嶼微。青蓮句

萬里寒光生積雪，三邊曙色動危旌。沙場

烽火侵胡月，海畔雲山擁薊城。祖詠句

千門柳色連青瑣，三殿花香入紫微。花迎

明人の唐を學ぶや、正調を學んで變調を學ばざるなり。于鱗の七言律は、此の數聯を學んで以て斯に至るに過ぎず。學者宜しく熟讀すべし。

〔紫氣關は天地に臨んで濶く、黃金臺は俊賢を貯ふる。こ
と多し。〕「萬里秋を悲んで、長く客と作り、百年多病獨
り臺に登る」〔少陵句〕

〔九天の閭闔宮殿を開き、萬國の衣冠冕旒を拜す。〕雲裏
の帝城雙鳳闕、雨中の春樹萬人の家。〔王維句〕

〔秦地の立春太史より傳はり、漢宮の題柱仙郎を憶ふ、
南州の杭稻花縣を侵し、西嶺の雲霞色堂に滿つ〕

李頎句

〔三山半ば落つ青天の外、二水中分す白鷺洲。〕瑤臺露を
含んで星辰滿ち、仙蟠空に浮んで島嶼微なり。〔青蓮句〕

萬里の寒光は積雪を生じ、三邊の曙色は危旌動く。〔沙
場の烽火胡月を侵し、海畔の雲山薊城を擁す〕〔祖詠句〕
〔千門の柳色青瑣に連り、三殿の花香紫微に入る。〕花は
劍佩を迎へて星初めて落ち、柳は旌旗を拂ふて露未だ
乾かず。〔岑參句〕

劍佩星初落、柳拂旌旗驚未乾。岑參句

旨哉徂徠先生選明詩以名唐後詩也、蓋唐後無詩惟有明之意、而本於李本寧後、唐而詩盛莫如明已。

于鱗名家中大家、千載惟一、故胡蘭溪云、仲默爲大家、不足、于鱗爲名家、有餘、

明初四傑

高啓 楊基 張羽 徐賁

王敬美云、高季迪才情有餘、使生弘正、李何之間、絕塵破的、未知鹿死誰手、楊

張徐故是草昧之雄、勝國餘業、不中與高作僕。

明初三張

張以寧 張光弼 張仲簡

諸體詩期卷之上

旨あるかな徂徠先生の明詩を選して、以て唐後詩と名づくるや、蓋、唐後に詩なし、惟、明あるの意にして、李本寧の唐より後にして詩の盛なるは明に如くは莫しに本づく。

于鱗は名家中の大家にして、千載惟一、一人なり、故に胡蘭溪云ふ、仲默は大家と爲して足らず、于鱗は名家と爲して餘ありと。

明初の四傑

高啓 楊基 張羽 徐賁

王敬美云ふ、高季迪は才情餘りあり、弘正李何の間に生れしめば、絶塵破的、未だ鹿の誰が手に死するを知らず、楊張徐は故に是れ草昧の雄、勝國の餘業、高が與に僕と作るに中らずと。

明初の三張

張以寧 張光弼 張仲簡

胡蘭溪云ふ、以寧は、氣骨豪上にして、國初に儔寡な

胡蘭溪云、以寧氣骨豪上國初寡、繪藻繪略讓耳、光弼仲簡亦有佳處、然率與元人唱酬、故明風當斷自高楊作始。

弘正二大家

李夢陽 何景明

又云、李獻吉詩文山斗一代、其手開秦漢盛唐之派、可謂達磨西來、獨闢禪教、又如曹溪卓錫萬衆歸依、又云、仲默氣質絕溫雅、亦有文靡於隋、韓力振之、然古文之法亡於韓、詩溺於陶、謝力振之、然古詩之法亡於謝之語、遂開一代作者門戶、彼身繫百千年運數、豈容默默以沽長厚。

弘正三才子

し、漢繪は略、讓るのみ、光弼仲簡も亦た佳處あり、然れども率ね元人と唱酬す、故に明風は當に高楊より斷じて始と作すべし。

弘正の二大家

李夢陽 何景明

又た云ふ、李獻吉の詩文は、一代に山斗す、其れ手づから秦漢盛唐の派を開く、達磨西來、獨り禪教を開くと謂ふ可し、又た曹溪の錫を卓して、萬衆歸依するが如し、又云ふ、仲默の氣質は絶はだ溫雅なるも、亦た文は隋に靡す、韓は力めて之を振ふ、然れども古文の法は韓に亡び、詩は陶に溺す、謝は力めて之を振ふ、然れども古詩の法は謝に亡ぶの語あり、遂に一代作者の門戸を開く、彼は身、百千年の運數に繫る、豈に默々として以て長厚を沽る容けんや。

弘正の三才子

李夢陽 何景明 王九思

弘正四家

李夢陽 何景明 邊貢 徐禎卿

又云、弘正竝推邊何徐李、每怪邊品第縣遠、胡得此稱、及讀獻吉送昌毅詩、是時少年誰最文、太常邊丞何舍人、仲默贈君采、亦有十年流落失邊李之句、則李何於邊不淺、余細閱當時諸家、若仲覺德涵敬夫子衡詩、皆非長華玉繼之、升之士選輩、或調正格卑、或格高調僻、獨邊視諸人、差爲諧合、不得不爾。

金陵三俊

顧璘 陳沂 王章

弘正十才子

詩體詩則卷之上

李夢陽 何景明 王九思

○弘正の四家

李夢陽 何景明 邊貢 徐禎卿

又た云ふ、弘正に邊何徐李を竝推す、毎に怪む邊の品第縣かに遠し、胡ぞ此の稱を得んと、獻吉の昌毅を送る詩を讀むに及んで、是の時少年誰か最も文なる、太常邊丞何舍人と、仲默の君采に贈るも亦た「十年流落邊李を失す」の句あり、則ち李何の邊に於ける淺からず、余、細に當時の諸家を閱するに、仲覺德涵敬夫子衡の詩の若き、皆な長に非ず、華玉繼之、升之士選の輩は、或は調正しければ格卑く、或は格高ければ調僻なり、獨、邊は諸人に視ぶれば差、諧合すと爲す、爾らざるを得ず。

金陵の三俊

顧璘 陳沂 王章

弘正の十才子

李夢陽 何景明 徐禎卿 邊貢

顧璘 鄭善夫 王九思 康海

朱應登 陳沂

又云、邊顧朱鄭諸公遺集具在、余備讀之、總之派流甚正、聲調未舒、歌行絕句時得佳篇、古風律體殊少、合作、

江南四才子

朱應登 顧璘 陳沂 王章

嘉隆七才子

李攀龍 王世貞 徐中行 宗臣

謝茂榛 吳國倫 梁有譽

又云、嘉隆竝稱七才子、要以一時制作聲氣博合耳、然其才殊有徑庭、于鱗七言律絕、高華傑起、一代宗風、明卿五七

李夢陽 何景明 徐禎卿 邊貢 顧璘 鄭善夫

王九思 康海 朱應登 陳沂

又た云ふ、邊顧朱鄭の諸公の遺集具に在り、余は備に之を讀む、之を總ぶるに、流派甚だ正しきも、聲調未だ舒びず、歌行絶句、時に佳篇を得、古風律體、殊に合作少し。

江南の四才子

朱應登 顧璘 陳沂 王章

嘉隆の七才子

李攀龍 王世貞 徐中行 宗臣 謝茂榛 吳國倫

梁有譽

又た云ふ、嘉隆に七才子を竝稱す、要するに一時の制作聲氣博合するを以てのみ、然れども其の才殊に徑庭あり、于鱗の七言律絶は、高華傑起し、一代の宗風なり、明卿の五七言律は、整密沈雄にして、駕を方ぶ可きに足れり、子相は、爽明才を以て高ぶり、子與

言律、整密、沉雄、足可方駕、子相、爽朗、以才高、子與、森嚴、以法勝、公實、續麗、茂榛

融和。

◎詩體

嚴滄浪云、作詩正須辨盡諸家體製、然後不爲旁門所惑、今人作詩、差入門戶者、正以體製莫辨也、世之技藝、猶各有家數、市雜帛者、必分道地、然後知優劣、況文章乎。

以與代相變者而論則、

風雅頌既亡、一變而爲離騷、再變而爲西漢五言、三變而爲歌行雜體、四變而爲沉

宋律詩。

以全篇無雜言、體各所由起而論則、

五言起於李陵蘇武、七言起於漢柏梁、

は森嚴、法を以て勝れたり、公實は續麗、茂榛は融和なり。

◎詩體

嚴滄浪云、詩を作るには正に須らく諸家の體製を辨じ盡すべし、然して後に旁門に惑はされず、今の人詩を作るに、門戶に差入する者は、正に體製辨する莫きを以てなり、世の技藝、猶ほ各家數あり、雜帛を市る者は必らず道地を分ちて、然る後に優劣を知る、況んや文章をや。

代と相ひ變する者を以て論ずれば則ち

風雅頌既に亡び、一變して離騷と爲り、再變して西漢の五言と爲り、三變して歌行雜體と爲り、四變して沈宋の律詩と爲る。

全篇、雜言なく、體各、由て起る所を以て論ずれば則ち

五言は李陵蘇武に起り、七言は漢の柏梁に起り、四言は漢の楚王の傅草孟に起り、六言は漢の司農谷永に起

四言起於漢楚王傅章孟、六言起於漢司農谷永、三言起於晉夏侯湛、九言起於高貴鄉公。

以得而論則

建安體 黃初體 正始體 太康體
元嘉體 永明體 齊梁體 南北朝體
唐初體 盛唐體 大曆體 元和體

以人而論則

蘇李體 曹劉體 陶體
謝體 徐庾體 沉宋體
陳拾遺體 王楊盧駱體 長曲江體
杜少陵體 李太白體 高逵夫體
孟浩然體 岑嘉州體 王右丞體
韋蘇州體 韓昌黎體 柳子厚體

り、三言は晉の夏侯湛に起り、九言は高貴郷公に起る。

時を以て論ずれば則ち

建安體 黃初體 正始體 太康體 元嘉體
永明體 齊梁體 南北朝體 唐初體 盛唐體
大曆體 元和體

人を以て論ずれば則ち

蘇李體 曹劉體 陶體 謝體
徐庾體 沉宋體 陳拾遺體 王楊盧駱體
長曲江體 杜少陵體 李太白體 高逵夫體
孟浩然體 岑嘉州體 王右丞體 韋蘇州體
韓昌黎體 柳子厚體 韋柳體 李長吉體
李商隱體 盧仝體 張籍王建體 白樂天體
元白體 杜牧體 賈浪仙體 孟東野體
杜荀鶴體

草柳體 李長吉體 李商隱體

盧仝體 張籍王建體 白樂天體

元白體 杜牧體 賈浪仙體

孟東野體 杜荀鶴體

有選體 有柏梁體 有玉臺體 有西崑

體 有香奩體 有宮體。

○選體說

按古今選體說多端、嘗閱詩叢云、世但知蕭氏文選、然吟詩稱、昭明彙纂漢後五言、爲詩選二十卷、其中必有五朝佳什、今不見矣、由此觀之、以選體爲五言、古詩通稱者、蓋本此選耶。

以雜言而論則

三五七言 半五六言 五七言

四六八言 一字至七字

有一句之歌 有兩句之歌 有三句之歌

有口號 潛確類書云、口號詩、或四句、或八句、草成而逸、就速意、宜情而已、貴在明白條暢。

諸體詩則卷之上

選體あり、柏梁體あり、玉臺體あり、西崑體あり、香奩體あり、宮體あり。

○選體說

按ずるに、古今選體の説は多端なり、嘗て詩叢を閲するに云ふ、世は但し蕭氏の文選を知る、然れども吟詩に稱す、昭明は漢後の五言を彙集し、詩選二十卷と爲す、其の中必ず五朝の佳什あらん、今見えずと此に由りて之を觀れば選體を以て五言古詩の通稱と爲す者は蓋此の選に本づくか。

○雜言を以て論ずれば則ち

三五七言 半五六言 五七言 四六八言 一字より七字に至る。

一句の歌あり、兩句の歌あり、三句の歌あり。

口號あり。 潛確類書に云ふ、口號の詩は、或は四句、或は八句、草成りて速かに就る意を達し情を寫ぶるのみ、貴は明白條暢に在り。

以雜體見樂府者而論則

風人體 藁砧體 五雜俎體 兩頭

織纈體。

以雜體落戲謔者而論則

盤中詩 回文詩 反覆詩 離合詩

建除詩 字謎詩 人名詩 卦名詩

數名詩 藥名詩 州名詩 六甲詩

十屬詩 藏頭詩 歇後詩。

○戒戲謔詩

胡元瑞云詩文不朽大業學者彫心刻腎窮晝
極夜猶懼弗窮奧渺而以游戲廢日可乎孔融
離合鮑照建除溫嶠回文傅咸集句亡補於詩
而返爲詩病自茲以降摹倣充繁字謎人名鳥
獸花木六朝才士集中不可勝數詩道之下流
學人之大戒也。

以大體而論則。

雜體の樂府に見るゝ者を以て論ずれば則ち

風人體 藁砧體 五雜俎體 兩頭織々體。

雜體の戲謔に落つる者を以て論ずれば則ち

盤中詩 回文詩 反覆詩 離合詩 建除詩 字謎詩

人名詩 卦名詩 數名詩 藥名詩 州名詩 六甲詩

十屬詩 藏頭詩 歇後詩

○戲謔の詩を戒しむ

胡元瑞云詩文は不朽の大業にして學者、心に彫し腎に刻
し晝を窮め夜を極むるも、猶ほ奧渺を窺はざるを懼る、而る
を游戲を以て日を廢して可ならんや、孔融の離合、鮑照の建
除、溫嶠の回文、傅咸の集句は、詩に補なくして、而して返つ
て詩の病と爲る、茲より以降、摹倣充に繁し、字謎人名、鳥獸
花木六朝の才子の集中に勝けて數ふべからず、詩道の下流
にして、學人の大戒なり。

大體を以て論ずれば則ち

四言古詩 楚辭 賦 樂府 五言

古詩 歌行 近體 絕句

有六句律 有六言律 有六言絕 有六

言排律 義卿按六言律絕
至子鱗亦有作

附

建安七子 建安、後漢
獻帝年號

孔融 陳琳 王粲 徐幹 阮瑀

應瑒 劉楨

二傅 晉人、父子
俱有才名

傅玄 傅咸

二潘 晉人、俱以
詩文辭稱

潘岳 潘尼

二陸 晉人、兄弟、時人語曰、
二陸入洛、三張減價

陸機 陸雲

諸體詩別卷之上

四言古詩 楚辭 賦 樂府 五言 古詩 歌行
近體 絕句

六句律あり、六言律あり、六言絶あり、六言排律あり、
按、
るに、六言律絶は、子鱗
に至ても亦た作あり

附

建安の七子 建安は、後漢
の獻帝の年號

孔融 陳琳 王粲 徐幹 阮瑀 應瑒 劉楨

二傅 晉人、父子俱に
才名あり

傅玄 傅咸

二潘 晉人、俱に詩文辭
を以て稱せらる

潘岳 潘尼

二陸 晉人、兄弟なり、時人の語に曰く、
二陸入洛に入りて、三張價を減ずと

陸機 陸雲

三三

三張晉人、兄弟、並有才名。

張載 張協 張亢

三謝宋人、靈運兄弟。

謝靈運 謝惠連 謝朓

初唐四傑文章齊名、時稱四傑。

楊炯 王勃 盧照鄰 駱賓王

唐十二名家明嘉隆間刻十二家唐詩、自此有十二名家之稱。

王勃 楊炯 盧照鄰 駱賓王

沉佺期 宋之間 陳子昂 杜審言

高適 岑參 王維 孟浩然

◎詩法

滄浪詩五法

體製 格力 氣象 興趣 音節

滄浪詩九品

三張晉人、兄弟なり、位に才名あり。

張載 張協 張亢

三謝宋人、靈運兄弟なり。

謝靈運 謝惠連 謝朓

初唐の四傑文章もて、名を齊りす、時に四傑と稱す。

楊炯 王勃 盧照鄰 駱賓王

唐の十二名家明の嘉隆の間に、十二家の唐詩を刻す、此より十二名家の稱あり。

王勃 楊炯 盧照鄰 駱賓王 沉佺期 宋之間

陳子昂 杜審言 高適 岑參 王維 孟浩然

詩法

滄浪の詩の五法

體製 格力 氣象 興趣 音節

滄浪の詩の九品

古 深 遠 長 雄渾

飄逸 悲壯 凄婉

滄浪詩二大槩

優游不迫 沉著痛快

滄浪詩一極致

入神 詩而入神至矣盛矣莫以加惟李杜得之他人得之蓋寡矣

滄浪詩先除五俗

除俗體 除俗意 除俗句 除俗字

除俗韻

白石詩四種高妙

理高妙 得而實通 意高妙 出外 想高妙 幽微

見自然高妙 非奇非怪割落文采知其妙而不如其所以妙

詩奧妙不可以言解故古人云詩有妙處在

可解不可解之間作者會心詮理偶得奧

晴隱詩則卷之上

古 深 遠 長 雄渾 飄逸 悲壯 凄婉

滄浪の詩の二大槩

優游不迫 沉著痛快

滄浪の詩の一極致

入神 詩にして神に入るは至れり以て加ふる莫し惟李杜は之を得たり他人の之を得るは蓋寡し

滄浪の詩は先づ五俗を除く

俗體を除く 俗意を除く 俗句を除く 俗字を除く 俗韻を除く

白石の詩の四種高妙

理高妙 得て實に通ず 意高妙 事を意外に出だす 想高妙 幽微を寫すこと

すが自然高妙 奇に非ず性に非ず文采を割落して其妙を知る而して其の妙なる所以を知らず

詩の奧妙は言を以て解す可からず故に古人云ふ詩に

妙處あり解すべく解す可からざるの間に在り作者心に會し理に證して偶に奧旨を得即ち作者も亦た明

旨、即作者亦不能明指示人、又胡蘭溪云、孟軻曰、不以文害辭、不以辭害意、以意逆志、是爲得之、千古談詩之妙證也。

古詩近體絕句自有難易、故滄浪云、律詩難

於古詩、絕句難於八句、七言律詩難於五

言律詩、五言絕句難於七言絕句、又胡蘭

溪云、七言古差易於五言古、五言古寥寥象渾

難於拍澹、七言古體裁屬落稍材情賸者、輒易發舒、七言律願難於五

言律、五言律現模簡直、即家數小者結構易工、七言律字句繁賡、才具宏者推做難合、

古詩不必易於律詩、

按、王敬美云、非多熟古詩、未有能以律詩高天下者也、本邦初學輩、以不讀古詩、難律詩、而又使之讀古詩、易就率爾成篇、遂是兩失已、故又敬美云、律尙不工、豈能工古、亦可以爲本邦初學輩道之矣。

不熟古詩、弗能工唐體、故楊載云、取材於別

二人に指示する能はずと、又た胡蘭溪云、孟軻曰く、文を以て辭を害せず、辭を以て意を害せず、意を以て志を逆ふと、是れ之を千古詩を談するの妙證を得たりと爲すなり。

古詩近體絕句には自ら難易あり、故に滄浪云、律詩は

古詩より難く、絶句は八句より難く、七言律詩は五言

律詩より難く、五言絶句は七言絶句より難しと、又た

胡蘭溪云、七言古は、差、五言古より易しと、五言古

渾然にして、造詣深き者に非ずんば拍澹に難し、七言古は、七言律は願て五言律より難し、五言律は、規模簡直、即ち家數小なる者も、結構工なり易し、

七言律は、字句繁賡にして、縦ひ才是宏き者も、推做合ひ難し。

○古詩必らずしも律詩より易からず。

按ずるに、王敬美云、多し古詩に熟するに非ずんば、未だ能く律詩を以て天下に高ぶる者あらずと、本邦の初學輩は、古詩を讀まざるを以て、律詩を難んず、而して又た之をして古詩は就し易しと謂ひ、率爾に篇を成さしめば、遂に是れ兩失のみ、故に又た敬美云、律すら尙ほ工ならず、豈に能く古に工ならんやと、亦た以て本邦初學輩の爲めに之を道ふ可し。

古詩に熟せずんば唐體に工なる能はず、故に楊載云、

選、效法於唐。又馬庸云、枕藉騷選、死生李杜矣。

◎命題

古者無題、感物以拙辭、既感物、物卽爲之題、上古諸歌不其然乎、是後世所以命題也、詩不必著題、必著題則局矣、故滄浪云、不必著題。

名題序引、雖古今異宜、須觀唐人及明人以損益矣、若夫僻題、則雖盛唐以上莫用之、矧乎後世俚俗名題、故滄浪云、唐人命題、言語亦自不同、雜古人之集而觀之、不必見詩、望其題引而知其爲唐人今人矣、
今人、宋人也。

杜詩多篇成後造題者、故王敬美云、秋興

材を選に取り、法を唐に效ふと、又た馬庸云ふ、騷選を枕藉し、李杜に死生すと。

◎命題

古は題なし、物に感じ以て辭を拙んづ、既に物に感ず、物は即ち之が題たり、上古の諸歌は、其れ然らずや、是れ後世の命題ある所以なり。

詩は題に著くを必とせず、題に著くを必とせば則ち局す、故に滄浪云ふ、題に著くを必とせずと。

名題序引は、古今宜しきを異にすと雖も、須らく唐人及び明人を觀て、以て損益すべし、若し夫れ僻題は、則ち盛唐以上と雖も之を用ゆるなし、矧んや後世俚俗の名題をや、故に滄浪云ふ、唐人の命題は言語も亦た自ら同じからず、古人の集に雜へて之を觀るに、必ずしも詩を見ず、其の題引を望んで其の唐人今人たるを知る、
今人は、宋人なり。

杜の詩は、篇成りて後ち題を造る者多し、故に王敬美云

八首、寥寥難繼、每每思之未得其解、忽悟少陵諸作多有漫興、時於篇中取題、意與不局。

一題而作數首、以趣意多端非一絕一律所能盡也、本邦初學輩、強作數首、其趣意未必異也、雖多奚以爲。

一字題忌題字出詩中說、相傳者尙矣、蓋有以也、然華人詩式所不載、余意咏物詩有言用不言名說、忌出題字於詩中、若夫一字題亦皆咏物已、是以本邦摺紳先生、嘗爲初學戒之者也、至良工則何忌之有、唐人諸作可以見矣。

胡蘭溪云、昌穀云、歌聲雜而無方、行體疎而不澹、引以抽其臆、吟以達其情、此大槩言

ふ、秋興八首は、寥寥として繼ぎ難し、毎々之を思ふて、未だ其の解を得ず、忽ち悟る、少陵の諸作、多く漫興あり、時に篇中に於て題を取り、意興局せず。

一題にして數首を作るは、趣意多端にして、一絶一律の能く盡くす所に非ざるを以てなり、本邦の初學輩は、強ひて數首を作る、其の趣意未だ必ずしも異ならず、多しと雖も奚を以てせん。

一字題、題の字詩中に出づるを忌むの説、相傳ふる者尙し、蓋、以へあるなり、然れども華人の詩式に載せざる所なり、余意ふに咏物の詩に、用を言ひて名を言はざる説あり、題の字を詩中に出だすを忌む、若し夫れ一字題も亦た皆な咏物のみ、是を以て本邦の摺紳先生、嘗て初學の爲めに之を戒むる者なり、良工に至りては、則ち何の忌むことか之れ有らん、唐人の諸作以て見る可し。

胡蘭溪云、昌穀云、歌は聲雜にして方なし、行は體疎にして澹らず、引は以て其の臆を抽き、吟は以て其の情を達すと、此れ大槩に之を言ふのみ、漢魏の歌行、

之耳、漢魏歌行吟引率可互換、唐人稍別體裁、然亦不甚遠也、然歌行吟引尙或然矣、其餘詩名之多、豈可盡混之乎、今以舊解及聲音者分之體裁、本邦詞人尤當用心聲音爾。

- 歌情揚辭遠、聲音高暢謂之歌、
- 行情順辭直、聲音調亮謂之行、
- 謠情調辭寓、聲音質俚謂之謠、
- 唱與歌行相通、
- 賦情感辭老、音長聲絕謂之賦、
- 引情長辭著、聲音平永謂之引、
- 清情逸辭激、聲音清壯謂之清、
- 舞情壯辭激、聲音清壯謂之舞、
- 辭情長辭雅、聲音平亮謂之辭、
- 謳情揚辭直、聲音高放謂之謳、
- 吟情抑辭鬱、聲音沉細謂之吟、
- 曲情密辭婉、聲音密細謂之曲、
- 風情切辭遠、聲音古淡謂之風、
- 樂情和辭直、聲音舒緩此即樂歌、
- 解與歌曲相通、
- 弄情活辭麗、聲音圓壯謂之弄、
- 舞情通此即舞、
- 怨情沉辭鬱、聲音凄斷謂之怨、
- 騷情深辭鬱、而極其憤此即騷、

諸體詩則卷之上

吟引は率ね互に換ふ可し、唐人稍體裁を別つ、然れども歌行吟引は尙ほ或は然らん、其餘、詩名の多き、豈に盡く之を混す可けんや、今舊解の聲音に及ぶ者をして之が體裁を分つ、本邦の詞人は、尤も當に心を聲音に用ゆべきのみ。

- 歌情揚り辭遠し、聲音高暢なる、之を歌と謂ふ。
- 行情順に辭直に、聲音調亮なる、之を行と謂ふ。
- 謠情調に辭寓し、聲音質俚なる、之を謠と謂ふ。
- 唱歌曲と、樂歌、情和き辭直く、聲音舒緩なる、此れ則ち樂歌なり。
- 賦音長く聲絶ゆ、解、歌曲、情長く辭著、聲音平永なる、之を引と謂ふ。
- 清情活に辭麗に、聲音圓壯なる、之を清と謂ふ。
- 舞情通じ辭麗に、聲音節に應ず、此れ即ち舞なり。
- 怨情沉み辭鬱し、聲音凄斷なる、之を怨と謂ふ。
- 騷情深く辭鬱して、其の憤を極むる、此れ即ち騷なり。
- 吟情抑へ、辭鬱し、聲音沉細なる、之を吟と謂ふ。
- 曲情密に辭婉に、聲音密細なる、之を曲と謂ふ。
- 風情切に辭遠く、聲音古淡なる、之を風と謂ふ。
- 樂情和き辭直く、聲音舒緩なる、此れ則ち樂歌なり。
- 解情長く辭著、聲音平永なる、之を引と謂ふ。
- 弄情活に辭麗に、聲音圓壯なる、之を清と謂ふ。
- 舞情通じ辭麗に、聲音節に應ず、此れ即ち舞なり。
- 怨情沉み辭鬱し、聲音凄斷なる、之を怨と謂ふ。
- 騷情深く辭鬱して、其の憤を極むる、此れ即ち騷なり。

賦辭語富麗、事意詳盡此即賦、

操情堅辭確、匪窮不失謂之操、

鹽與行吟曲引相類、

篇情明事備、不遺餘意謂之篇、

思思必有因、非徒懷憤、

題物、積

咏題、粘

挽壽、似

賀意似撰查、

應制氣欲嚴肅、辭貴典麗、

唐人律絕樂府題略解唐人律絕樂府多習作者或至題意難解者苦焉今

考有略解者名題書以抄出且古題新題各有次序

洛陽道實繁華

長安道同上

關山月邊詞

折楊柳宮怨、又別離詞

梅花落情、闕

隴頭水詞、邊

出塞同上

賦辭語富麗にして、事意詳盡なる此れ即ち賦なり。操情堅く辭確に、匪窮するも失はず、之を操と謂ふ。鹽行吟曲引。篇情明かに事備、餘意を遺さず、之を篇と謂ふ。思思は必ず因あり、徒らに懷憤す。題物を積む、咏に粘する。挽壽詩に似たるを忌む。賀撰者に似た、應制辭は典麗を貴ぶ。

唐人の律絶樂府題略解唐人の律絶樂府多し、習ひて作る者む今略解ある者を名題の書に考へ、以て抄出す、且つ古題新題は各々次序あり。

洛陽道繁華をいふ。

長安道同上。

關山月同上。

折楊柳宮怨、又は別離の詞。

梅花落情、闕。

隴頭水同上。

出塞同上。

入塞 同上 ○以上變漢橫吹曲古題

○臨高臺 登望

巫山高 旅懷又思人作 ○以上變漢橫吹曲古題

○淶水曲 豔曲○琴曲

○江南曲 士女情○相和曲

○明妃曲 王昭君事○吟嘆曲有

○楚妃怨 楚宮詞○吟嘆曲有

○銅雀臺 魏武

從軍行 征伐○以上變平調曲古題

魏宮詞 銅雀臺事○其題名已

銅雀妓 同上

○相逢行 娼妓少年類相逢相值事○清調曲古題

○清平調 合清調平調者唐李白爲之祖

○隴西行 邊詞○琴豔

詩體詩則卷之上

入塞 上に同じ ○以上は漢の橫吹曲の古題を襲ぐ

○臨高臺 登望の詞。

巫山高 旅懷又た人を思ふ作 ○以上は漢の短笛鑢歌の古題を襲ぐ

○淶水曲 豔曲○琴曲の古題を襲ぐ

○江南曲 士女の情○相和曲の古題を襲ぐ

○明妃曲 王昭君の事○吟嘆曲に王明君あり、少しく其の題名を變ずるのみ

○楚妃怨 楚宮の詞○吟嘆曲に楚妃あり、此れ嘆を襲じて繼と爲す

○銅雀臺 魏武

從軍行 征伐○以上は平調曲の古題を襲ぐ

魏宮詞 銅雀臺の事なり、惟其の題名を變ずるのみ

銅雀妓 上に同じ臺を變じて妓と爲す

○相逢行 娼妓少年の類相ひ逢ひ相ひ値ふ事○清調曲の古題を襲ぐ

○清平調 清調平調を合する者なり、唐の李白之が祖たり

○隴西行 邊詞○琴調曲の古題を襲ぐ

三一

玉階怨宮詞

長門怨陳后事

婕妤怨班姬事○以上楚調曲古題

長信怨同上○長信宮名、婕妤爲長信

○子夜歌四時閨情

讀曲歌豔詞○以上雙清商吳聲古題

○烏夜啼閨情

采蓮曲豔曲

鳳臺曲術史事○以上雙清商西曲古題

估客行商賈事○四曲有估客樂此變樂爲行

○自君之出矣閨情

王孫遊別意

長相思閨情

古歌擬古詞

○玉階怨宮詞

長門怨陳后事

婕妤怨班姬の事○以上は楚調曲の古題を襲ふ

長信怨上に同じ○長信は宮の名なり、婕妤を襲じて長信と爲す

○子夜歌四時の閨情

讀曲歌豔詞○以上は清商吳聲の古題を襲ふ

○烏夜啼閨情

采蓮曲豔曲

鳳臺曲術史の事なり○以上清商西曲の古題を襲ふ

估客行商賈の事なり○四曲に估客樂あり此れ樂を襲じて行と爲す

○自君之出矣閨情

王孫遊別意なり

長相思閨情

古歌擬古の詞なり

古別離 別離曲

古曲 古意

古樂府 同上

樂府 同上

閨怨 成婚詞

春怨 怨詞

桃花曲 桃花流水意

夜夜曲 宮詞

妾薄命 失寵詞

步虛詞 有足音人不見仙詞

千里思 思遠○以上雜曲古題

○長干行 盛詞○長干里名隋樂有長干曲變曲爲行

古調 爲意作○雜曲有古曲古歌古絕句

古怨 古調言怨○雜曲有古怨歌

諸體詩則卷之上

古別離 別離曲なり

古曲 古意なり

古樂府 同上

樂府 同上

閨怨 成婚詞なり

春怨 怨詞なり

桃花曲 桃花流水の意なり

夜々曲 宮詞

妾薄命 寵を失ふ詞なり

步虛詞 足音あり、人を見えず仙詞

千里思 遠を思ふ○以上は雜曲の古題を襲ふ

○長干行 盛詞なり、○長干は里の名、隋樂に長干曲あり、曲を變じて行と爲す

古調 寓意の作なり、○雜曲に古曲古歌古絶句あり

古怨 古調繼を言ふ○雜曲に古怨歌あり

日本詩話叢書

古詞 別意○雜曲
有古歌古曲。

少年行 游俠○雜曲
長安少年行有。

九曲詞 邊詞○雜曲
有九曲歌有。

栖鳥曲 閨情○雜曲
有晚栖鳥有。

古意 閨情○雜曲
有淫思古意。

漢苑行 苑中事○雜
曲有上林有。

臨池曲 曲池○雜曲
有池水有。

獨夜詞 閨詞○雜曲
有獨處怨有。

樂府雜詩 古意○雜曲
有樂府歌古樂府。

怨辭 情閨

平蕃曲 邊詞

塞下曲 同上

青樓曲 妓女事

青樓怨 同上

三四

古詞 別意○雜曲
に古歌古曲あり。

少年行 游俠○雜曲
長安少年行有。

九曲詞 邊詞○雜曲
に九曲歌有あり。

栖鳥曲 閨情○雜曲
に晚栖鳥有あり。

古意 閨情○雜曲
に淫思古意あり。

漢苑行 苑中の事○雜
曲有上林有。

臨池曲 曲池○雜曲
に池水有あり。

獨夜詞 閨詞○雜曲
に獨處怨有あり。

樂府雜詩 古意○雜曲
に樂府歌古樂府あり。

怨辭 情閨

平蕃曲 邊詞

塞下曲 同上

青樓曲 妓女の事
なり。

青樓怨 同上

伊州歌詞

踏歌詞上元夜事大塊女の歌なり

涼州詞征伐事

出塞行詞

塞下同上即塞下曲

昭陽曲漢宮事

成都曲言蜀地俗以上唐新曲

○山鷓鴣詞詞

洞仙謠桃源事

穆護沙邊思

金殿樂宮中詞

牆頭花詞

幼女詞豔曲

拜新月同上

諸體詩則卷之上

伊州歌詞

踏歌詞上元の夜の事、大塊女の歌なり

涼州詞征伐の事

出塞行詞

塞下上に同じ、即ち塞下曲なり

昭陽曲漢宮の事なり

成都曲蜀地の俗を言ふ、以上唐の新曲なり

○山鷓鴣詞詞

洞仙謠桃源の事

穆護沙邊を思ふ

金殿樂宮中の詞

牆頭花詞

幼女詞豔曲

拜新月同上に同じ

甘州邊詞浪淘沙閩思洵邊也、詞如浪盡沙也。胡渭州詞大酺天子封禪天下賜酺。蓋羅逢邊詞竹枝詞旅情蜀中事、中唐劉禹錫以下有之。楊柳枝多言離情、是亦中唐以下○以上唐雜樂。浣紗女西施石俱越女西子事○唐雜樂有浣紗沙。

咏物老杜爲第一、故胡蘭溪云、咏物起自

六朝、唐人沿襲、雖風華競爽、而獨造未聞、

惟杜諸作、自開堂奧、盡削前規、

咏物在切不切之間、故又云、咏物著題、亦

自無嫌于切、第單欲其切、易易耳、不切而

切、切而不覺其切、此一關、前人不輕拈破、

甘州邊詞浪淘沙閩思洵邊也、浪淘沙邊、洵是邊也、詞如浪盡沙也。胡渭州詞大酺天子封禪天下賜酺。蓋羅逢邊詞竹枝詞旅情蜀中事、中唐劉禹錫以下有之。楊柳枝多言離情、是亦中唐以下○以上唐雜樂。浣紗女西施石俱越女西子事○唐雜樂有浣紗沙。

咏物は老杜を第一と爲す、故に胡蘭溪云ふ、咏物は六

朝より起る、唐人沿襲し、風華を競ふと雖も、而も

獨造は未だ聞かず、惟、杜の諸作は自ら堂奥を開き、盡く前規を削る。

咏物は切不切の間に在り、故に又云ふ、咏物、題に著

くも亦た自ら切に嫌なし、第、單に其の切を欲すれば易々たるのみ、切ならずして切に、切にして其の切

を覺えず、此の一關、前人は輕しく拈破せざるなり

也。

咏物若元美六十餘篇、前古所無、故又云、

咏物七言律、唐自花宮仙梵、外絕少佳者、

國初季迪梅花、孟載芳草、海叟白燕、皆膾

炙人口、格調卑卑、僅可主盟、元宋、獻吉題

竹、仲默鱗魚、于鱗雙塔、始爲絕到、元美至

六十餘篇、則前古所無也。

◎句法

古詩不當以重複論

嚴滄浪云、十九首青青河畔草、鬱鬱園中柳、
盈盈樓上女、皎皎當窗牖、娥娥紅粉粧、織織
出素手、一連六句皆用疊字、今人必爲句法
重複之甚、古詩正不當以此論之也。

詩有句變

諸體詩期卷之上

咏物元美の六十餘篇の若きは、前古の無き所なり、故に
又た云ふ。咏物の七言律、唐は花宮仙梵より外、絶え
て佳なる者なし、國初の季迪が梅花、孟載が芳草、海
叟が白燕は、皆人口に膾炙す、格調卑々、僅かに元宋
に主盟たる可し、獻吉が竹に題する、仲默が鱗魚、于
鱗が雙塔は、始めて絶到と爲す。元美、六十餘篇に至
るは、則ち前古の無き所なり。

◎句法

古詩は當に重複を以て論ずべからず

嚴滄浪云ふ、十九首に「青青たり河畔の草、鬱々たり園中
の柳、盈盈たる樓上の女、皎々として窓牖に當る、娥々
たる紅粉粧、織々として素手を出だす、」は一連六句、皆
な疊字を用ゆ、今人は必ず句法重複の甚だしきと爲さ
ん、古詩は正に此を以て之を論ずべからず。

詩に句變あり

三七

古人云、詩有句變、情景事意是也、四者相間不得、碎雜、相從不得、過三聯、若全篇純一者不拘。

詩有句法

又云、作詩有句法、平淡不流於淺俗、奇古不鄰於怪僻、題咏不窘於物象、敘事不病於聲律、比興深者通物理、用事工者如己出、格見於成篇、渾然不可鑄、氣出於言外、浩然不可屈、此作詩之法也。

起結及對句、自有難易

徐伯魯云、作詩論其難易、則對句易、工、結句難、工、發句尤難、工、七言視五言爲難、學者知諸。

◎造語

古人云、詩に句變あり、情景事意是なり、四者相間ありて碎雜するを得ず、相從ふて三聯に過ぐるを得ず、若し全篇純一なる者は、拘はらず。

詩に句法あり

又た云ふ、詩を作るに句法あり、平淡にして淺俗に流れず、奇古にして怪僻に鄰らず、題咏物象に窘まず、敘事、聲律に病まず、比興深き者は物理に通じ、用事工なる者は己より出づるが如し、格、成篇に見はれ、渾然として鑄すべからず、氣は言外に出で、浩然として屈すべからず、此れ詩を作るの法なり。

起結及び對句は自から難易あり

徐伯魯云、詩を作るに、其の難易を論するときは、則ち對句は工なり易く、結句は工なり難し、發句は尤も工なり難し、七言は五言に視ぶれば難しと爲す、學者語を知れ。

◎造語

須臾用古人好語

室中語云、初學詩者須臾用古人好語、或兩字、或三字、久而自出肺腑、縱橫出沒用亦可、不用亦可。

杜用詩書語

黃常明詩話云、子美多用經書語、如曰車麟、馬蕭蕭、未嘗外入一字、如曰濟潭鱸發發、春草鹿呦呦、皆渾然嚴重、如入天陞赤墀、植璧鳴玉、法度森然、後人不敢用者、豈所造語膚淺不類耶。

杜用經中全句

古人云、杜少陵好用經中全句爲詩、如病橘云、雖多亦奚爲、又遺悶云、致遠思恐泥、又如丹青不知老將至、富貴於我如浮雲之類。

須臾用古人好語を挿用すべし

室中語に云ふ、初めて詩を學ぶ者は、須臾用古人の好語を挿用すべし、或は兩字、或は三字、久しくして自ら肺腑より出づ、縱橫出沒、用ふるも亦た可なり、用ひざるも亦た可なり。

杜、詩書の語を用ゆ

黃常明詩話に云ふ、子美、多く經書の語を用ゆ、「車麟々馬蕭々」と曰ふが如き、未だ嘗て外に一字を入れず。「濟潭鱸發々、春草鹿呦々」と、皆渾然嚴重にして天陞赤墀に入りて璧を植る玉を鳴らすが如し、法度森然たり、後人敢て用ひざる者は、豈んと造る所の語、膚淺にして類せざるか。

杜、經中の全句を用ゆ

古人云ふ、杜少陵、御經中の全句を用ひて詩と爲すを好むと、病橘に云ふ、「多しと雖も亦た奚をかせん、又た悶を遣るに云ふ、「遠を致しては恐らくは泥まん」とを思ふ」の如き、又た、「丹青知らず老の將に至らんとするを」、「富貴は我に於て浮雲の如し」の類の如し。

◎下字

不_レ下_レ無用字

范德機云、作詩不可使一字無用、須是字字少不得、又不可一字不佳、須是字字穩當、又不可使一字無來歷、字字要有出處、要無鄙俗。

詩有字變

古人云、詩有字變、虛實死活是也、一句內忌併、一聯內非對者忌繁、隔聯忌字相似、一篇忌句相似。

七言可剪上二字亦不妨

胡蘭溪云、李駁何云、七言律若可剪二字、言何必七也、此論不起于李、前人三令五申久矣、顧詩家肯綮、全不係此、作詩大法、惟在格

◎字を下す

無用の字を下さず

范德機云、詩を作るに、一字をして無用ならしむべからず、須らく是れ字々少くことを得ざるべし、又た一字佳ならざる可からず、須らく是れ字々穩當なるべし、又た一字をして來歴なからしむ可からず、字々出處あらんことを要し、鄙俗無からんことを要す。

詩に字變あり

古人云、詩に字變あり、虛實死活是なり、一句の内は併ぶことを忌み、一聯の内は對に非ざる者は繁きを忌み、隔聯は字の相似たるを忌み、一篇は句の相似たるを忌む。

七言上の二字を剪る可きも亦た妨げず

胡蘭溪云、李は何を駁して云ふ、七言律、若し二字を剪る可くんば、言何ぞ必ずしも七にせんと、此の論は李に起らざるも、前人の三令五申すること久し、顧ふに詩家の肯綮、全く此に係らず、詩を作るの大法は、惟だ格律精

律精嚴詞調穩儼使句意高遠縱字字可剪
 何害其工昔魯昭公「一室莫多」句其類
 例之即八句無不可剪作五言者又如江間
 波浪兼天湧塞上風雲接地陰五更鼓角聲
 悲壯三峽星河影動搖等句上二字皆可剪
 亦皆杜句最高者曷嘗坐此減價即如宋人
 爲看竹因來野寺獨行春偶過溪橋上下粘
 帶不可動搖而醜拙愈甚自詩家有此論舉
 世無不謂然甚矣獨見之寡也。

杜句中用字不足學

又云老杜好句中疊用字惟落花游絲妙絕
 此外如高江急峽小院迴廊皆排比無別妙
 處又如桃花細逐楊花落便下襄陽向洛陽

嚴詞調穩儼在在句意而高遠ならしめば、縦ひ
 字々對る可きも、何ぞ其の上を寄せん、骨盤卑陋ならば
 一字のこすへき莫しと雖も、何ぞ其の排を却はん、老杜
 の「風急に天高し」の如き、乃ち唐の七言律の第一なり、
 今之を以て之を例するに、即ち八句、剪りて五言と作す
 可からざる者なし、又た「江間の波浪は天と湧き、塞上
 の風、は地に接して陰る」「五更の鼓角聲悲壯、三峽の
 星河影動搖」等の句の上の二字は皆剪る可きも、亦た
 皆な杜の句の最も高き者なり、曷嘗て此に坐して價
 を減ぜんや、即ち宋人の「竹を看るが爲めに野寺に來る
 に因りて、獨り春を行りて偶ま溪橋を過ぐ」の如き、上下
 粘帶して動搖す可からず、而して醜拙無甚だし、詩家に
 此の論ありてより、世を舉げて然りと謂はざるなし、甚
 しいかな獨見の寡きこと。

杜の句中に字を疊用するは、凡そに足らざる

又た云ふ老杜、好んで句中に字を疊用す、惟「落花游
 絲」のみ妙なり、此の外、高江急峽、「小院迴廊」の如き、
 皆な排比、妙處に關するなし、又た「桃花は細に楊花を
 逐ふて落ち」「便ち襄陽を下つて洛陽に向はん」の類の

之類、頗令人厭、唐人絕少述者、而宋世黃陳、
 兢相祖襲、國朝獻吉病亦坐斯、嘉隆一洗此、
 類、併諸拗澁變體、而獨取其雄壯闊大句法、
 而後杜之骨力風格始見、眞善學下惠者。

◎雙字

律絕中用雙字法

古人云、用雙字於律絕法、對句及一句中之
 外、忌兩處用之、如古體則不拘矣。

雙字不虛發

雪浪齋云、古人下連綿不虛發、如老杜野日
 荒荒白、江流泯泯清、造微入妙。

李嘉祐卻學摩詰水田飛白鷺

胡蘭溪云、世謂摩詰好用他人詩、如漠漠水
 田飛白鷺、乃李嘉祐語、此極可咲、摩詰盛唐

如き、頗る人をして厭はしむ、唐人は絶えて述者少くし
 て、宋の世に黃陳競ふて相ひ祖襲す、國朝、獻吉の病も
 亦た斯に坐す、嘉隆は、此人の類、併に諸の拗澁變體を一
 洗して、獨り其の雄壯闊大の句法を取る、而る後ち、杜
 の骨力風格始めて見はる、眞に善く下惠を學ぶ者なり。

◎雙字

律絕中に雙字を用ゆる法

古人云、雙字を律絕に用ゆるの法は、對句及び一句中
 の外は、兩處に之を用ゆるを忌む、古體の如きは則ち拘
 はらず。

雙字は虚く發せず

雪浪齋云、古人連綿を下すに、虚く發せず、老杜の「野
 日荒々として白く、江流泯々として清し」の如き、微に
 造り妙に入る。

李嘉祐、卻て摩詰が水田に白鷺飛ぶを獨ふ

胡蘭溪云、世に謂ふ摩詰は好んで他人の詩を用ゆる、漠
 々たる水田白鷺飛ぶの如き乃ち李嘉祐の語と、此れ極
 めて咲ふ可し、摩詰は盛唐にして嘉祐は中唐なり、安く

嘉祐中唐安得前人預儉來者此正嘉祐用
摩詰詩宋人習見摩詰偶讀嘉祐集得此便
爲奇貨訛謬相承亡復辨訂千秋之下賴予
雪冤摩詰有靈定當吐氣

◎壓韻

押韻要穩健

古人云、押韻要穩健、則一句有精神、如柱礎
欲其堅牢。

仄韻詩不拘平仄

王元美云、有用仄體者、其說與拗體相類、然
發興措辭則奇健矣、如長孫輔山家、云、獨訪
山家歇、還涉茅屋斜、連隔松葉、主人聞語未
開門、繞籬野菜飛黃蝶、皆仄韻、而句中第二
六字、皆不粘也。

諸體詩則卷之上

んぞ前人預め來者を儉むことを得んや、此れ正に嘉祐
が摩詰の詩を用ゆるなり、宋人は摩詰を習見し、偶嘉
祐の集を読み、此を得て便ち奇貨と爲し、訛謬相ひ承け、
復た辨訂するに亡し、千秋の下、予に頼りて冤を雪ぐ、摩
詰靈あらば、定めて當に氣を吐くべし。

◎壓韻

押韻は穩健を要す

古人云ふ、押韻は穩健を要すれば、則ち一句精神あり、
柱礎の其の堅牢を欲するが如し。

仄韻の詩は平仄に拘はらず

王元美云ふ、仄體を用ゆる者あり、其の説は拗體と相類
す、然れども興を發し辭を措くときは、則ち奇健なり、
長孫輔の山家に、「獨り山家を訪ふて歇で還た渉る、茅
屋斜に連つて松葉を隔つ、主人語を聞きて未だ門を開
かず、籬を繞る野菜黃蝶飛ぶ」と云ふが如き、皆な仄韻
にして句中の第二六の字皆な粘せざるなり。

五言宜仄韻起

胡蘭溪云、仄起宜五言、不宜七言也。

首句用他韻法、不可學

王敬美云、首句出韻、晚唐作、備、宋人濫觴、尤不可學。

古詩仄韻、上句末用仄字格

古人云、五七言古詩仄韻者、上句末字類用平聲、如杜子美多用仄、如玉華宮、哀江頭、諸作、槩亦可見、其音調起伏頓挫、獨爲超健。

◎用事

明人以故事越宋繼唐

王敬美云、今人作詩、必入故事、有持清虛之說者、謂盛唐詩、卽景造意、何嘗有此、是則然矣、然亦一家言、未盡古今之變也、古詩兩漢

五言は仄韻起に宜し

胡蘭溪云ふ、仄起は五言に宜し、七言に宜しからざるなり。

首句に他韻を用ゆる法は學ぶ可からず

王敬美云ふ、首句の出韻は、晚唐偁を作し、宋人濫觴す、尤も學ぶ可からず。

古詩の仄韻に上句の末に仄字を用ゆる格

古人云ふ、五七言古詩仄韻の者は、上句の末の字、類用平聲を川ゆ、杜子美の如き多く仄を川ゆ、玉華宮、哀江頭の諸作の如き、槩ね亦た見る可し、其の音調起伏頓挫、獨り超健と爲す。

◎用事

明人は故事を以て宋を越え唐に繼ぐ

王敬美云ふ、今人詩を作るに必ず故事を入る、清虛の説を持する者あり、謂ふ盛唐の詩は景に卽いて意を造る、何ぞ嘗て此あらんと、是は則ち然り、然れども亦た一家の言にして未だ古今の變を盡さず、古詩は、兩漢以來、曹子建出でて始めて宏肆を爲し、多く情態を生ず、此れ

以來曹子建出而始爲宏肆、多生情態、此一變也、自此作者多入史語、然不能入經語、謝靈運出而易辭、莊語無所不爲用矣、剪裁之妙、千古爲宗、又一變也、中間何庾加工、沉宋增麗、而變態未極、七言猶以間雅爲致、杜子美出而百家稗官、都作雅音、馬浮牛溲、咸成鬱致、於是詩之變極矣、子美之後、而欲令人毀觀、故張空拳以當市肆、萬人之觀、必不能也、其援引不得、不日加而繁、然病不在故事、願所以用之何如耳、善使故事者、勿爲故事所使、如禪家云、轉法華、勿爲法華轉、使事之妙、在有而若無、實而若虛、可意悟、不可言傳、可力學得、不可倉卒得也、宋人使事最多、而最不善使、故詩道衰、我朝越宋繼唐、正以有

一變なり、此より作者は多く史語を入る、然れども經語を入るゝ能はず、謝靈運出でて易辭莊語用を爲さざる所なし、剪裁の妙、千古、宗と爲す、又た一變なり、中間に何庾工を加へ、沉宋康を増し、而して變態未だ極らず、七言は猶ほ間雅を以て致と爲す、杜子美出でて、百家稗官都て雅音と作る、馬浮牛溲咸成鬱致を成す、是に於て詩の變極れり、子美の後にして、人をして觀故を毀り空拳を張りて、以て市肆萬人の觀に當らしめんと欲するも、必ず能はざるなり、其の援引は、日に加へて繁からざるを得ず、然れども病は故事に在らず、之を用ゆる所以の如何を顧るのみ、善く故事を使ふ者は、故事に使はるゝ勿れ、禪家に法華を轉じて、法華に轉ぜらるゝ勿れと云ふが如し、事を使ふの妙は、有れども無きが如く、實れども虚きが若く、意悟すべくして、言傳すべからず、力學して得べくして、倉卒に得べからざるに在るなり、宋人、事を使ふ最も多くして、最も善く使はず、故に詩道衰ふ、我が朝は宋を越え唐に繼ぐは、正に豪華數輩の使事の三昧を得る有るを以てのみ、第、恐らくは二十年の後必ず厭ふて掃除する者あらんと、則ち其の濫觴は末弩之を爲さん。

豪傑數輩得使事三昧耳、第恐二十年後必有厭而掃除者、則其濫觴末弩爲之也。

東坡山谷爲故事使

胡蘭溪云、禪家戒事理二障、余戲謂宋人詩病政坐此、蘇黃好用事而爲事使、事障也、程邵好談理、爲理縛、理障也。

用故事初盛亡

又云、用事之工起於太冲詠史、唐初王楊沉宋漸入精嚴、至老杜苞孕汪洋錯綜變化、而美善備矣、用事之僻始見商隱諸篇、宋初楊李錢劉愈流綺刻、至蘇黃堆疊詼諧粗疎詭譎、而陵夷極矣。

古體小言姑置故事

又云、詩自摸景述情外、則有用事已、用事非

東坡山谷は故事に使はる

故蘭溪云、禪家、事理の二障を戒しむ、余戲に謂ふ、宋人の詩病は政に此に坐す、蘇黃は事を用ゆるを好んで、事に使はる、事障なり、程邵は理を談ずるを好んで、理に縛せらる、理障なり。

故事を用ゆる初盛亡

又云、事を用ゆるの工なるは、太冲の詠史に起る、唐初、王楊・沈宋、漸く精嚴に入る、老杜に至りては、苞孕汪洋、錯綜變化して、美善備はれり、事を用ゆるの僻は、始めて商隱の諸篇に見はる、宋初、楊李・錢劉は愈々綺刻に流る、蘇黃に至りて、堆疊詼諧粗疎詭譎にして、陵夷極れり。

古體小言は姑らく故事を置く

又云、詩は景を摸し情を述るよりの外は、則ち用事

正體然景物有限格調易窮、一律千篇、祇供厭厭、欲觀人筆力材譜、全在阿堵中、且古體小言、姑置可也、大篇長律、非此何以成章。

一句用兩故事不妨

王敬美云、談藝者有謂、七言律一句不可兩入故事、一篇中不可重犯故事、此病犯者、故少、能拈出亦見精嚴、然吾以爲、皆非妙悟也、作詩到神情傳處、隨分自佳、下得不覺痕迹、縱使一句兩入、兩句重犯、亦自無傷、如太白峨嵋山月歌、四句入地名者、五然、古今目爲絕唱、殊不厭重、蜂腰鶴膝、雙聲疊韻、休文三尺法也、古今犯者不少、寧盡被汰邪。

一對用一故事

碧溪云、律詩有一對通用一事者、杜詩更尋

あるのみ、用事は正體に非ず、然ども景物は限りあり格調は窮り易し、一律千篇、祇に厭厭に供す、人の筆力材譜を觀んと欲せば、全く阿堵の中に在り、且つ古體小言は姑らく置いて可なり、大篇長律は此に非ずんば何を以て章を成さん。

一句に兩故事を用ゆることは妨げず

王敬美云、藝を談ずる者謂へるあり、七言律に、一句に故事を兩入す可からず、一篇中に故事を重犯す可からず、此の病、犯す者故に少し、能く拈出するも、亦た精嚴を見る、然れども、吾れ以爲へらく皆な妙語に非ずと詩を作りて神情傳はる處に到れば、分に随つて自ら佳なり、下し得て痕迹を覺えずんば、縱使一句に兩入し、兩句重犯するも、亦た自ら傷なし、太白の峨嵋山月の歌の如き、四句に地名を入るゝ者五なり、然れども古今目して絶唱と爲し、殊に重なるを厭はず、蜂腰鶴膝雙聲疊韻は休文の三尺の法なり、古今犯す者少からず、寧ぞ盡く汰せられんや。

一對に一故事を用ゆ

碧溪云、律詩に一對に一事を通じ用ゆる者あり、杜詩に、「更に嘉樹の傳を尋ね、角弓の詩を忘るゝ莫れ」と、

嘉樹傳、莫忘角弓詩、乃左傳韓宣子聘魯、嘗賦角弓、及魯嘉樹、魯人請封植以無忘角弓。

杜用故事諸格舉人名一類。

胡蘭溪云、杜用事門目甚多、姑舉人名一類、如清新庾開府、俊逸鮑參軍、正用聰明過管輅、尺檣倒陳遵、反用謝氏登山屐、陶公漉酒巾、明用伏柱聞周史、乘槎似漢臣、暗用舉天悲富駱、近代借盧王、並用高岑殊緩步、沉鮑得同行、單用汲黯匡君切、廉頗出將頻、分用共傳收庾信、不比得陳琳、中用至對恭陪謝傅、把劍覓徐君、侍臣雙宋玉、戰策兩穰苴、飄零神女雨、斷續楚王風、晉室丹陽尹、公孫白帝城、煥煉精奇、含蓄深遠、迥出前代矣。

取事實叢求

乃左傳に、韓宣子魯に聘し、嘗て角弓を賦し、及び嘉樹を賦む、魯人封植して以て角弓を忘るゝ、無からんと請ふ。

杜の故事を用ゆる諸格人名の一類を舉ぐ。

胡蘭溪云ふ、杜の事を用ゆる、門目甚だ多し、姑く人名の一類を舉ぐ、「清新は庾開府、俊逸は鮑參軍」正用する者なり、「聰明は管輅に過ぎ、尺檣は陳遵を倒す」反用する者なり、「謝氏登山の屐、陶公漉酒の巾」明用する者なり、「伏柱周史を聞き、乘槎漢臣に似たり」暗用する者なり、「舉天富駱を悲み、近代盧王を惜む」並用する者なり、「高岑は殊に緩歩し、沉鮑は同行を得」單用する者なり、「汲黯、君を匡すこと切に、廉頗出でて將たること頻なり」分用する者なり、「共に傳ふ庾信を收むと、陳琳を得るに比せず」中用する者なりの如し、「對恭謝傅に陪し、把劍徐君を覓む」侍臣は雙宋玉、戰策は兩穰苴、「飄零神女の雨、斷續楚王の風」晉室丹陽の尹、公孫白帝城に至りては、煥煉精奇、含蓄深遠、廻かに前代に出づ。

事實を叢求に取る。

縣周南嘗云、入詩事實、唐明所用而足矣、無已則猶探李翰蒙求已、蒙求所載唐以上事實、皆其雅者也、降此則無復精選矣。

用唐以下故事法

又云、凡詩忌唐以下故事、然盛唐及明諸傑所已用者、不忌之、卽若王楊盧駱王摩詰李謫仙等之事實是也、蓋其忌之者、恐後進取怪僻鄙陋之故事、妄用之也、若夫良工則何忌之有、雖本邦輓近之故事、宜酌而用之矣。

作唐以下懷古法

又云、若懷古之詩、述當時之事實者也、豈徒華土已哉、雖本邦輓近所在、不得弗述也、然詩中名物、未曾不有意以俗變雅也。

◎屬對

踏體詩則卷之上

縣周南嘗て云ふ、詩に入るゝ事實は、唐明の用ふる所に於て足れり、已む無くば、則ち猶ほ李翰の蒙求を採らんのみ蒙求に載する所、唐以上の事實、皆な其雅なる者なり、此を降りては、則ち復た精選なし。

唐以下の故事を用ゆる法

又た云ふ、凡そ詩は唐以下の故事を忌む、然れども盛唐及び明の諸傑の已に用ゆる所の者は之を忌まず、卽ち王楊盧駱王摩詰李謫仙等の事實、是れなり、蓋其の之を忌む者は、後進の怪僻鄙陋の故事を取り、妄に之を用ひんことを恐るゝなり、若し夫れ良工は、則ち何の忌むことか之れ有らん、本邦輓近の故事と雖も、宜しく酌んで之を用ゆべし。

唐以下の懷古を作る法

又た云ふ、懷古の詩の若き、當時の事實を述ぶる者なり、豈徒に華土のみならんや、本邦輓近の在る所と雖も、述べざるを得ざるなり、然れども詩中の名物は、未だ曾て俗を以て雅に變ずるに意あらずんばあらず。

◎屬對

詩有六對

上官儀云、詩有六對、

一曰、正名對天地日月是也、

二曰、同類對花葉草芽是也、

三曰、連珠對蕭蕭瑟瑟是也、

四曰、雙聲對黃槐綠柳是也、

五曰、疊韻對彷徨放曠是也、

六曰、雙擬對春樹秋池是也、

忌合掌對

胡蘭溪云、作詩最忌合掌、近體尤忌、而齊梁人往往犯之、如以朝對曙、將遠屬遙之類、初唐諸子、尙襲此風、推原厲階、實由康樂、沈宋二君始加洗削、至於盛唐盡矣。

有蹉對

古人云、九歌云、蕙殺蒸兮蘭藉、奠桂酒兮椒漿、蒸蕙殺對奠桂酒、今倒用之謂之蹉對。

有假對

詩に六對あり

上官儀云、詩に六對あり、一に曰く正名對天地日月是なり、

二に曰く同類對花葉草芽是なり、三に曰く連珠對蕭々瑟瑟是なり、

四に曰く雙聲對黃槐綠柳是なり、五に曰く疊韻對彷徨放曠是なり、

六に曰く雙擬對春樹秋池是なり、

合掌對を忌む

胡蘭溪云、詩を作るに最も合掌を忌む、近體は尤も忌む、而して齊梁の人は往々にして之を犯す、朝を以て曙に對し、遠を將て遙に屬するの類の如し、初唐の諸子は尙ほ此の風を襲ふ、厲階を推し原ぬるに實に康樂に由る、沈宋の二君始めて洗削を加へ、盛唐に至りて盡く。

蹉對あり

古人云、九歌に云、蕙を蒸して蘭藉あり、桂酒を奠して椒漿あり、蕙殺を蒸するを桂酒を奠するに對すべし、今倒に之を用ゆ、之を蹉對と謂ふ。

假對あり

又云、如自朱耶之狼狽致赤子之流離不嗟、赤對朱、耶對子、兼狼狽流離乃獸名對鳥名、又如厨人具鷄黍、稚子摘楊梅、以鷄對楊、如此之類皆爲假對。

詩不在對偶之不切太切

古人云論詩謂對偶太切則失之俗、此一偏之見耳、如老杜江陵詩云、地利西通蜀、天文北照秦、川詩云、水落魚龍夜、山空鳥鼠秋、之類、可謂對偶太切矣、又何俗乎、如雜葢紅相對、他時錦不如、磨滅餘篇翰、平生一釣舟之類、不求太切而未嘗失格也、學者當審此。

七言雖對起宜韻起

胡爾溪云、對起則杜之風急天高猿嘯哀、落清沙白鳥飛廻、實爲妙絕、而岑參鷄鳴紫陌、

又云云、朱耶の狼狽より赤子の流離を致して嗟かざるの如き、赤を朱に對し、耶を子に對す、兼ねて狼狽流離は、乃ち獸の名を鳥の名に對す、又た厨人、鷄黍を具へ、稚子、楊梅を摘む、の如き、鷄を以て楊に對す、此の如きの類は、皆な假對と爲す。

詩は對偶の切ならざると太だ切なるとに在らず

古人云、詩を論じて、對偶太切なれば則ち之を俗に失すと謂へるは、此れ一偏の見のみ、老杜の江陵の詩に云ふ、地利西蜀に通じ、天文北、秦を照らす、川の詩に云ふ、水は落つ魚龍の夜、山は空し鳥鼠の秋の類の如きは、對偶太だ切なりと謂ふべし、又た何ぞ俗ならんや、雜葢紅相ひ對し、他時錦も如かず、磨滅富翰を餘し、平生一釣舟、の類の如き、太切なるを求めず而して、未だ嘗て格を失せざるなり、學者當に此を審にすべし。

七言は對起と雖も韻起に宜し。

胡爾溪云、對起は則ち杜の「風急に天高くして猿嘯き哀む落清く沙白ふして鳥飛び廻る」は實に妙絶たり、而

柳鞞鶯嬌二起、工麗婉約亦可諷詠、右丞多
 仄韻對起無風韻、不足多效、蓋仄起、宜五言、
 不宜七言、蘇軾按、世詩式或稱、七言律對起、期
 首句脚尾不押韻、非對則必照韻起
 也、此亦五七言所
 同、非也、不可從矣。

◎沿襲

詩有三儉

李淑云、詩有三儉、儉語最是鈍賊、如傅長虞
 日月光太清、陳主日月光天德、是也、儉意事
 雖可、情不可厚、如柳渾太液微波起、長楊
 高樹秋、沉佺期小池殘暑退、高樹早涼歸、是
 也、儉勢才巧意精、各無朕迹、蓋詩人儉、狐白
 裘手也、如嵇康目送歸鴻、手揮五絃、王昌齡
 手攜雙鯉魚、目送千里鴈、是也。

全襲古人

して岑參の「鞞は紫陌に鳴き、柳鞞れ鶯嬌ぶ」の二起は、工麗婉約にし亦た諷詠すべし、右丞に、仄韻の對起多し、風韻なし、多として效ふに足らず、蓋、仄起は五言に宜しく、七言に宜しからず、蘇軾按するに、世の詩式或は稱す、七言律、對に非れば必ず韻を照して起る、此れも亦た、五七言の同じき所なりと、非なり、從ふべからず。

◎沿襲

詩に三儉あり

李淑云ふ、詩に三儉あり、語を儉むは最も是れ鈍賊なり、傅長虞の「日月太清に光く」を陳主の「日月は天德を光す」の如き是なり、意を儉むは、事は固ゆ可しと雖も、情は厚ふす可からず、柳渾の「太液微波起る、長楊高樹の秋」を沉佺期の「小池殘暑退き、高樹早涼歸る」の如き是なり、勢を儉むは、才巧に意精しく、各、朕迹なし、蓋、詩人の狐白裘を儉むの手なり、嵇康の「目に歸鴻を送り、手に五絃を揮ふ」を王昌齡の「手に雙鯉魚を攜へ、目に千里の鴈を送る」が如き是なり。

全く古人を襲ふ

室中語云、一日有坐客問公曰、全用古人一句、可乎、公曰然、如杜少陵詩云、使君自有婦、而無車馬喧之類、是也。

述者不及作者、作者不及述者、

誠齋云、句有偶似古人者、亦有述之者、杜子美武侯廟詩云、映堦碧草自春色、隔葉黃鸝空好音、此何遜行孫氏陵云、山鶯空樹響、壠月自秋暉也、杜云、薄雲巖際宿、孤月浪中翻、此庾信白雲巖際出、清月波中上也、出上二字勝矣、陰鏗云、鶯隨入戶樹、花逐下山風、杜云、月明垂葉露、雲逐渡溪風、又云、水流行地日、江入度山雲、此一聯勝矣、義卿云、杜兩聯亦向用著、逐流入字、六朝纖巧、然前聯稍勝、陰鏗矣、庾信云、永韜三尺劍、長捲一戎衣、杜云、風塵三尺劍、社稷一戎衣、亦勝庾

諸體詩則卷之上

室中語に云ふ、一日坐客あり、公に問ふて曰く、全く古人の一句を用ゆるとも可なるかと、公の曰く然り、杜少陵の詩に云ふ、「使君は自から婦あり」而も車馬の喧なしの類の如きはなり。

述者は作者に及ばず、作者は述者に及ばず。

誠齋云ふ、句に偶々古人に似たる者あり、亦た之を述る者あり、杜子美の武侯の廟の詩に云ふ、「堦に映する碧草は自ら春色、葉を隔つる黄鸝は空しく好音」と、此れ何遜の孫氏の陵に行くに云ふ、「山鶯は空樹に響き、壠月は自から秋暉なり」、杜云ふ、「薄雲は巖際に宿し、孤月は浪中に翻へる」とは、此れ庾信の「白雲は巖際に出で、清月は波中に入るなり」出上の二字勝れり、陰鏗云ふ、鶯は戸に入る、樹に隨ひ、花は山を下る風を逐ふと、杜云ふ、「月は明なり、葉に垂る、露雲は逐ふ、溪を渡る風」と、又た云ふ、「水は地を行く日を流し、江は山を渡る雲に入る」、此の一聯勝れり、義卿云ふ、杜の兩聯も亦た向は逐流入の字の如き六朝の纖巧を用ゆ、然れども前聯は稍勝、陰鏗に勝る、庾信云ふ「永く三尺の劍を韜んで、長く一戎衣を捲く」と、杜云ふ「風塵三尺の劍社稷一戎衣」と、亦た庾に勝れり。

矣。

六朝以上詞人皆祖習

古人云、江淹擬湯慧休詩、口暮碧雲合、佳人殊未來、古今以爲佳句、然謝靈運、圓景早已滿、佳人猶未適、謝玄暉、春草秋更綠、公子未西歸、卽是此意、嘗怪兩漢間所作騷文、初未嘗有新語、直是句句規模屈宋、但換字不同耳。

去陳言不得

陵陽云、目前景物、自古及今、不知凡幾、人道今人一下筆、要蹈襲、故有終無一字可解者、蓋欲新而反不可曉耳。

◎音韻

心悟者能叶音韻

六朝以上の詞人は皆な祖習す

古人云ふ、江淹の湯慧休に擬する詩に、「日暮碧雲合し佳人殊に未だ來らず」と古今以て佳句と爲す、然れども謝靈運の、圓景早く已に滿つ、佳人猶ほ未だ適かず」と、謝玄暉の、「春草秋更に綠なり、公子未だ西より歸らず」と、卽ち是れ此の意なり、嘗て怪む、兩漢の間の作る所の騷文は、初より未だ嘗て新語有らず、直は是れ句々屈宋を規模す、但し字を換ること同じからざるのみ。

陳言を去り得ず

陵陽云ふ、目前の景物は、古より今に及ぶまで、凡そ幾人の道ふを知らず、今人一たび筆を下すに、蹈襲せざらんを要す、故に終に一字の解す可き無き者あり、蓋し新ならんことを欲して、反つて曉る可からざるのみ。

◎音韻

心悟の者は能く音韻に叶ふ

古人云、五聲十二律八音之韻、物之至音、天籁自鳴、非人所爲、材各有適、不知其然而然耳、心悟者隨聲而叶之、不可執一。

秦漢以前平仄皆通用

蔡寬夫詩話云、秦漢以前字書未備、既多假借、而音無反切、平側皆通用、自齊梁後、既拘以四聲、又限以音韻、故士率以偶儻聲病爲工。

詩有聲變

古人云、詩有聲變、穩響起盪、穩是上平、全濁、響是不前不調、盪是去、次詩、次詩是入、全詩是也、兩句不得相併、兩聯不得相似、起宜重濁、承宜平穩、中宜鏗鏘、二者篇篇欲變、若一題聯賦者、變製不變律。

不緩不促

諸體詩則卷之上

古人云、五聲十二律八音之韻は、物の至音にして、天籁自から鳴る、人の爲す所に非ず、材各、適する有り、其の然るを知らずして然るのみ、心悟の者は聲に隨つて之に叶ふ、一を執る可からず。

秦漢以前は平仄皆な通用す、

蔡寬夫の詩話に云ふ、秦漢以前は、字書未だ備はらず、既に假借多し、而して音に反切なし、平側皆な通用す、齊梁より後ちは、既に拘はるに四聲を以てし、又た限るに音韻を以てす、故に士は率ね偶儻聲病を以て工と爲す。

詩に聲變あり、

古人云、詩に聲變あり、穩響起盪、穩は上平、全濁、響は不前不調、盪は去、次詩、次詩は入、全詩是なり、兩句相ひ併すことを得ず、兩聯相ひ似ることを得ず、起は宜しく重濁なるべく、承は宜しく平穩なるべく、中は宜しく鏗鏘なるべし、二者篇々變せんことを欲す、若し一題聯賦の者は、製を變じて律を變ぜず。

緩ならず促ならず、

嚴滄浪云音韻忌散緩亦忌迫促詩柳云散緩迫促通

華音後始知之東冬江真文元寒刪先陽庚青蒸侵覃咸嚴之韻迫促其餘皆散緩尤至入聲則散緩太甚故徐昌綬云樂府往往散緩故與詩殊蓋散事辭緩則元不制一門聲上燕盛字極促乃住阮瑪駕郭北門亂孤兒行太緩弱不速矣

雙聲疊韻

古人云南史謝莊傳曰王元謨問莊何者爲雙聲何者爲疊韻答曰互護爲雙聲微痛爲疊韻必以五音爲定蓋謂東方喉聲爲木音西方舌聲爲金音南方齒聲爲火音北方唇聲爲水音中央牙聲爲土音也雙聲者同音而不同韻也疊韻者同音而又同韻也互護同爲唇音而二字不同韻故謂之雙聲嗷嗷同爲牙音而二字又同韻故謂之疊韻義柳云東

西南北及中央之配韻學家者之言哉

嚴滄浪云音韻忌散緩亦忌迫促義柳云散緩迫促通
迫促是華音に通じて後始めて之を知る東冬江真文元寒刪先陽庚青蒸侵覃咸嚴之韻は迫促にして其餘は皆な散緩なり尤も入聲に至りては則ち散緩を極し故に徐昌綬云樂府往々事を急す故に詩と殊なり散緩半緩れば則ち元にして精ならず韻々堂上燕盛は疊字極めて促にして乃ち住なり阮瑪の駕して出づ郭の北門は孤兒行に亂ぶれば太た緩弱にして

雙聲疊韻

古人云南史謝莊の傳に曰く王元謨、莊に問ふ、何者を雙聲と爲し、何者を疊韻と爲すと、答へて曰く、互護を雙聲と爲し、嗷嗷を疊韻と爲す、必ず五音を以て定と爲すと、蓋謂ふは、東方は喉聲、木音たり、西方は舌聲、金音たり、南方は齒聲、火音たり、北方は唇聲、水音たり、中央は牙聲、土音たるなり、雙聲は音を同じくして韻を同じくせず、疊韻は音を同じくして又た韻を同じくせず、互護は同じく唇音たり、而して二字韻を同じくせず、故に之を雙聲と謂ふ、嗷嗷は同じく牙音たり、而して二字又た韻を同じくす、故に之を疊韻といふ、義柳云、東西南北及中央の配韻學家者之言なるかな。

下三連

或云中華固忌下三連蓋未載其說於詩式耳義卿按此考閱之疎也梁橋詩式中拗句換字法云三字一連皆平是此三字一連即所謂下三連也然三字一連文字未如下三連簡且盡也蓋本邦在昔天平之頃西學中國之士多矣下三連及一平之法語皆其所彼土傳來而未嘗有改之古言也其於中國也雖五尺童亦纔拈聲律便能知忌此二者是以不必載之詩式已

通韻

東冬通 江陽通 支微通 微模通 江耕通 魚模
 通 哈皆齊通 齊皆灰通 眞侵通 東冬蒸登通
 虞模尤通 齊清通 霽蒸登通 豪霄蕭通 江豪

諸體詩則卷之上

下三連

或ひと云ふ中華は固に下三連を忌む蓋未だ其の説を詩式に載せざるのみと義卿按ずるに此れ考閱の疎なるり梁橋の詩式中拗句字を換ふる法に云ふ三字一連皆な平とは是れ此の三字一連とは即ち謂はゆる下三連なり然れども三字一連の文字は未だ下三連の簡にして且つ盡せるに如かず蓋本邦在昔天平の頃西のかた中國に學ぶの士多し下三連及び一平の法語は皆な其彼の土より傳へ來る所にして未だ嘗て改むること有らざるの古言なり其の中國に於けるや五尺の童と雖も亦た纔に聲律を拈すれば便ち能く此の二者を忌むことを知る是を以て必らずしも之を詩式に載せざるのみ

通韻

東冬通 江陽通 支微通 微模通 江耕通 魚模通 哈皆齊通 齊皆
 灰通 眞侵通 東冬蒸登通 虞模尤通 齊清通 霽蒸登通 豪霄蕭
 通 江豪通 眞文欣元通 元刪先通 寒刪先通 蕭爻豪通 陽庚耕通

五七

通真文欣元通元剛先通寒剛先通蕭文豪
通陽庚耕通豪爻陽通庚耕蒸登通麻歌戈
通庚青通覃談鹽添通覃談凡通嫌檻范通

挾聲

唐人五律中挾聲 有用起句杜甫、昔開洞庭之水、孟浩然、義公習、理寂、之類。

有用第三句杜甫、清新庾開府、王維、黃雲斷、春色、之類、

有用第五句杜甫、寧辭搗衣倦、王維、泉聲咽危石、之類、

有用第七句王維、同看射鵰處、高適、牀頭一盞酒、之類、

○七律中挾聲 有用起句杜甫、愛汝玉山草堂靜、之類、

有用第三句高適、巫峽啼猿數行淚、杜甫、西望瑤池降、王母、之類、

有用第五句賈至、劍佩聲隨玉墀步、杜甫、伯仲之間見伊呂、之類、

有用第七句高適、莫愁他鄉暫離別、杜甫、亦擬城南買烟舍、之類、

○七絕中挾聲 有用起句李白、蜀國曾聞子規、鳥、之類、

豪文陽通庚耕蒸登通麻歌戈通庚青通覃談鹽添通覃談凡通嫌檻范通

挾聲

唐人五律中の挾聲 起句に用ゆるあり杜甫の、昔開く洞庭の水、孟浩然の習ふの類

第三句に用ゆるあり杜甫の、清新庾開府、王維の、黄雲は春色を断つ、の類、

第五句に用ゆるあり杜甫の、寧ろ衣を搗いて倦むを辭せんや、王維の、泉聲は危石に咽ぶ、の類なり、

第七句に用ゆるあり高適の、牀頭一盞酒、の類なり、

○七律中の挾聲 起句に用ゆるあり杜甫の、愛す汝が玉山草堂の靜なるを、の類、

第三句に用ゆるあり高適の、巫峽の啼猿數行の淚、杜甫の、西望すれば瑤池に王母降る、の類、

第五句に用ゆるあり賈至の、劍佩の聲は玉墀の歩に隨ひ、杜甫の、伯仲の間に伊呂を見る、の類、

第七句に用ゆるあり高適の、莫れ他郷に暫らく離別するを、杜甫の、亦た城南に烟舍を買はん、の類、

○七絶中の挾聲 起句に用ゆるあり李白の、蜀國曾て聞く子規の鳥の類なり、

有用第三句唐人此格惟多矣、今不舉之、

第三句に用ゆるあり唐人に此の格惟り多し、今之を舉げず、

諸體詩則卷之上

五九

9

諸體詩則卷之上終

諸體詩則卷之下

長陽 林 義卿 周父 纂述

西越 田 玄徽 仲琴 同校

北作 直 春卿 士宗

◎四言古詩

按詩三百五篇大率以四言爲篇其他三言五言六言七言九言閒見雜出不以成章況成篇乎是以四言爲主也故後世效周詩者雖晉東晉補亡詩無雜言其餘子建朔風等諸作皆然也

補亡體詩格此爲正體

周詩則諸法章句法韻法變化無常惟補亡詩爲易窺也故今取法於此以爲四言格若夫過此詳者宜就詩經孔疏及說約考之至助辭審焉

諸體詩則卷之下

◎四言古詩

按するに詩三百五篇は大率ね四言を以て篇を爲し、其の他は三言五言六言七言九言閒見雜出し、以て章を成さず、況んや篇を成すをや、是れ四言を以て主と爲すなり、故に後世の周詩に效ふ者は、晉の東晉の補亡詩と雖も、雜言なし、其の「餘」子建の朔風等の諸作は皆な然り。

補亡體詩格此を正體と爲す

周詩は則ち諸法章句法韻法變化無常なし、惟も補亡の詩は窺ひ易しと爲す、故に今法を此に取り、以て四言の格と爲す、若し夫れ此を過ぎて詳なる者は、宜しく詩經の孔疏及び說約に就いて之を考ふべし、助辭に至るまで爲を審にせよ。

以四言成篇周詩有雜言、分章複句、易字互文、以致反覆嗟嘆周詩一篇章數無定格、

同首尾或有與諸章異文勢章句數亦閒

有長短周詩一章句數無單殺、有

一章用一韻、有一章用數韻周詩可以仄

韻換平韻、可以平韻換仄韻、可以仄韻換

仄韻、可以平韻換平韻周詩凡不押韻句

末、不拘平仄周詩換韻不從前句換之、

從前句換者太多。

△補亡詩六首舉一首○齊東野語

惜其不備、故作辭以補之。

循彼南陔、言採其蘭、眷戀庭闈、心不遑安、彼

居之子、罔或游盤、琴爾夕膳、梨爾晨餐。

循彼南陔、厥草油油、彼居之子、色思其柔、眷

四言を以て篇を爲す周詩に雜言を分ち、句を復ね、字を易へ、文を互にし、以て反覆嗟嘆を致す、周詩一篇の章數に定格なし、周詩首尾或は諸章と文勢を異にする章あり、句數も亦大開、長短あり、周詩一章の句數に單殺なし、周詩に單一章に一韻を用ゆるあり、一章に數韻を用ゆるあり、周詩仄韻を以て平韻に換ふ可し、平韻を以て仄韻に換ふ可し、周詩平韻を以て平韻に換ふべし、周詩凡そ韻を押さざる句の末は、平仄に拘はらず、周詩韻を換ふるに前句に従つて之を換へず、周詩は前句に従つて換る者多し、

△補亡詩六首一首を舉ぐ○齊の宋哲晉て周の成王の詩を覽るに、其の義ありて其の辭なし、其の體はらざるを惜む、故に辭を作りて以て之を補ふ。

彼の南陔に循つて、言に其の蘭を採る、庭闈を眷戀して、心遑あき安からず、彼の居の子、游盤する或る罔し、爾の夕膳を馨くし、爾の晨餐を繋くせよ。

彼の南陔に循つて、厥の草油々たり、彼の居の子、色は

戀庭闌、心不遑留、馨爾夕膳、絜爾晨羞。

有獺有獺、在河之浹、凌波赴汨、噬魴捕鯉、噉

噉林鳥、受哺于子、養隆敬薄、惟禽之似、島增

爾虞、以介丕祉。南陔、孝子相戒以養也。

南陔三章二章章八句一章十句

朔風體詩格 此亦爲正體。

朔風詩雖爲正體、其格與補亡異也、後人作四言、用此體者多矣、比前格爲太易、窺此亦未及者也。

以四言八句爲一章、一篇章數無定格、

每章各述一事、一章中或換韻或不換

韻、可以平韻換仄韻、可以仄韻換平韻、

可以平韻換平韻、可以仄韻換仄韻、凡

前句末不拘平仄、唯起句末或押韻、其

餘雖換韻、前句不押韻。

諸體詩期卷之下

其の柔なるを思ふ、庭園を眷戀して、心遑あき留まらず、爾の夕膳を馨くし、爾の晨羞を絜くせよ。

獺あり獺あり、河の浹にあり、波を凌ぎ汨に赴き、魴を噬

ひ鯉を捕ふ、噉々たる林鳥哺を子に受く、養ひ隆んにし

て敬薄きは、惟れ禽に之れ似たり、島増て爾の虞を増し

て以て丕なる祉を介けよ。南陔は孝子相戒むるに養を以てするなり。

朔風體詩格 此亦正體と爲す

朔風の詩は正體と爲すと雖も、其の格は補亡と異なるなり、後人、四言を作るに、此の體を用ゆる者多し、前格に比すれば、未だ窺ひ易しと爲す、此も亦た古今の詩式の未だ及ばざる所なり。

四言八句を以て一章と爲す、一篇の章數に定格なし、

每章各一事を述ぶ、一章中に或は韻を換へ、或は韻を

換へず、平韻を以て仄韻に換ふ可く、仄韻を以て平韻

に換ふ可く、平韻を以て平韻に換ふ可く、仄韻を以て

仄韻に換ふ可し、凡そ前句の末は平仄に拘はらず、唯、

起句の末或は韻を押す、其餘は韻を換ふると雖も、前句は韻を押さず。

△朔風詩時爲東阿王思在蕃 曹植

仰彼朔風、用懷魏都、願聘代馬、倏忽北徂、凱風永至、思彼蠻方、願隨越鳥、翻飛南翔。

四氣代謝、懸景運周、別如俯仰、脫若三秋、昔我初遷、朱華未希、今我旋止、素雲云飛。

俯降千仞、仰登天阻、風飄蓬飛、載離寒暑、千仞易陟、天阻可越、昔我同袍、今永乖別。

予好芳草、豈忘爾貽、繁華將茂、秋霜悴之、君不垂眷、豈云其誠、秋蘭可喻、桂樹冬榮。

絃歌蕩思、誰與銷憂、臨川暮思、何爲泛舟、豈無和樂、游非我鄰、誰忘泛舟、愧無榜人。

朔風五章章八句

二章長篇詩格此爲變體

追漢楚王傳章孟始製四言長篇而古詩之體稍變矣其子賢亦能之世後效作者太多

△朔風時に東阿王と爲りて蕃に在り、北風に感じて歸を思ふて作る。 曹植

彼の朔風を仰ぎ、用ひて魏都を懷ふ、願はくば代馬を聘せて、倏忽として北に徂かん、凱風永く至り、彼の蠻方を思ふ、願はくば越鳥に隨つて、翻飛して南に翔らん。

四氣代謝し、懸景運周す、別るゝこと俯仰の如く、脱も三秋の若し、昔、我が初めて遷る、朱華未だ希ならず、今我が旋るや、素雲云に飛ぶ。

俯して千仞を降り、仰いで天阻に登る、風飄蓬飛、載ち寒暑に離る、千仞易く、天阻越ゆべし、昔、我が同袍、今永く乖別す。

予芳草を好む、豈に爾の貽ものを忘れんや、繁華將に茂らんとすれば、秋霜之を悴る、君は眷を垂れず、豈に其の誠を云はんや、秋蘭は喻す可く、桂樹冬榮ふ。

絃歌、思を蕩し、誰と與に憂を銷せん、川に臨んで暮に思ふ、何ん爲れぞ舟を泛べん、豈に和樂なからんや、游民が鄰に非らず、誰か舟を泛ぶを忘れん、愧づ榜人なきを。

朔風五章章八句

二章長篇詩格此爲變體

漢の楚王の傳章孟に追んで、始めて四言の長篇を製して、古詩の體は稍變ず、其の子賢も亦た之を能くす、後世效ひ

謂之四言、蓋亦古今所未及者也。

以四言爲一句、無雜言、不分章複句易字互文以致反覆、一篇卽一章、一篇至百數十句無定格、雙殺無單殺者、數換韻、亦可、換韻句數未嘗有定格、雖換韻前句末不必押韻、可以平韻換仄韻、可以仄韻換平韻、可以平韻換平韻、可以仄韻換仄韻、有全篇仄韻者、有全篇平韻者、有全篇一韻者、凡不押韻句末、不拘平仄。

△諷諫詩 孟爲元王傳、子夷王及孫戊、戊荒淫不遵道、作詩諷諫。

韋孟

肅肅我祖、國自豕韋、黼衣朱黻、四牡龍旂、彤弓斯征、撫寧遐荒、總齊群邦、以翼大商、迭彼

諸體詩問卷之下

作者者太多、之を二章の四言長篇の體と謂ふ、今之が格を爲る、蓋亦た古今の未だ及ばざる所の者なり。

四言を以て一句と爲し、雜言なし、章を分ち句を複ね字を易へ文を互にして、以て反覆を致さず、一篇は即ち一章なり、一篇は百數十句に至る、定格なし、雙殺にして單殺の者なし、數、韻を換ふるも亦た可なり、韻を換ふるの句數は未だ嘗て定格あらず、韻を換ふると雖も、前句の末必ずしも韻を押さず、平韻を以て仄韻に換ふ可く、仄韻を以て平韻に換ふ可く、平韻を以て平韻に換ふ可く、仄韻を以て仄韻に換ふ可し、全篇仄韻なる者あり、全篇平韻なる者あり、全篇一韻なる者あり、凡そ韻を押さざる句の末は平仄に拘はらず。

△諷諫詩 孟は元王の傳たり、子、夷王及び孫戊、戊は、荒淫を以て遂に遵はず、詩を作りて諷諫す。

韋孟

肅々たる我が祖國は豕韋よりす、黼衣にして朱黻、四牡龍旂あり、彤弓斯に征し、遐荒を撫寧す、群邦を總へ齊へ、以て大商を翼く、迭たる彼の大彭動績惟れ光れり、有周

五

大彭、勳績惟光、至于有周、歷世會同、王親聽
 譖、寔絕我邦、我邦既絕、厥政斯逸、賞罰之行、
 非由王室、庶尹群后、靡扶靡衛、五服崩離、宗
 周以暨、我祖斯微、遷于彭城、在予小子、勦啖
 厥生、阨此媯秦、耒耜斯耕、悠悠媯秦、上天不
 寧、乃眷南顧、授漢于京、於赫有漢、四方是征、
 靡適不懷、萬國攸平、乃命厥弟、建侯于楚、俾
 我小臣、惟傅是輔、矜矜元王、恭儉靜一、惠此
 黎民、納彼輔弼、享國漸世、垂烈於後、乃及夷
 王、剋秦、厥次咨命、不永、惟王統祀、左右陪臣、
 斯惟皇士、如何我王、不思守保、不惟履冰、以
 繼祖考、邦事是廢、逸游是娛、犬馬悠悠、是放
 是驅、務此鳥獸、忽此稼苗、烝民以匱、我王以
 嬖所弘、匪德所親、匪俊唯囿、是恢、唯諛是信、

に至りて、世を歴て會同す、王親譖を聽て、寔に我が邦
 を絶つ、我が邦既に絶えて、厥の政斯に逸す、賞罰の行は
 るゝ王室に由るに非ず、庶尹群后扶る靡く衛る靡し、
 五服崩離し、宗周以て墜つ、我が祖斯に微にして、彭城に
 遷る、予れ小子に在りて、勦めて厥の生を啖く、此の媯秦
 に阨して、耒耜斯に耕す、悠悠たる媯秦、上天寧んぜず、乃
 ち眷りみ南に顧みて、漢に京を授く、於赫たる有漢、四方
 を是れ征す、適として懷かざるなし、萬國は攸平なり、乃
 ち厥の弟に命じ候を楚に建つ、我れ小臣をして、惟れ傅
 たり、是れ輔たらしむ、矜々たる元王、恭儉にして、靜一、此
 の黎民を惠んで、彼の輔弼を納る、國を享け世を漸くし、
 烈を後に垂る、乃ち夷王に及んで、剋く厥の次を奉ず、咨
 命永からず、惟れ王祀を統ぶ、左右の陪臣、斯れ惟れ皇士
 なり、如何んぞ、我が王、守保を思はざる、冰を履んで、以て
 祖考に繼ぐを惟はず、邦事はれ廢し、逸游はれ娛む、犬馬
 悠悠、是れ放ち、是れ驅す、此の鳥獸を務めて、此の稼苗を
 忽にす、烝民は以て匱しく、我が王以て、嬖む、弘むる所は
 德に匪ず、親むる所は、唯、囿を是れ恢にし、唯、諛
 を是れ信す、諭々たる諂夫、謬々たる黃髮、如何んぞ、我が
 王、會ち是れを察せざる、既に下臣を親して、欲を追ひ逸

踰踰諂夫、諂諂黃髮、如何我王、曾不是察、既
 藐下臣、追欲縱逸、媿彼顯祖、輕此削黜、嗟嗟
 我王、漢之睦親、曾不夙夜、以休令聞、穆穆天
 子、臨照下土、明明群司、執憲靡顧、正遐由近、
 殆其茲怙、嗟嗟我王、曷不思、匪思匪監、嗣
 其罔則、彌彌其逸、岌岌其國、致冰匪霜、致墜
 匪慢、瞻惟我王、時靡不練、興國救顛、執違悔
 過、追思黃髮、秦繆以霸、歲月其征、年其逮者、
 於赫君子、庶顯于後、我王如何、曾不斯覽、黃
 髮不近、胡不時鑒。

四言古詩要論

四言所貴

古人云、四言貴優柔敦厚典則居要。

四言正體變體各可效者。

諸體詩附卷之下

を縦にし、彼の顯祖を媿し、此の削黜を輕んず、嗟々我が
 王、漢の睦親なり、曾ち夙夜に以て令聞を休せず、穆々た
 る天子は、下土を臨照す、明々たる群司は、憲を執て顧る
 なし、遐を正す近き由りし、殆んど其れ茲に怙む、嗟々我
 が王は、曷ぞ斯れを思はざる、思ふに匪す、監みるに匪す、
 嗣は其れ則る罔し、其の逸を彌々にし、其の國を岌々に
 す、冰を致すは霜に匪ず、墜を致すは慢に匪ず、我が王を
 瞻惟するに、時練せざる、靡し、國を興し、顛を救ふ、孰れ
 か過を悔ゆるに、逸せん、追て黃髮を思ふて、秦繆以て霸
 たり、歲月其れ征き、年其れ逮るに、逮ぶ、於赫たる君子、顯を
 後に庶ふ、我が王如何ぞ、曾ち斯れを覽ざる、黃髮を近け
 ず、胡ぞ時れを鑒みざる。

四言古詩要論

四言の貴ぶ所

古人云、四言は優柔敦厚典則にして要に居るを貴ぶ。

四言の正體變體各、效ふ可き者

胡東越云、四言短章效三百、長篇倣二章、頌體閒法、唐鄭夔調旁參操植、晉以下無論矣、

晉人欲去文存質、卻失。

又云、四言漢多主格、魏多主詞、雖體有古近、各自所長、晉諸作者浮慕三百、欲去文存質、而繁靡板棊、無論古調、竝工語失之、今觀二陸潘鄭諸集、連篇累牘、絕無省發、雖多奚爲、論晉宋四言、叔夜淵明偏門。

又云、晉以下、若茂先勵志、廣微補亡、季倫吟嘆等曲、尙有前代典刑、康樂絕少、四言、元亮停雲、榮木、類其所爲、五言、栗之、叔夜太濃、淵明太淡、律之大雅、俱偏門耳。

老杜無四言

又云、老杜無四言詩、然羌村、崤嶽、赤雲、迥出、

胡東越云、四言短章は三百に效ひ、長篇は二章に效ひ、頌體は閒、唐鄭に法り、變調は旁く操植に參せよ、晉以下は論ずる無し。

晉人は文を去り質を存せんと欲して、卻て失す。

又た云ふ、四言は漢は多く格を主とし、魏は多く詞を主とす、體に古近ありと雖も、各自ら長ずる所なり、晉の諸作者は三有を浮慕し、文を去り質を存せんと欲し、而して繁靡板棊、古調を論ずるなし、工語を竝せて之を失ふ、今二陸潘鄭の諸集を觀るに、連篇累牘、絶えて省發なし、多しと雖も奚をかせん。

晉宋の四言を論ず、叔夜淵明は偏門なり、

又た云ふ、晉以下、茂先の勵志、廣微の補亡、季倫の吟嘆等の曲の若き、尙ほ前代の典刑あり、康樂は絶えて、四言少し、元亮の停雲、榮木は、其の爲す所の五言に類せり、之を要するに、叔夜は太濃、淵明は太淡、之を大雅に律するに、俱に偏門のみ。

老杜に四言なし

又た云ふ、老杜に四言の詩なし、然るに羌村、崤嶽として、

蹇朝進上東門二篇實得風騷遺意情不盡
脫唐調耳。

退之天王聖明得意不得語。

又云退之臣罪當誅天王聖明意則美矣然
語非商周本色。

◎楚辭

按楚辭者詩之變也賢士失志者作矣辭
賦之家悉祖屈宋然楚聲已萌蘗於接輿
鳳兮及孺子滄浪之歌與詩人六義不相
遠蓋其辭稍變詩之本體而以兮爲讀至
於屈平本詩義以爲騷騷義多說然以離
遭也騷擾動也遭時之擾動爲是蓋騷兼
六義而賦之義居多宋玉繼作竝號楚辭
俱辭賦之祖也。

諸體詩則卷之下

赤雲廻かに蹇を出で、「朝に進む上東門」の二篇は實に
風騷の遺意を得たり惜むらくは蓋く唐調を脱せざるの
み。

退之の天王聖明は意を得て語を得ず。

又た云ふ退之の「臣の罪は誅に當す天王聖明は意は則
ち美なり然れども語は商周の本色に非ず。

◎楚辭

按するに楚辭は詩の變なり賢士志を失ふ者の作る
なり辭賦の家は悉く屈宋を祖とす然れども楚聲は
已に接輿の鳳兮及び孺子滄浪の歌に萌蘗す詩人の六
義と相ひ遠からず蓋其の辭は稍や詩の本體を變じ
て兮を以て讀と爲す屈平に至りて詩の本義に本き
以て騷を爲る騷の義は多說なり然れども離は遭な
り騷は擾動なり時の擾動に遭ふを以て是と爲す蓋
騷は六義を兼て賦の義多きに居る宋玉繼いで作り
竝に楚辭と號す俱に辭賦の祖なり。

九

楚辭格

楚辭格最難、偏故古人亦未載之。
詩式也、今詳考屈宋諸篇、以爲之格。

一篇句數無定格率雙 一句言數無定格

從二言至有六言言數多者率成篇、其他雜

言、閉見者爲前句下同有大率以六七言

成篇、其他雜言、閉見者、有大率以三四

言成篇、其他雜言、閉見者、有大率以四

言成篇、其他雜言、閉見者、以上凡楚辭長短

者有之、有以長句成篇者、有以短句成

篇者、有以長短雜言成篇者、凡楚辭

兮字、必在前句末或一句中、用之兮字未嘗

末也、俗儒往往有前句後句俱入兮字者、率

前句多言數、後句少言數、以加兮一字、

於後句者也、其實則後句言數多於前句者、

前後句同言數者、已後句言數多於前句者、

楚辭格

楚辭の格は最も偏似し難し、故に古人も亦た未だ之を詩式に載せず、今詳かに屈宋の諸篇に考へ、以て之が格を爲る。

一篇の句數は定格なし、率れ一句の言數も定格なし、言

より十二、大率ね五六言を以て篇を成し、其の他雜言

言に至る、大率ね五六言を以て篇を成し、其の他雜言

閉見する者あり、言數多き者は率れ、大率ね六七言を以

て篇を成し、其の他雜言、閉見する者あり、大率ね三四

言を以て篇を成し、其の他雜言、閉見する者あり、大率

ね四言を以て篇を成し、其の他雜言、閉見する者あり、

以上凡そ楚辭は長短句なり、然りと雖も、長句を以て、篇を

成す者あり、短句を以て、篇を成す者あり、長短雜言を

以て、篇を成す者あり、凡そ楚辭の兮の字は必ず前句の

末、或は一句の中間に在り、兮の字は未だ嘗て之を後句の

末にして、句前後句俱に兮の字を入る者あり、率ね

前句は言數多く、後句は言數少し、兮の一字を加ふるを以

より多き者なり、其の實は即ち前後句の言數は後句

の言數を同する者のみ、後句の言數の前句よ

百中之一、前句不押韻、後句押韻、起句或押韻、前句後句俱押韻者、今字必在句中、是屈宋輩以句爲讀者、而換韻句數無定格、然二句押之換者太多、三句押之換者亦不少、三句者其一句則換韻句也、可以平韻換仄韻、可以仄韻換平韻、可以平韻換平韻、可以仄韻換仄韻、有問答之語者、首尾中間不押韻句多矣。

楚辭要論

屈宋外宜熟讀者

嚴滄浪云、楚詞惟屈宋諸篇當熟讀、外此惟賈誼懷沙、淮南王招隱、嚴夫子哀時命、宜熟之、其他亦不必。

唐人得騷學者、惟柳子厚

諸體詩則卷之下

り多き者は百中の一なり、前句に韻を押さず、後句に韻を押す、起句及び韻を換ふる處或は韻を押す、前句後句俱に韻を押す者は、是れ屈宋輩が句を以て韻と爲す者にして其の實は則ち句以上は下に屬せ韻を換ふる句數に定格なし、然れども二句之を押して換ふる者太多し、三句之を押して換ふる者も亦た少からず、三句は其の一句は則ち換韻の句なり仄韻を以て仄韻に換ふ可く、仄韻を以て平韻に換ふ可く、平韻を以て平韻に換ふ可く、仄韻を以て仄韻に換ふ可し、問答の語ある者は、首尾中間に韻を押さざる句多し。

楚辭要論

屈宋の外に宜く熟読すべき者

嚴滄浪云ふ、楚詞は惟、屈宋の諸篇當に熟讀すべし、此より外は、惟、賈誼の懷沙、淮南王の招隱、嚴夫子の哀時命、宜く之を熟すべし、其の他は亦た必せず。

唐人の騷學を得たる者は、惟、柳子厚のみ

又云、唐人惟柳子厚深得騷學、退之李觀皆所不及、若皮日休九諷、不足爲騷。

騷有體用格詞四者

胡東越云、紆迴斷續、騷之體也、諷諭哀傷、騷之用也、深遠優柔、騷之格也、宏肆典麗、騷之詞也。

論些字爲呪語

又云、朱子語類云、楚些、沉存中以爲呪語、如今釋子念娑婆訶三合聲、而巫人之禱、亦有此聲、此卻說得好、蓋今人只求之于雅、而不求之于俗、故下一半都曉不得、按楚聲率用兮、獨招魂用些、故謂巫呪、極得之。

◎賦

按賦者古詩之流也、詩有六義、其二曰賦、

又た云ふ、唐人は惟、柳子厚のみ深く騷學を得たり、退之、李觀は皆な及ばざる所なり、皮日休の九諷の若き、騷と爲すに足らず。

騷に體用格詞の四者あり

胡東越云ふ、紆迴斷續は騷の體なり、諷諭哀傷は騷の用なり、深遠優柔は騷の格なり、宏肆典麗は騷の詞なり、

些の字の呪語たることを論ず

又た云ふ、朱子語類に云ふ、楚些、沉存中以て呪語と爲す、今の釋子の念娑婆訶三合聲の如し、而して巫人の禱にも、亦た此の聲あり、此れ卻て説き得て好し、蓋今人は只だ之を雅に求めて、之を俗に求めず、故に下一半は都て曉し得ずと、按ずるに楚聲は率ね兮を用ゆ、獨、招魂は些を用ゆ、故に巫呪と謂ふ、極めて之を得たり。

◎賦

按ずるに賦は古詩の流なり、詩に六義あり、其の二に

敷陳其事而直言之也、春秋之後、王澤竭而詩不作、於是乎賢士失志之賦作矣、卽屈宋二氏之辭是也、昭明文選分騷賦爲二、歷代因之、名義已殊、體製亦別、然其實騷爲賦上一篇之題名也、以繼學此體者多、卒分爲二已、蓋自漢迄宋、賦體四變、有古賦、有俳賦、有律賦、有文賦、其變而愈下者、不可不知也。

有古賦實情與辭、不監聲律、俳語、駢論者。

- 長門賦 子虛賦 上林賦 鵬賦 甘泉賦 自悼賦 擣衣賦 西都賦 東都賦 思立賦 鸚鵡賦 登樓賦 鶴鷄賦 歎遊賦 秋興賦 藉田賦 遊天台山賦 閔己賦 別知賦 閔生賦

諸體詩則卷之下

曰く、賦其の事を敷陳して直に之を言ふなり、春秋の後、王澤竭きて詩作らず、是に於てか賢士志を失ふの賦作らる、卽ち屈宋二氏、辭是なり、昭明の文選は騷賦を分ちて二と爲し、歷代之に因て、名義已に殊に體製も亦た別る、然れども其の實は騷は賦上一篇の題名たり、此の體を繼ぎ學ぶ者多きを以て、卒に分ちて二と爲るのみ、蓋漢より宋に迄るまで、賦體四たび變ず、古賦あり、俳賦あり、律賦あり、文賦あり、其の變じて愈下る者は、知らざる可からざるなり。

古賦あり情と辭とを實ぶ、聲律俳語論議に發ちざる者なり。

- 長門賦 子虛賦 上林賦 鵬賦 甘泉賦 自悼賦 擣衣賦 西都賦 東都賦 思立賦 鸚鵡賦 登樓賦 鶴鷄賦 歎遊賦 秋興賦 藉田賦 遊天台山賦 閔己賦 別知賦 閔生賦 夢歸賦 病暑賦 大禮賦

夢歸賦 病暑賦 大禮賦 慶成賦

黃樓賦 超然臺賦 屈原廟賦

有俳賦以對偶精工者

文賦 嘯賦 蕪城賦 野鵝賦 舞鶴

賦 雪賦 月賦 緒白馬賦 螢火賦

有律賦以香律協工者

寒梧棲鳳賦 明水賦 披沙揀金賦

有物混成賦 金在鎔賦 長嘯卻胡騎

賦 郭子儀單騎見虜賦

有文賦似文失情與辭者

長楊賦 阿房宮賦 秋聲賦 前赤壁

賦 後赤壁賦 颶風賦

右四品之賦、惟古賦可貴也、至俳賦以下三賦、則大失本色矣、故雖胡元已不取、況明之文士乎、蓋律二體、始於沈約四聲八病之拘、中於徐陵庾信隔句作

慶成賦 黃樓賦 超然臺賦 屈原廟賦。

俳賦あり對偶精工を以て工と爲す者なり。

文賦 嘯賦 蕪城賦 野鵝賦 舞鶴賦 雪賦 月賦

緒白馬賦 螢火賦

律賦あり香律協を以て工と爲す者なり。

寒梧棲鳳賦 明水賦 披沙揀金賦 有物混成賦 金

在鎔賦 長嘯卻胡騎賦 郭子儀單騎見虜賦

文賦あり文に似て情と辭とを失する者。

長楊賦 阿房宮賦 秋聲賦 前赤壁賦 後赤壁賦

颶風賦

右四品の賦、惟古賦貴ぶべし、俳賦以下の三賦に取ては、則ち大に本色を失す、故に胡元と雖も、已に取らず、況んや明の文士をや、蓋し律の二體は沈約の四聲八病の拘に始り、徐陵庾信の句を隔て、對を作

對之陋、終於隋唐取士限韻之制也、至文賦、宋人之陋、而議論文中押韻者耳、最不取也、故古人之品題、雖子雲之長楊賦、士衡之文賦、不列之古賦者、以其爲後世文俳二賦之濫觴也、若夫病者實獲則離、後世所就、測之古賦者、以其能得本色也。

賦格 古今賦體多端、然俳賦以下不足取法、今考古賦、以爲之格。

有首尾中間雜問答語者問答語雖韻句處或不押。

有全篇賦體而無問答語者 有用兮字者

一篇句數無定格 一句言數無定格

篇中前句後句言數相齊者、過半

一句中自作對猶可 分兩句作對、不足

學相如始分兩句作對者、一二之、本不足倚、忌聲律諧協 前

句不押韻、後句押韻起句及換韻處、或換韻然亦太少、

句數無定格 換韻無平仄次序

賦要論

諸體詩則卷之下

るの陋に中し、隋唐の士を取るに韻を限るの制に終る。文賦に至りては宋人の陋にして、議論文中に韻を押す者のみ、最も取らざるなり、故に古人の品題は、子雲の長楊の賦、士衡の文賦と雖も、之を古賦に列せざる者は、其の後世文俳二賦の濫觴たるを以てなり、若し夫れ病者實獲は、則ち後世の就る所と雖も、之を古賦に附る者は、其の能く本色を得るを以てなり。

賦格 古今賦體は多端なり、然れども俳賦以下は法を取るに足らず、今古賦に考へ、以て之が格を爲る。

首尾中間に問答の語を雜ゆる者あり、問答の語は韻句の處と雖も、或は韻をせず、全篇賦體にして、問答の語なき者あり、兮の字を用ゆる者あり、一篇の句數に定格なし、一句の字數に

定格なし、篇中前句後句の定數相齊しき者は半に過ぐ、一句の中に自から對を作すは猶ほ可なり、兩句を

分ちて對を爲すは學ぶに足らず、相如始めて兩句を分ちればあり、本と尙聲律諧協を忌む、前句に韻を押さず、後句に韻を押す、然れども亦た太だ少し、韻を換ふる句

數に定格なし、韻を換ふるに平仄の次序なし。

賦要論

一五

騷賦之異同

胡東越云、騷與賦、句語無甚遠、體裁則大不同、騷複雜無論、賦整蔚有序、騷以含蓄深婉爲尙、賦以誇張宏鉅爲工。

騷賦有盛衰亡

又云、騷盛於楚、衰於漢、而亡於魏、賦盛於漢、衰於魏、而亡於唐。

◎樂府

按樂府本樂官之府也、漢書云、武帝立樂府、以李延年爲協律都尉、可以證矣、後遂通樂官肄習之樂章、曰樂府、蓋樂之來尙矣、六代之樂、周人兼用之、周末樂廢、且暴秦滅典籍、樂書亦預焉、先王之雅樂於是乎掃地、漢興、叔孫通因秦樂人、制宗廟樂

騷賦の異同

胡東越云ふ、騷と賦と句語甚だ遠きことなし、體裁は則ち大に同じからず、騷は複雜論なし、賦は整蔚、序あり、騷は含蓄深婉を以て尙しと爲し、賦は誇張宏鉅を以て工と爲す。

騷賦に盛衰亡あり。

又た云ふ、騷は楚に盛んに、漢に衰へ、而して魏に亡ぶ、賦は漢に盛んに、魏に衰へ、而して唐に亡ぶ。

◎樂府

按ずるに、樂府は本と樂官の府なり、漢書に云ふ、武帝、樂府を立て、李延年を以て協律都尉と爲すと、以て證すべし、後ち遂に樂官肄習の樂章を通じて樂府と曰ふ、蓋樂の來ること尙し、六代之樂、周人は之を兼用す、周の末に樂廢る、且暴秦典籍を滅ほし、樂書も亦預る、先王之雅樂は是に於てか地を掃へり、漢興りて叔孫通秦の樂人に因て、宗廟の樂を制し、唐山夫人

唐山夫人造房中樂辭傳至於惠文無所增改及武帝使李延年司馬相如等數十人造爲詩賦略論律呂然延年以曼聲協律司馬以騷體製歌所謂騷一變爲樂府也又東漢明帝四品之樂其說雖具而制亦不傳魏氏所作音靡節平雖三調之正聲實韶夏之鄭曲也晉則有傅玄張華其所作樂辭有可觀亦未足多也梁陳及隋新聲日繁唐以下制作甚富然與古辭相去遠也嗚呼樂歌之難甚矣故古今律與辭兼得者希矣蓋漢以下諸樂辭已分爲九品。

一曰祭祀按祭祀所以報本、作樂所以致鬼神、祭祀用樂其來久矣若周禮太司樂及詩序所稱、秦滅典籍、禮樂崩壞、漢興高帝、詔叔孫通制宗廟樂、然徒存其名而亡其辭、

諸禮時則卷之下

は房中の樂辭を造り、傳へて惠文に至りて、増改する所なし、武帝に及び、李延年司馬相如等數十人をして、諸賦を造爲し、律品を略論せしむ、然れども延年は曼聲を以て律を協へ、司馬は騷體を以て歌を製す、謂はゆる騷一變して樂府と爲るものなり、又た東漢の明帝四品の樂は其の説具はると雖も、而も制は亦傳はらず、魏氏の作る所は、音靡に節平なり、三調の正聲と雖も、實は韶夏の鄭曲なり、晉は則ち傅玄張華あり、其の作る所の樂辭は觀る可き有るも、亦未だ多とするに足らず、梁陳及び隋は、新聲日に繁く、唐以下は制作甚だ當む、然れども古辭と相ひ去ること遠し、嗚呼樂歌の難きこと甚だし、故に古今、律と辭と兼ね得る者は希なり、蓋漢以下の諸樂辭は已に分れて九品と爲る。

一に曰く祭祀按ずる祭祀は本に報ずる所以なり、樂を作ると鬼神を致す所以なり、祭祀に樂を用ゆる、其の來ること久し、周禮の太司樂及び詩の序に稱する所の若し、秦は典籍を滅ぼして、禮樂崩壞す、漢興りて高帝は叔孫通に詔して、宗廟樂を制せしむ、然れども從らに其の名を存して、其の辭を亡ぶ、今傳ふる所は、唯、安世の房中歌及び武帝

日本詩話叢書

今所傳者、惟安世房中歌、及武帝郊祀十九章、已自晉而下、代有制作、可觀者。

漢郊祀歌

齊房 華燁燁 練時日 帝臨 五神
 青陽 朱明 朝隴首 西灑 玄冥
 象載瑜 惟泰元 天馬 赤蛟 日出
 入 景星 天門 后皇 天地以上武帝

右其餘漢魏以下制作之名題太多、今不錄焉。

二曰王禮

按、冠婚升附、殿上尊號、立太子、藉田、大射、皆王廟所不可闕者也。右晉以下制作之名題太多、今亦不錄焉。

三曰鼓吹

按、鼓吹者、總名也、分言之有五、曰黃門鼓吹、曰騎吹、曰橫吹、曰短簫、曰鑼歌、曰鼙歌。

黃門鼓吹

黃門鼓吹者、漢明帝爲樂四品之一、而朝饗燕會之樂、歌、列于殿庭、者是也、後世朝饗燕會之樂、皆依黃門而作、故謂之黃門鼓吹、漢辭則不傳、自晉而下制作尙存焉。

の郊祀の十九章のみ、晉よりして下には、代々制作の觀る可き者あり。

漢郊祀の歌

齊房 華燁々 練時日 帝臨 五神 青陽 朱明
 朝隴首 西灑 玄冥 象載瑜 惟泰元 天馬 赤蛟
 日出入 景星 天門 后皇 天地以上武帝

右其餘漢魏以下制作之名題太多、今不錄せす。

二に曰く王禮

按ずるに、冠婚升附、殿上尊號を上げ、立太子、藉田、大射は、皆な王廟の缺くべからざる所の者なり。右晉以下制作の名題、太多し、今錄せず。

三に曰く鼓吹

按ずるに、鼓吹は總名なり、分ちて之を言へば五あり、曰く黃門鼓吹、曰く騎吹、曰く橫吹、曰く短簫、曰く鑼歌、曰く鼙歌。

○黃門鼓吹

黃門鼓吹は、漢の明帝、樂四品を爲るの一にして、朝饗燕會の樂歌は、殿庭に列する者是れなり、後世朝饗燕會の樂、皆黃門に依りて作る、故に之を黃門鼓吹と謂ふ、漢辭は則ち傳はらず、晉より以下の制作は、尙ほ存す。

晉四廂樂歌 宋三朝雅樂歌 梁三朝雅樂歌 北齊元會大饗樂歌

右其餘名題今亦不錄焉

騎吹 騎吹者軍駕從行道路所奏之樂也。漢有務威、黃雀、玄雲、遠如、期諸曲。是辭不存焉。自魏迄唐皆用詞。亦不傳。今所存唯趙宋導引歌辭。即古者騎吹之義也。蓋臣下得奏鼓吹。自漢以來皆然也。

宋寧宗親耕藉田導引曲 宋眞宗奉

太廟寶冊導引曲

右其餘名題今亦不錄焉

橫吹 橫吹者軍中馬上所奏之樂也。橫吹有鼓角。有胡角。制本起於胡。中國所用鼓角。蓋習胡角而爲之也。應胡節之聲。鼓字義以角代。蓋起軍事也。而鼓角與胡角。其曲亦得以相參用。自漢張騫入西域傳其法於西京。唯得摩訶兜勒一曲。李延年因胡曲更造新聲二十八曲。魏晉以來唯存十曲。又西京雜記云。戚夫人善歌。出塞入塞望歸之曲。則高帝已有之。疑不起於延年也。

隋禮詩則卷之下

晉四廂樂歌 宋三朝雅樂歌 梁三朝雅樂歌 北齊元會大饗樂歌

右其餘の名題は、今亦た録せず。

騎吹 騎吹は、軍駕從行の道路に奏する所の樂歌なり。漢に務威、黃雀、玄雲、遠如の諸曲あり、其の辭は存せず。魏より唐に及び、皆な詞を借用す、亦た傳はらず、今存する所は、唯だ趙宋の導引歌辭にして、即ち古騎吹の義なり。蓋、臣下も鼓吹を奏するを得、漢より以來皆然なり。

宋寧宗の親耕藉田導引曲 宋眞宗の奉太廟寶冊導引曲

右其餘の名題は今亦た録せず。

橫吹 橫吹は軍中馬上に奏する所の樂なり。橫吹に鼓角あり、胡角あり。制は本と胡に起る中國用ゆる所の鼓角は、蓋胡角に習ふて之を爲れり。胡節の聲に應ず、鼓の字義は角を以て蓋に代へ、軍事を鼓起するなり。而して鼓角と胡角と、其の曲亦た以て相參用することを得。漢の張騫の西域に入りしより、其の法を西京に傳へ、唯、摩訶兜勒一曲を得たり。李延年は胡曲によりて、新聲二十八曲を更造し、魏晉以來唯、十曲を存す。又、西京雜記に云ふ、戚夫人善く出塞入塞望歸の曲を歌ふと、則ち高帝已に之あり、疑ふらくは延年に起るにあらざるなり。

漢横吹十曲

黄鵠吟 隴頭吟 出關 入關 出塞

入塞 折楊柳 黄覃子 赤之楊

望行人

又有七曲已下其後所加也

關山月 洛陽道 長安道 豪俠行

梅花落 紫驢馬 驄馬

又有四曲

雨雪 劉生 古劍行 洛陽公子行

右諸曲古辭並亡唯存出塞紫驢馬二曲

梁鼓角横吹九曲本三十六曲其二十五曲辭亡

企由 瑯琊王 鉅鹿公主 紫驢馬

黄淡思 地驅樂 雀勞利 慕容垂

隴頭水

漢横吹十曲

黄鵠吟 隴頭吟 出關 入關 出塞 入塞 折楊柳

黄覃子 赤之楊 望行人

又た七曲あり已下は其の後の加ふる所なり

關山月 洛陽道 長安道 豪俠行 梅花落 紫驢馬

驄馬

又た四曲あり

雨雪 劉生 古劍行 洛陽公子行

右諸曲は古辭竝に亡ぶ唯だ出塞紫驢馬の二曲を存す

梁鼓角横吹九曲本と三十六曲なり其の二十五曲は辭亡ぶ

企由 瑯琊王 鉅鹿公主 紫驢馬 黄淡思 地驅樂

雀勞利 慕容垂 隴頭水

又有胡吹三曲本十四曲其十一曲辭亡

淳于王 東平劉生 捉搦

後魏以下橫吹及橫吹別曲

白鼻騮 隔谷歌 木蘭辭

右其餘名題今亦不詳焉

短簫鏢歌

短簫鏢歌者、師旋賦、功之樂歌也、周禮所謂王大捷則僖樂、軍大獻

則僖歌是也、新、續也、長、短爲宴樂、短爲軍樂、鏢如鈴而有舌、執柄而鳴之、則人以金鏢止鼓、然說者或謂漢歌不專軍樂也、魏以下倣而爲之、樂以爲軍樂、未可曉矣。

漢短簫鏢歌十八曲本二十二曲、其四曲辭亡。

朱鷺 思悲翁 艾如張 上之回 雍

離 戰城南 巫山高 上陵 將進酒

君馬黃 芳樹 有所思 雉子班 聖

人出 上邪 臨高臺 石流 釣竿

諸體詩別卷之下

又た胡吹三曲あり本と十四曲にして、其の十一曲は辭亡ぶ。

淳于王○東平劉生○捉搦

後魏以下の横吹及び横吹別曲

白鼻騮 隔谷歌 木蘭辭

右其餘の名題は今亦た録せず。

短簫鏢歌

短簫鏢歌は師ち師旋りて功を獻するの樂歌なり、周禮に謂はゆる王大に捷つときは則ち僖樂す軍

大に獻するときは則ち僖歌すとは是なり、簫は鏢なり、長簫を宴樂と爲し、短簫を軍樂と爲す、鏢は鏢の如くにして舌あり、柄を執て之を鳴らす、則人は金鏢を以て鼓を止む、然るに說者或は謂ふ、漢歌は喜ばら軍樂ならずと、魏以下倣ふて之を爲る、樂して以て軍樂と爲す、未だ曉る可からず。

漢短簫鏢歌十八曲本と二十二曲にして、其の四曲は辭亡ぶ。

朱鷺 思悲翁 艾如張 上之回 雍離 戰城南 巫

山高 上陵 將進酒 君馬黃 芳樹 有所思 雉子

班 聖人出 上邪 臨高臺 石流 釣竿。

右尙有魏吳晉以下名題、今不錄焉。

警嚴

警嚴曲車駕所止前衛警場樂歌也蓋本周之暮鼓所謂夜戒守鼓者也自漢迄唐寂然無聞至宋始行之。

右其名題今不錄焉。

四曰樂舞

按凡音樂以舞爲主古有六舞雲門代之樂總稱爲萬舞周亡四代之樂不傳秦餘韶武而文武二舞亦具矣因之秦漢以下作諸舞蓋古樂唯歌詩有辭而舞則無辭而工但以譜相傳受故簡籍不傳舞之有辭自漢東平王蒼始也然已失古意。

右樂舞之歌辭極多、名題今亦不錄焉。

五曰琴曲歌辭

按樂有八音其五曰絲琴者絲以正人心者也太古五絃以應五音周文武各加一絃故世稱二絃爲文武絃明朝多用七絃從周制也大聲不喧嘩而流便小聲不湮滅而明誠治世之和音雅樂之君長也故八音竝作則琴在乎其中心而辭從諸曲若獨奏一器則琴自別有歌辭故特爲一類其辭之別有八。

右尙有魏吳晉以下名題あり、今錄せず。

警嚴

警嚴曲は車駕の止る所の前衛警場の樂歌なり、蓋周の暮鼓に本づく、謂はゆる夜戒の守鼓なる者なり、漢より唐に迄ぶまで寂然として聞ゆるなし、宋に至りて始めて之を行ふ。

右其名題は今録せず。

四に曰く樂舞

按ずるに凡そ音樂は舞を以て主と爲す、古に六舞あり、雲門大成大磬大夏大濩大武と周人は六代の樂を兼ね、總稱して萬舞と爲す、周亡びて四代の樂傳はらず、秦は韶武を餘して文武の一舞亦た具はる、之に因て秦漢以下、諸舞を作れり蓋古樂は唯歌詩は辭ありて、舞は則ち辭なし、師工は但し譜を以て相ひ傳受す、故に簡籍は傳はらず、舞の辭あるは漢の東平王蒼より始まれり、然れども已に古意を失す。

右樂舞之歌辭は極めて多し、名題は今亦録せず。

五に曰く琴曲歌辭

按ずるに、樂に八音あり、其の五に曰く、絲を樂止して以て人心を正す者なり、太古は五絃以て五音に應ず、周の文武は各一絃を加ふ、故に世に二絃を稱して文武絃と爲す、明朝は多く七絃を用ふ、周制に従ふなり、大聲は喧嘩にして流便ならず、小聲は湮滅して聞へずんば、あらざる誠に治世の和音にして、雅樂の君長なり、故に八音竝ひ作らば、則ち琴は其の中に在りて、辭は諸曲に從ふ、若し獨一器を奏せば、則ち琴は自ら別に歌辭あり、故に特に一類と爲す、其の辭の別八あり。

暢和暢者
爲暢。

神人暢

操解已出命題之部

將歸操稱孔子作猗蘭操同上龜山操同上

越裳操稱周公作拘幽操稱文王作岐山操稱周公爲

文王履霜操稱尹伯雉朝飛操子稱轅別

鶴操稱商陵牧子作殘形操稱曾子作水仙操稱伯襄

陵操同上十二操

引解已出命題之部

列女引 伯妃引 貞女引 思歸引

霹靂引 走馬引 琴引 楚引 筮

篋引以上謂之九九引○魯庵云後人以篋篋入九九引爲琴曲誤矣

吟解已出命題之部

箕子吟 夷齊吟

諸體詩則卷之下

暢和暢する者
を暢と爲す。

神人暢

操解は已に命題の部に出づ

將歸操孔子の作猗蘭操上に龜山操上に越裳操周公の

す、拘幽操文王の作岐山操周公文王の爲履霜操尹伯奇

す、雉朝飛操牧犢子の別鶴操商陵牧子の殘形操曾子の

す、水仙操伯牙の作襄陵操上に同じ○以上之

引解は已に命題の部に出づ

列女引 伯妃引 貞女引

引 琴引 楚引 筮篋引以上之を九九引といふ○魯庵云ふ後人は篋篋を以て九九引

に入れて琴曲と爲すは誤れり。

吟解は已に命題の部に出づ

箕子吟 夷齊吟

諸體詩則卷之下

弄解已出命題之部

廣陵弄 陽春弄 悅人弄 連珠弄

調調理者曰調

子晉調

歌解已出命題之部

南風歌 鹿鳴 伐檀 騶虞 鶴巢

虞夏歌 琴歌

胡笳十八拍胡笳胡中樂也此辭乃具樂曲亦古琴操之類故古人入琴曲

蓋漢蔡邕女琰所自何奴邈而作也

六曰相和歌辭按漢舊歌也絲竹更相和執節者蓋因絃管金石造歌以被之

者也其制有八

相和引

箏篥引 宮引 商引 角引 徵引

羽引

弄解已出命題之部

廣陵弄 陽春弄 悅人弄 連珠弄

調調理者曰調

子晉調

歌解已出命題之部

南風歌 鹿鳴 伐檀 騶虞 鶴巢 虞夏歌 琴歌

胡笳十八拍胡笳は胡中の樂なり此の辭は乃ち樂曲に具る亦た古樂操の類なり故に古人は樂曲に入る

蓋漢の蔡邕の女琰の何奴より邈りて作りし所なり

六に曰く相和歌辭按ずるに漢の舊歌なり絲竹更相和を造り以て之に被らざる者なり其の制八あり

相和引

箏篥引 宮引 商引 角引 徵引 羽引

相和曲

氣出倡 精列 江南 度關山 東

光 十五 薤露 蒿里 觀歌 對

酒 雞鳴 烏生 平陵東 東門

陌上桑

吟嘆曲

大雅吟 王明君 楚王吟 楚妃嘆

王子喬

平調曲 晉荀勗撰薤露、雞鳴、烏生、平陵東、東門、陌上桑、大雅吟、王明君、楚王吟、楚妃嘆、王子喬、

商三調、皆用房中樂之遺聲也。

長歌行 短歌行 長歌短歌、皆歌也。 猛虎行

古調云、飢不從猛虎食、暮不從野雀栖、野雀安無巢、游子爲誰隨、今但取首句二字、以命

題、燕歌行 燕地名 從軍行 鞠歌行

清調曲

諸體詩則卷之下

相和曲

氣出倡 精列 江南 度關山 東光 十五 薤露

蒿里 觀歌 對酒 雞鳴 烏生 平陵東 東門

陌上桑

吟嘆曲

大雅吟 王明君 楚王吟 楚妃嘆 王子喬

平調曲 晉荀勗撰薤露、雞鳴、烏生、平陵東、東門、陌上桑、大雅吟、王明君、楚王吟、楚妃嘆、王子喬、

皆用房中樂之遺聲也。

長歌行 短歌行 長歌短歌、皆歌也。 猛虎行 古調云、飢不從猛虎食、暮不從野雀栖、野雀安無巢、

飢不從猛虎食、暮不從野雀栖、野雀安無巢、

今但取首句二字、以命題、 燕歌行 燕地名 從軍行 鞠歌行

清調曲

苦寒行 豫章行 董逃行 相逢行
 長安有狹斜行 塘上行 浮萍行
 秋胡行

瑟調曲

善哉行 隴西行 折楊柳行 西門
 行 東門行 東西門行 順東西門
 行 却東西門行 飲馬長城窟行
 上留田行 新成安樂宮行 婦病行
 孤子生行 放歌行 大牆上行 野
 田黃雀行 釣竿行 臨高臺行 長
 安城西行 武舍之中行 鴈門太守
 行 豔歌何嘗行 豔歌羅敷行 豔
 歌福鍾行 豔歌雙鴻行 煌煌京洛
 行 帝王所居行 門有車馬客行

苦寒行 豫章行 董逃行 相逢行 長安有狹斜行
 塘上行 浮萍行 秋胡行

瑟調曲

善哉行 隴西行 折楊柳行 西門行 東門行 東
 西門行 順東西門行 却東西門行 飲馬長城窟行
 上留田行 新成安樂宮行 婦病行 孤子生行 放
 歌行 大牆上行 野田黃雀行 釣竿行 臨高臺
 行 長安城西行 武舍之中行 鴈門太守行 豔歌
 何嘗行 豔歌羅敷行 豔歌福鍾行 豔歌雙鴻行
 煌煌京洛行 帝王所居行 門有車馬客行 牆上難

牆上難爲趨行 日重光行 月重輪

行 蜀道難行 權歌行 有所思行

蒲坂行 採梨橋行 白楊行 胡無

人行 青龍行 公無渡河行

右釣竿、臨高臺、有所思三曲、即漢短箫鏡歌、折楊柳一曲、名同鼓吹曲、而詞不同、又豔歌羅敷行、即相和十五曲中之陌上桑也、公無渡河、即相和六引中之雙篴引、是其調相出入者已。

側調曲 樂府清調之下、又有側調、呂向以爲瑟

詳何謂、且無曲辭、以傷歌行充之、今又從之。

傷歌行

楚調曲 本漢之房中樂之遺聲也。

白頭吟 梁甫吟 東武吟 怨詩行

怨歌行 長門怨 婕妤怨 玉階怨

七曰清商曲歌辭 按清商一名清樂、乃九代之遺聲、其始相和三調是也、追

詩體詩則卷之下

爲趨行 日重光行 月重輪行 蜀道難行 權歌行

有所思行 蒲坂行 採梨橋行 白楊行 胡無人行

青龍行 公無渡河行

右釣竿、臨高臺、有所思三曲、即漢短箫鏡歌、折楊柳一曲、名同鼓吹曲、而詞不同、又豔歌羅敷行、即相和十五曲中之陌上桑也、公無渡河、即相和六引中之雙篴引、是其調相出入者已。

側調曲 樂府清調之下、又有側調、呂向以爲へらく、瑟に三調あり、平清側は皆た瑟調なり、古人亦た未だ此の調なるを詳にする能はず、且つ曲辭なし、傷歌行を以て之に充つ、今又之に從ふ。

傷歌行

楚調曲 本と漢の房中樂の遺聲なり。

白頭吟 梁甫吟 東武吟 怨詩行 怨歌行 長門

怨 婕妤怨 玉階怨

七に曰く清商曲歌辭 按するに、清商二名は清樂、乃ち九代の遺聲にして、其の始は相和三調是なり、音の

晉懷帝永嘉之亂去洛陽南渡遂都于建業
 四海分崩伶官樂器皆沒漢魏所相傳古詞
 曲辭之音亡散後魏孝文宣武相繼南伐得
 江左所傳之舊曲及江南吳歌荆楚四聲
 文謂之華夏正聲也然其音本散聲故得西
 者而數爲損益亦其去古調轉遠深武改之
 曲製江南弄七曲而列於清商然其辭多
 淫豔鄙俚不足采焉故今清商之品有三

吳聲歌

子夜歌 子夜四時歌 大四夜歌

上聲歌 觀聞歌 觀聞變歌 前溪

歌 阿子歌 丁督護歌 團扇郎

七日夜女郎歌 長史變歌 黃生曲

黃鸝歌 碧玉歌 桃葉歌 長樂佳

歡好曲 懊悽歌 華山畿 讀曲歌

春江花月夜 玉樹後庭花 汎龍舟

黃竹子歌 江陵女歌 神絃歌 宿

河曲 送君曲 聖郎曲 嬌女曲

吳聲歌

懷帝の永嘉の亂に洛陽を去つて南渡し遂に建業に都
 するに迄んで四海分崩し伶官樂器皆な沒す漢魏相傳
 する所る古詞曲辭の音亡散す後魏の孝文宣武相繼て
 南伐し江左に傳ふる所の舊曲及び江南の吳歌荆楚の
 四聲を得たり隋文は之を華夏の正聲なりと謂へり然
 れども其の音本と聲散を收めて之を得る者にして數
 損益を爲すも亦た其の古調を去ること轉じて遠し環
 武は西曲を改めて江南弄七曲を製して清商に列す
 然れども其の辭は淫豔鄙俚多し采
 るに足らず故に今清商の品に三あり

子夜歌 子夜四時歌 大四夜歌 上聲歌 觀聞歌

觀聞變歌 前溪歌 阿子歌 丁督護歌 團扇郎

七日夜女郎歌 長史變歌 黃生曲 黃鸝歌 碧玉

歌 桃葉歌 長樂佳 觀好曲 懊悽歌 華山畿 讀

曲歌 春江花月夜 玉樹後庭花 汎龍舟 黃竹

子歌 江陵女歌 神絃歌 宿河曲 送君曲 聖郎

曲 嬌女曲 白石郎曲 青溪小姑曲 湖絃姑曲

曲 嬌女曲 白石郎曲 青溪小姑曲 湖絃姑曲

白石郎曲 青溪小姑曲 湖就姑曲
姑恩曲 採蓮童曲 明下童曲 同
生曲。

西曲歌

石城樂 烏夜啼 莫愁樂 姑客樂
襄陽樂 江陵樂 壽陽樂 翳樂
賈客樂 大堤女 雍州南湖北 三州
曲 采桑曲 襄陽踏銅蹄 青陽度
青驄白馬 其戲樂 安東平 女
兒 來羅 那呵灘 孟珠夜黃 夜
度娘 長松標 雙行纏 黃督 西
京樂 尋陽樂 攀楊枝 白附鳩
拔蒲 作蠶絲 楊叛兒 西烏夜飛

月節楊柳歌 龍笛曲 採蓮曲

諸體詩則卷之下

姑恩曲 採蓮童曲 明下童曲 同生曲。

西曲歌

石城樂 烏夜啼 莫愁樂 姑客樂 襄陽樂 江陵
樂 壽陽樂 翳樂 賈客樂 大堤女 雍州南湖北
三州曲 采桑曲 襄陽踏銅蹄 青陽度 青驄白馬
其戲樂 安東平 女兒 來羅 那呵灘 孟珠夜黃
夜度娘 長松標 雙行纏 黃督 西京樂 尋陽樂
攀楊枝 白附鳩 拔蒲 作蠶絲 楊叛兒 西烏夜
飛 月節楊柳歌 龍笛曲 採蓮曲 采菱曲 鳳笙
曲 遊女曲 胡雲曲 趙瑟曲 秦箏曲 陽春曲

二九

采菱曲 鳳笙曲 遊女曲 朝雲曲

趙瑟曲 秦箏曲 陽春曲 上雲曲

鳳臺曲 桐柏曲 方諸曲 玉龜曲

金丹曲 金臺曲 簫史曲 方丈。

江南弄說出上
有七曲。

八曰雜曲歌辭自漢迄六朝名題
極夥、今不錄焉。

九曰新曲歌辭按新曲歌辭、唐人所作新樂府
歌辭也名題與前代之諸樂府

自異不可不知矣、蓋唐人樂府、雖襲古
題者、其實歌行已、然未嘗可混之也。

登幽州臺歌 峨嵋山月歌 伊州歌

短歌 孟門歌 封大夫破播仙凱

歌 出塞行 旅行 邯鄲少年行

歌思引 成都曲 塞下曲 送遠曲

青樓曲 昭陽曲 春曉曲 寄衣曲

贈遠曲 平蕃曲 遊子吟 節婦吟

上雲曲 鳳臺曲 桐柏曲 方諸曲 玉龜曲 金丹

曲 金臺曲 簫史曲 方丈

江南弄說は上に
出づ七曲あり。

八に曰く雜曲歌辭漢より六朝に迄んで名題

九に曰く新曲歌辭按ずるに、新曲歌辭は、唐人の作る所の新樂
府歌辭なり、名題は前代の諸樂府と自ら異
なり、知らざる可からず、蓋唐人の樂府は古題を襲ふ
者と雖も、其の實は歌行のみ、然れども未だ嘗て之を
混ず可
からず。

登幽州臺歌 峨嵋山月歌 伊州歌 短歌 孟門歌

封大夫破播仙凱歌 出塞行 旅行 邯鄲少年行

歌思引 成都曲 塞下曲 送遠曲 青樓曲 昭陽

曲春曉曲 寄衣曲 贈遠曲 平蕃曲 遊子吟 節

婦吟 涼州詞 關山詞 猛虎詞 棄婦詞 昭君怨

涼州詞 蹋歌詞 猛虎詞 棄婦詞

昭君怨 離怨 瑤瑟怨 怨辭 清

鏡歎 醜樂 青青水中蒲。

樂府詩格世以樂府爲詩之一體尙矣然樂府

備有古今諸體是以其格莫不有者安得有稱此則樂府格者故今但舉其所備有之諸體以示焉各考之原作可以得篇法

句法讀法矣。

有三言、練時日、雷震震等篇是也、有四

言、婆娑引、善哉行、等篇是也、有五言、鷄

鳴、隴西等篇是也、有雜言、烏生、鴈門等

篇是也、有六言、妾薄命等篇是也、有

七言、燕歌行等篇是也、有五言絕、紫駟

枯魚等篇是也、以上皆漢魏之作也、有七言絕、挾瑟

歌等篇是也、有五言律、折楊柳、梅花落

等篇是也、以上皆齊梁人之作也、有五言排律、虞世

諸體時期卷之下

離怨 瑤瑟怨 怨辭 清鏡歎 醜樂 青青水中蒲

樂府詩格世以樂府を以て詩の一體と爲す尙し然れども樂府

は古今の諸體を備有す是を以て其の格有らざる者なし安くんぞ此れ則ち樂府の格と稱する者あるを得んや故に今但し其の備有する所の諸體を擧げて以て示す

各之を原作に考へ以て篇法句法讀法を待べし。

三言あり、練時日、雷震々等の篇是なり、四言あり、婆

娑引、善哉行等の篇是なり、五言あり、鷄鳴隴西等の

篇是なり、雜言あり、烏生鴈門等の篇是なり、六言

あり、妾薄命等の篇是なり、七言あり、燕歌行等の篇

是なり、五言絶あり、紫駟枯魚等の篇是なり、以上は皆漢魏の

作なり、七言絶あり、挾瑟歌等の篇是なり、五言律あ

り、折楊柳、梅花落等の篇是なり、以上は皆齊梁人の作なり、五

言排律あり、虞世南の從軍行、耿溥の出塞曲是なり、

南從軍行、耿湓出塞曲、是也、有七言律

詩、沈佺期、盧家少婦、王摩詰居延城外、是

也、以上皆唐人作也、有五言長篇、孔雀東南飛、是

也、漢人之作也、有七言長篇、木蘭歌、是也、晉人作也、

也、

樂府要論

騷一變爲樂府

胡東越云、四言盛於周、漢一變而爲五言、雖騷盛於楚、漢一變而爲樂府、體雖不同、詞實竝駕、皆變之善者也。

詩與樂府始分

又云、三百篇薦郊廟、被絃歌、詩卽樂府、樂府卽詩、猶兵寓於農、未嘗二也、詩亡樂廢、屈宋代興、九歌等篇以侑樂、九章等作以抒情、途

七言律詩あり、沈佺期の盧家少婦、王摩詰の居延城外

是なり、以上は皆な唐人の作なり、五言の長篇あり、孔雀東南飛、是な

り、漢人の作なり、七言の長篇あり、木蘭歌、是なり、晉人の作なり、

也、

樂府要論

騷一變して樂府と爲る

胡東越云、四言は周に盛にして、漢には一變して五言と爲る、離騷は楚に盛にして、漢には一變して樂府と爲る、體は同じからずと雖も、詞は實に竝べ駕す、皆變の善き者なり。

詩と樂府と始めて分る

又た云ふ、三百篇は郊廟に薦め、絃歌に被らしむ詩は卽ち樂府、樂府は卽ち詩なり、猶ほ兵の農に寓するがごとし、未だ嘗て二あらざるなり、詩亡び樂廢れ、屈宋代興

轍漸兆、至漢、郊祀十九章、古詩十九首、不相爲用、門類始分。

唐人名樂府者、其實則歌行

又云、梁陳而下、樂府古詩變而律絕、唐人李杜高岑名爲樂府、實則歌行、張籍王建卑淺相矜、長吉庭筠怪麗不典、唐末五代復變詩餘、宋人之詞、元人之曲、制作紛紛、皆曰樂府、不知古樂府、其亡久矣。

樂府古今三變

又云、樂府之體、古今凡三變、漢魏古詞一變也、唐人絕句一變也、宋元詞曲一變也、六朝聲偶變唐之漸、五季詩餘變宋之漸乎。

唐歌曲止絕句

又云、唐歌曲如、水調歌、涼州、伊州之類、止用

り、九歌等の篇は、以て樂に侑む、九章等の作は、以て情を抒ぶ、途轍漸く兆す、漢に至りて、郊祀十九章と古詩十九首と、用を相爲さず、門類始めて分る。

唐人の樂府と名づくる者は、其の實は、則ち歌行なり。又云ふ、梁陳より而下、樂府古詩變じて律絶となる、唐人李杜高岑名づけて樂府と爲すもの、實は、則ち歌行なり、張籍王建は卑淺相ひ矜り、長吉庭筠は怪麗不典なり、唐末五代は復た詩餘に變ず、宋人の詞、元人の曲、制作紛紛として、皆な樂府と曰ふ、知らず古樂府は、其の亡ぶること久しきを。

樂府は古今三變せり

又た云ふ、樂府の體は、古今凡そ三變せり、漢魏の古詞は一變なり、唐人の絶句は一變なり、宋元の詞曲は一變なり、六朝の聲偶は、唐に變ずるの漸にして、五季の詩餘は、宋に變ずるの漸か。

唐の歌曲は止た絶句のみ。

又た云ふ、唐の歌曲は、水調歌、涼州、伊州の類の如き、止た

五七言絶、近體、閒有采者、亦截作絶歌、至五七言古、全不入樂矣。

唐截律詩爲樂府、有所由來。

又云、來羅曲、君子防未然、莫近嫌疑邊、瓜田不躡屣、李下不正冠、卽君子行前、半首唐樂府、刪節律詩、蓋出此。

唐樂府所歌絶句、非緣樂府設。

又云、唐樂府所歌絶句、或節取古詩首尾、或截近體半章、於本題面目、全無關涉、細考諸人原作、則咸自有謂、非緣樂府設也。

樂府但取聲調之諧。

又云、樂府自魏失傳、文人擬作多與題左、前輩歷有辨論、愚意、當時但取聲調之諧、不必詞義之合也、其文士之詞、亦未必盡爲本題。

五七言絶を用ゆ、近體間ま采ること有る者は、亦た截して絶歌と作す、五七言古に至りては、全く樂に入らず。

唐は律詩を截して樂府と爲す、由て來る所あり。

又た云ふ、來羅曲に「君子は未然に防ぐ、嫌疑の邊に近くこと勿れ、瓜田に履を躡まず、李下に冠を正さず」と、卽ち君子行の前半首は唐の樂府なり、律詩を刪節する、蓋此に出づ。

唐の樂府に歌ふ所の絶句は樂府に緣つて設くるに非ず。

又た云ふ、唐の樂府に歌ふ所の絶句は、或は古詩の首尾を節取し、或は近體の半章を截つ、本題の面目に於て、全く關涉なし、細に諸人の原作を考ふるときは、則ち咸な自から謂れあり、樂府に緣りて設くるに非らざるなり。

樂府は但聲調の諧を取る。

又た云ふ、樂府は魏より傳を失ふ、文人の擬作多く題と左す、前輩歷く辨論あり、愚意ふに、當時但聲調の諧を取り、詞義の合ふを必せず、其の文士の詞も、亦た未だ必ずしも盡く本題の爲めにして作らず、陌上桑は、本雜數

而作、陌上桑本言羅敷、而晉樂取屈原山鬼以奏、陳思置酒高堂上、題曰筵篔引、一作野田黃雀行、讀其詞皆不合、蓋本公謙之類、後人取填二曲耳、其最易見者、莫如唐樂府。

題甚合調或乖、則失之千里、

又云、用本題事而不失本曲調上也、調不失而題少舛次也、題甚合而調或乖、則失之千里矣。

唐樂府有太白少陵

又云、樂府則太白擅奇於古今、少陵嗣跡風雅。

樂府至太白古今一大變

又云、六朝樂府雖弱靡、然尙因仍軌轍、至太白才力絕人、古今體格子、是一大變、杜陵獨

を言ふ、而るに晉樂は屈原の山鬼を取りて以て奏し、陳思の置酒高堂の上を題して筵篔引と曰ふ、一に野田黃雀行に作る、其の詞を讀むに、皆な合はず、蓋、本と公謙の類なり、後人取りて二曲に填つるのみ、其の最も見易き者は、唐の樂府に如くはなし。

題は甚だ合ひて、調は或は乖くときは則ち之を千里に失す。

又た云ふ、本題の事を用ひ而して本曲の調を失せざるは上なり、調失せずして題少しく舛ふは次なり、題は甚だ合して調或は乖くときは則ち之を千里に失す。

唐の樂府に太白少陵あり。

又た云ふ、樂府は則ち太白、奇を古今に擅まゝにし、少陵は跡を風雅に嗣ぐ。

樂府は太白に至りて古今の一大變。

又た云ふ、六朝の樂府は弱靡なりと雖も、然も尙ほ軌轍に因仍す、太白に至りては、才力人に絶す、古今の體格是に于いて一大變す、杜陵は、獨、漢人の遺意を得たり、第一

得漢人遺意、第己調時時雜。

古樂府可擬

古人云、古樂府失傳、然古辭尙存焉、讀古辭、各能得其調、則古樂府可擬矣、唐人擬作皆是也、有一篇調、有一句調、有一字韻、一句調出於一篇調、一字韻出於一句調、故一篇自純調、無他調能亂其間也。

◎五言古詩

按五言之詩、生於五子之歌、衍於三百篇、而廣於離騷、特其體未備耳、逮漢李陵蘇武、始以爲篇、嗣是汪洋於魏、汗漫於晉宋、至於陳隋、而古調絕矣、唐初承前代之弊、幸有陳子昂、而振之。

五言古詩篇法

己の調時々雜はる。

古樂府は擬すべし

古人云ふ、古樂府は傳を失す、然れども古辭尙ほ存す、古辭を讀んで各能く其の調を得るときは、則ち古樂府は擬すべし、唐人の擬作は皆な是なり、一篇の調あり、一句の調あり、一字の韻あり、調は一篇の調より出で、一字の韻は一句の調より出づ、故に一篇自から純調にして、他調の能く其の間を亂る無し。

◎五言古詩

按ずるに、五言の詩は、五子之歌に生じ、三百篇に衍し而して、離騷に廣まる、特に其の體未だ備はらざるのみ、漢の李陵蘇武に遠んで、始めて以て篇と爲す、是に嗣で魏に汪洋し、晉宋に汗漫し、陳隋に至りて古調絶す、唐初は前代の弊を承けたり、幸に陳子昂ありて之を振へり。

五言古詩の篇法

句數無定格、古人放四句至三百五十句、

孔雀東南飛詩、三百五十句、古人以爲五言古詩長篇、然其實樂府而非古詩也、若夫文選中

五言古詩、則未有至雙殺而無單殺、十九

於六十句以上者也、

首俱是短篇、胡東越云、古詩短體如十九限

句數幾句以上稱長篇之說、華人詩式所

絕無、四句或六句之短篇、貴辭簡意味

長、不明白說盡、長篇貴有變化之妙、勿

拘分段過脈、回照贊歎之說、李贄明云、長

五言古詩韻法 此未載古今詩式者也。

起句率不押韻、十九首押韻者僅一首、雖大篇

不數換韻、王仲宣從軍行詩五十八句、潘安

仁河陽縣作五十四句、俱一換韻

已、又十九首換韻詩僅三首而亦皆一換之、至

諸體詩則卷之下

句數に定格なし、古人は四句より放ちて三百五十句

に至る、孔雀東南飛の詩は三百五十句なり、古人以て五

言古詩の長篇と爲す、然れども其の實は樂府に

して古詩に非ざるなり、若し夫れ文選中の五言古

詩は則ち未だ六十句以上に至る者あらざるなり、

して單殺なし、十九首俱に是れ短篇なり、胡東越云、

は十九首の如き、彫琢を假、句數を限りて、幾句以上を長

篇と稱するの説は、華人の詩式に絶えて無き所なり、

四句或は六句の短篇は、簡にして意味長く、明白

に説き盡くさざるを貴ぶ、長篇は變化の妙あるを

貴ぶ、分段過脈、回照贊歎の説に拘ること勿れ、李贄明云

古風は、最も鋪叙を忌む、意盡すべからず、

力竭すべからず、變化の妙あるを貴ぶ。

五言古詩の韻法 此れ未だ古今の詩式に載せざる者なり。

起句は率ね韻を押さず、十九首韻を押すもの僅に一首の

み、李蘇が詩に至りては皆押さ

ず、大篇と雖も、數々韻を換へず、王仲宣の從軍行の詩は、

必從前句換之漢魏盛唐諸公之作皆然也、惟十九首則從前句換之、可以平韻換仄韻、可以仄韻換平韻、可以平韻換平韻、可以仄韻換仄韻、凡前句末不拘平仄。

五言古詩要論

五言折繁簡之衷、居文質之要、

胡東越云、四言簡質、句短而調未舒、七言靡浮、文繁而聲易雜、折繁簡之衷、居文質之要、蓋莫尙於五言。

五言有盛衰亡

又云、五言盛於漢、暢於魏、衰於晉宋、亡於齊梁。

古詩驟讀似易

又云、古詩和平淳雅、驟讀極易、然愈得其意、

前句より之を換へず漢魏盛唐の諸公の作は、皆な然り、惟十九首は則ち前句より之を換ふ。平韻を以て仄韻に換ふべし、仄韻を以て平韻に換ふべし、平韻を以て平韻に換ふべし、仄韻を以て仄韻に換ふべし、凡そ前句の末は平仄に拘はらず。

五言古詩の要論

五言は繁簡の衷を折し、文質の要に居る。

胡東越云ふ、四言は簡質、句短にして調未だ舒びず、七言は靡浮、文繁にして聲雜り易し、繁簡の衷を折し、文質の要に居るは、蓋、五言に尙ふるは莫し。

五言に盛衰亡あり、

又た云ふ、五言は漢に盛にして、魏に暢び、晉宋に衰へ、齊梁に亡ぶ。

古詩は驟に讀めば易きに似たり

又た云ふ、古詩は和平淳雅にして、驟かに讀めば極めて

則愈覺其難。

以畫鬼神與人物譬難易。

又云、郊廟鑾歌似難擬而實易、猶畫家之於佛道鬼神也、古詩樂府似易擬而實難、猶畫家之於狗馬人物也。

陶孟韋柳之古詩、調弱格偏。

又云、曹劉阮陸之爲古詩也、其源遠其流長、其調高其格正、陶孟韋柳之爲古詩也、其源淺其流狹、其調弱其格偏。

陶謝唐之濫觴

又云、仲默稱曹劉阮陸而不取陶謝、陶阮之變而淡也、唐古之濫觴也、謝陸之增而華也、唐律之先兆也。

六朝古詩、俳體俳語者、不足學

諸體詩則卷之下

易し然れども愈其の意を得れば則ち愈其の難きを覺ゆ。

鬼神と人物とを畫くを以て難易に譬ふ。

又た云ふ、郊廟の鑾歌は擬し難きに似て、實は易し、猶ほ畫家の佛道鬼神に於けるが如し、古詩樂府は擬し易きに似て、實は難し、猶ほ畫家の狗馬人物に於けるがごとし。

陶孟韋柳の古詩は調弱く格偏なり。

又た云ふ、曹劉阮陸の古詩たるや、其の源は遠く、其の流は長く、其の調は高く、其の格は正し、陶孟韋柳の古詩たるや、其の源は淺く、其の流は狹く、其の調は弱く、其の格は偏なり。

陶謝は唐の濫觴なり

又た云ふ、仲默は曹劉阮陸を稱し、而して陶謝を取らず、陶は阮の變にして淡なり、唐古の濫觴なり、謝は陸の増にして華なり、唐律の先兆なり。

六朝の古詩、俳體俳語の者は學ぶに足らず。

又云、何仲默云、陸詩體俳語不俳、謝則體語俱俳、可謂千古卓識。

十九首、孔雀東南飛、不可不讀。

又云、古詩短體如十九首、長篇如孔雀東南飛、皆不假彫琢、工極天然、百代而下、當無繼者。

五言古可勉而能、七言古因才力。

又云、詩至五言古、五言古至兩漢、無論中才即大匠、國工履冰袖手、七言古即不爾、苟天才雄膽、而能刻意前規、則縱橫排蕩、滔滔莽莽、千古不窮、點筆立就、無不可者、然五言古才力不足、可勉而能、七言古非才力有餘、斷不至也。

宋人不知古詩

又た云ふ、何仲默云ふ、陸の詩體は俳し、語は俳せず、謝は則ち體語俱に俳すと、千古の卓識と謂ふべし。

十九首孔雀東南飛は、讀まざる可からず。

又た云ふ、古詩の短體、十九首の如き、長篇孔雀東南飛の如き、皆な彫琢を假らずして、工に天然を極む、百代よりして下に、當に繼ぐ者無かるべし。

五言古は勉めて能くす可し、七言古は才力に因る。

又た云ふ、詩は五言古に至り、五言古は兩漢に至り、中才に論なく、即ち大匠國工も、冰を履み手を袖にす、七言古は即ち爾らず、苟も天才雄膽にして、能く前規に刻意せば、則ち縱橫排蕩、滔滔莽莽、千古窮せず、筆を點じて立ところに就る、可ならざる者なし、然れども五言古は、才力足らざるも、勉めて能くすべし、七言古は、才力餘り有るに非ずんば、斷じて至らざるなり。

宋人は古詩を知らず。

又云、世晉宋人律詩、然律詩猶知有杜、至古詩、第沾沾靖節、蘇李曹劉、邈不介意、若十九首三百篇、殆於高閣東之、如蘇長公、謂河梁出於六朝、又謂陶詩、愈於子建、餘可類推。

◎歌行

按七言古詩、七言長短詩、槩曰歌行、歌者曲調之總名、行者歌中之一體、唐人主燕歌、白紵、行路、難、諸作、而盛爲此體裁、蓋七言其由來遠矣、南風擊壤、興於三代之前、白石易水、作於春秋戰國之世、而篇什之盛、無如騷之九歌、漢則柏梁四愁、皆七言詩所由始也。

歌行篇法

句數無定格、古人放四句、至百數十句、有

諸體詩則卷之下

又云、世に宋人の律詩を著る、然れども律詩は猶ほ杜あるを知る、古詩に至りては、第靖節に沾々として、蘇李曹劉は邈として意に介せず、十九首三百篇の若きは高閣に之を束ぬるに殆し、蘇長公の如きは、謂へらく、河梁は六朝より出づと、又た謂ふ、陶の詩は、子建に愈れりと、餘は類推すべし。

◎歌行

按するに七言古詩、七言長短の詩、槩して歌行と曰ふ、歌は曲調の總名、行は歌中の一體なり、唐人は燕歌、白紵、行路、難の諸作を主とし、而して盛んに此の體裁を爲る、蓋七言は、其の由りて來る遠し、南風擊壤は三代の前に興り、白石易水は、春秋戰國の世に作る、而して篇什の盛なるは、騷の九韻に如くはなし、漢は則ち柏梁四愁、皆な七言の詩の由りて始まる所なり。

歌行篇法

句數に定格なし、古人は、四句より放ちて百數十句

單殺有雙殺單殺者太少し 滕王閣詩尙是短篇

胡東越云初唐短歌子安滕王閣爲冠可以證矣 限句數幾句以上

稱長篇之說華人詩式所不言、短歌貴

辭明意盡與五言相反、長篇貴有變化

之妙、勿拘分段過脈回照贊歎之說總則已

出五言古詩之部

歌行韻法自此以下、率古今詩式所未載者也

七言宜韻起漢魏盛唐諸公之作率韻起

五言不宜韻起崔顥孟門行、王維答張五弟詩皆起句不押韻

七言換韻亦從前句換之爲是唐諸公皆從前句換之

五言換韻亦不從前句換之從後句換之唐諸公皆從後句換之

賈王帝京詩等皆然

有七言不韻起者高適九月九日酬顏少府等詩是也

有五言韻起者王昌齡城傍曲等是也

に至る、單殺あり雙殺あり單殺の者は太だ少し 滕王閣の詩は

尙は是れ短篇なり、胡東越云ふ、初唐の短歌は、子安の滕王閣を冠と爲すと、以て證すべし

數を限り、幾句より以上を長篇と稱するの説は、華人

の詩式に言はざる所なり、短歌は辭明に意盡くるを貴

ぶ、五言と相反す、長篇は變化の妙あるを貴ぶ、分段

過脈回照贊歎の説に拘はる勿れ、總則の説は已に五言古詩の部に出づ

歌行の韻法此より以下は率れ古今の詩式に未だ載せざる所の者なり

七言は韻起に宜し漢魏盛唐諸公の作率れ韻起なり

五言は韻起に宜しからず、崔顥の孟門行、王維の張五弟に答ふる詩は皆な起句に韻を押さず

七言は韻を換ふるも、亦た前句に従ひて之を換ふるを

是と爲す唐の諸公は皆な前句に従つて之を換ふ

五言は韻を換ふるも、亦た前句に従つて之を換へず、賈王帝京詩等皆然り

後句に従つて之を換ふ賈王帝京詩等皆然り

七言の韻起ならざる者あり、高適の九月九日、顏少府に酬ゆる等の詩是なり

五言の韻起なる者あり、王昌齡の城傍の曲等是なり

有七言不從前句換韻而從後句換者、高適

九月九日酬韜少府等詩是也、然非每換韻然也、長篇中惟一處而已。

有五言從前句換韻者、李白蜀道難華作是也、然亦一處而已。

換韻句數無定格。

有二句而換者。

有三句而換者。

有四句五句以上而換者。

有二句而換者二三相連。

有三句而換者二三相連。

有四句五句以上而換者二三相連、駱賓王帝京

京篇、兼有以上者。

有全篇平韻而不換韻者、李白北風、行等是也。

有全篇仄韻而不換韻者、高適九月九日酬韜少府等詩是也。

有全篇平韻而換韻者、李白夜坐、吟等是也。

諸體詩則卷之下

七言の、前句に從つて韻を換へず、而して後句に從つて換る者あり、高適の九月九日、韜少府に酬ゆる等の詩是なり、然れども韻を換ふる毎に然るに非ざるなり、長篇中に、唯一處のみ。

五言の前句に從つて韻を換ふる者あり、李白の蜀道難華、然れども亦一處のみ。

韻を換ふる句數に定格なし。

二句にして換ふる者あり。

三句にして換ふる者あり。

四句五句以上にして換ふる者あり。

二句にして換ふる者二三相連る有り。

三句にして換ふる者二三相連るあり。

四句五句以上にして換ふる者二三相連るあり、駱賓王の帝京篇は、以上の者を兼有す。

全篇平韻にして、韻を換へざる者あり、李白の北風、行等是なり。

全篇仄韻にして、韻を換へざる者あり、高適の九月九日、韜少府に酬ゆる等の詩是なり。

全篇平韻にして韻を換ふる者あり、李白の夜坐の吟等是なり。

四三

有全篇仄韻而換韻者杜甫哀江頭等詩是也。

有全篇一韻而句句用韻者杜甫飲中八仙歌岑參燧燧太

守後庭歌是也。

有用古韻者韓愈此日可憐贈張籍等詩是也。

有一詩用二韻前韻總押二三句後韻押

盡數句者李白烏夜啼岑參邯鄲客舍歌等是也。

有一詩用二韻前韻已押數句後韻但押

二三句者杜甫巢父掉頭不肯住等詩是也。

有一詩不足十句而數換韻者李白烏栖曲等是也。

有前每二句三句數換韻後徹十餘句未

嘗換韻者岑參喜韓樽相過等詩是也。

有一詩齊兩分句數一分用一韻者李白陵子等詩是也。

陵子等詩是也。

有一詩齊兩分句數前用仄韻後用平韻

全篇仄韻にして韻を換ふる者あり杜甫の哀江頭等の詩是なり。

全篇一韻にして句々に韻を用ゆる者あり杜甫の飲中八仙歌、岑參の燧燧の太守後庭歌は是なり。

燧燧の太守後庭歌は是なり。

古韻を用ゆる者あり韓愈の此の日惜む可し、張籍に贈る等の詩是なり。

一詩に二韻を用ひ前韻は總に二三句を押し後韻は

數句を押し盡す者あり李白の烏夜啼、岑參の邯鄲客舍の歌等は是れなり。

一詩に二韻を用ひ前韻は已に數句を押し後韻は但、

二三句を押し者あり杜甫の巢父頭を掉、肯て住まらず等の詩は是なり。

一詩十句に足らず而して數韻を換ふる者あり李白の鳥栖曲等は是なり。

前は二句三句毎に數韻を換へ後は十餘句に徹して

未だ嘗て韻を換へざる者あり岑參の韓樽相の過らるしを數ぶ等の詩是なり。

一詩齊しく句數を兩分し一分に一韻を用ゆる者あり李白の金陵子に示す等の詩是なり。

李白の金陵子に示す等の詩是なり。

一詩齊しく句數を兩分し前は仄韻を用ひ後は平韻

者。王勃滕王閣、宋之問寒食、陸渾別業等詩、是也。

有一詩齊兩分句數、前用平韻、後用仄韻

者。祖頤七夕詞、遜滋山陰、城四樓等詩、是也。

有一詩齊三分句數、一分用一韻者。杜甫上

人家桃樹枝詩、高適人日寄社二拾遺等作、是也。

有一詩齊四分句數、一分用一韻者。岑參

歌送顏真卿使赴河隴等詩、是也。

有一詩五分句數、一分用一韻者。杜甫丹

曹將軍廟等詩、是也。

有篇中有三句相竝押韻處者。王維答張

詩、是也。

有篇中有四句相竝押韻處者。孟浩然夜

等、是也。

有全篇不押韻者。古采蓮曲、是也。

有一詩中或單殺、或雙殺、隨意押韻換韻、

を用ゆる者あり。王勃の滕王閣、宋之問の寒食、陸渾の別業等の詩、是なり。

一詩齊しく句數を兩分し、前に平韻を用ひ、後に仄韻を用ゆる者あり。祖頤の七夕詞、遜滋の山陰、城四樓等の詩、是なり。

一詩齊しく句數を三分し、一分、一韻を用ゆる者あり。

杜甫の「江上の人家桃樹の枝」の詩、高適の人日社二拾遺に寄する等の作、是なり。

一詩齊しく句數を四分し、一分、一韻を用ゆる者あり。

岑參の胡笳の歌、顏真卿の使して河隴に赴くを送る等の詩、是なり。

一詩齊しく句數を五分し、一分、一韻を用ゆる者あり。

杜甫の丹曹將軍廟に贈る等の詩、是なり。

篇中に三句相ひ竝びて韻を押す處ある者あり。王維の

詩に答ふる等の詩、是なり。

篇中に四句相ひ竝びて韻を押す處ある者あり。孟浩然の夜

門に歸るの歌等、是なり。

全篇韻を押さざる者あり。古采蓮曲、是なり。

一詩中に或は單殺し、或は雙殺し、随意に韻を押し韻

諸體詩則卷之下

變化不可窺者、率樂府題長短詩也。唐人

太白此體多矣、即長相思詩、及白紵辭等、可以見也。

歌行句法

有三言短句、有四言短句

有五言短句、有六言短句

有七言長句、有八言長句

有九言長句、有十言長句

有十一言長句、有十二言長句

有合兩短句爲一短句

有合兩短句爲一長句

有合短句長句爲一長句凡合兩句爲一

亦前句。

有長句變短句、短句變長句之間、韻意俱

隨變者不變者。

を換へ、變化窺ふ可からざる者あり、率ね樂府題長短

の詩なり。唐人、惟李太白此の體多し、即ち長相思の詩、及び白紵辭等、以て見る可し。

歌行の句法

三言の短句あり、四言の短句あり

五言の短句あり、六言の短句あり

七言の長句あり、八言の長句あり

九言の長句あり、十言の長句あり

十一言の長句あり、十二言の長句あり

兩短句を合して一短句と爲すあり、兩短句を合して一

長句と爲すあり、短句と長句とを合して一長句と爲

すあり凡そ兩句を合して一句と爲す者は起句に多し、餘も亦た前句。

長句を短句に變じ、短句を長句に變ずるの間に韻意

俱に隨て變ずる者と變ぜざる者とあり。

長短相變句數、無定格。有一句而變。
有三句而變。有從三句至十句以上而

變。

君不見、君不聞、俱是本古樂府中文字、而多在

莫泥矣、蓋非自爲一句者、冠句上者也、然亦限前句。

有冠篇首者 有冠篇腹者 有冠篇脚

者 有前後七言、而冠之句惟五言者

有前後七言、而冠之句亦七言者、有

前後五言、而冠之句亦五言者。

歌行要論

歌行千古之宗工

杜陵 仲賦

太白 元美

獻吉

胡東越云、退之桃源石鼓、摸杜陵、而失之淺、
長吉浩歌、秦宮、做太白、而過於深、惟獻吉宗
師子美、奪其神、間作青蓮、亦得其貌、然爲

長短相變する句數に定格なし。一句にして變する
あり、二句にして變するあり、三句より十句以上に至
りて變するあり。

君見すや、君聞かずや、俱に是れ本古樂府中の文字にして、
多く唐人の歌行中に在り、君の字は
未だ嘗て指す所あらず、泥むこと勿れ、蓋、自から一句を爲すも
のに非ず、句の上に冠する者なり、然れども亦た前句に限る。

篇首に冠する者あり、篇腹に冠する者あり、篇脚
に冠する者あり、前後七言にして、之を冠するの句
は惟り五言なる者あり、前後七言にして、之を冠
するの句も亦た七言なる者あり、前後五言にして、
之を冠するの句も亦五言なる者あり。

歌行要論

歌行千古の宗工

杜陵 仲賦

太白 元美

獻吉

胡東越云、退之の桃源石鼓は、杜陵を摸して之を淺き
に失し、長吉の浩歌、秦宮は、太白に倣ふて深きに過く、
惟、獻吉は、子美を宗師として、其の神を併せ奪ふ、間、青
蓮を作すも、亦た其の貌を得たり、然れども、初唐を爲せば

初唐則遠、仲默、李同調、氣稍不如、明月帝京、風神朗邁、遂過盧駱、元美後起、併前諸子、奄而有之、千古宗工、五君而已。義柳云、甚矣胡推元美也、豈得不爲者乎哉。

阿其所好者乎哉。

歌行可法者、漢四愁 晉白紵

魏燕歌

又云、七言古樂府外、歌行可法者、漢四愁、魏

燕歌、晉白紵、宋齊諸子、大演五言、殊寡。

長篇所起

又云、七字至梁、迺有長篇。

歌行以漸成

又云、齊梁陳隋五言古、唐律之未成者、七言古、唐歌行之未成者、王盧出而歌行成、中矩度矣。

李杜一振七言、然兩漢風逸矣。

則ち遠し、仲默は、李と同調にして、氣稍如かず、明月帝京は、風神朗邁にして、遂に盧駱に過ぐ、元美は後に起りて、前の諸子を併せ、奄して之を有つ、千古の宗工は五君のみ。義柳云ふ、甚だしいかな胡の元美を推すや、豈に其の好む所に阿る者と爲さざるを得んや。

歌行の法るべき者、漢の四愁 魏の燕歌 晉の白紵

又た云ふ、七言古樂府の外、歌行の法る可き者は、漢の四愁、魏の燕歌、晉の白紵なり、宋齊の諸子は、大に五言を演ずれども、殊に寡し。

長篇の起る所

又た云ふ、七字は梁に至りて、迺ち長篇あり。

歌行は漸を以て成る

又た云ふ、齊梁陳隋の五言古は、唐律の未だ成らざる者なり、七言古は、唐の歌行の未だ成らざる者なり、王盧出でて、歌行成く、矩度に中る。

李杜は七言を一振す、然れども、兩漢の風は逸たり

又云、陳隋漫盛婉麗相矜極于唐始、漢魏風骨殆無復存、李杜一振古今七言幾于盡廢、然東西京古質典刑、邈不可觀矣。

唐長短句出於宋明遠行路難。

又云行路難十八章、欲汰去浮靡返於渾朴、而時代所壓、不能頓超、後來長短句、實多出於此、與玄暉五言俱、兆唐人軌轍。

每句用平韻

又云、燕歌初起、魏文、實祖柏梁體、白紵詞因之、皆平韻也。

初唐短歌長歌之冠

又云、初唐短歌、子安滕王閣爲冠、長歌賓王帝京篇爲冠。

歌行初學易下手者

唐體詩則卷之下

又云、陳隋は漫盛婉麗相矜り、唐の初に極る、漢魏の風骨は殆んど復た存する無し、李杜は古今の七言の盡く廢れたるに幾きを一振す、然れども東西京の古質典刑は、邈として觀る可からず。

唐の長短句は宋の明遠の行路難より出づ

又た云ふ、行路難十八章、浮靡を汰し去りて、渾朴に返さんと欲して、時代に壓せられ、頓超する能はず、後來の長短句は實に多く、此より出づ、玄暉の五言と、俱に唐人の軌轍を兆す。

每句に平韻を用ゆ

又た云ふ、燕歌は初めて魏文に起り、實は柏梁體を祖とす、白紵詞は之に因る、皆な平韻なり。

初唐の短歌長歌の冠

又た云ふ、初唐の短歌は子安の滕王閣を冠と爲し、長歌は賓王の帝京篇を冠と爲す。

歌行は初學の手を下し易き者なり。

四九

又云、凡詩諸體皆有繩墨、惟歌行出自離騷樂府、故極散漫縱橫、初學當擇易下手者、今舉數篇、青蓮搗衣曲、百轉歌、杜陵洗兵馬、哀江頭、高適燕歌行、岑參白雪歌、別獨孤漸、李頎緩歌行、送陳章甫、聽董大彈胡笳、王維老將行、桃源行、崔顥代閨人行路難、渭城少年、皆脈絡分明、句調婉暢、既自成家、然後博取李杜大篇、合變出奇、窮高極遠、又上之漢魏樂府、落李杜之紛華、而一歸古質、又上之楚人離騷、鎔樂府之氣習、而直接商周、七言能事畢。

太白歌行近歌、少陵歌行近行、

又云、闔關縱橫、變幻超忽、疾雷震霆、凄風急雨、歌也、位置森嚴、筋脈聯絡、走月流雲、輕車

又た云ふ、凡そ詩の諸體は皆な繩墨あり、惟、歌行は離騷樂府より出づ、故に極めて散漫縱橫なり、初學は當に手を下し易き者を選ぶべし、今數篇を舉ぐ、青蓮の搗衣曲、百轉歌、杜陵の洗兵馬、哀江頭、高適の燕歌行、岑參の白雪歌、獨孤漸に別る、李頎の緩歌行、陳章甫を送る、董大が胡笳を彈するを聽く、王維の老將行、桃源行、崔顥の閨人に代る、行路難、渭城の少年、皆な脈絡分明にして句調婉暢なり、既に自ら家を成し、然る後に博く李杜の大篇を取り、變に合し、奇を出だし、高を窮め、遠を極め、又た之を漢魏の樂府に上せ、李杜の紛華を落して、一に古質に歸し、又た之を楚人の離騷に上せて、樂府の氣習を鎔し、而して直ちに商周に接せば、七言の能事畢る。

太白の歌行は歌に近く、少陵の歌行は行に近し

又た云ふ闔關縱橫にして變幻超忽、疾雷震霆、凄風急雨は歌なり、位置森嚴に、筋脈聯絡し、走月流雲、輕車熟路

熟路行也、太白多近歌、少陵多近行。

長篇中間出對句

范德機云、長篇古體、參差中出整齊語、猶是筆力。

◎律詩

按律詩者、梁陳以下聲律對偶之詩也、蓋自擲風觀、閱既多、受侮不少句、其屬對已工、梁陳諸家漸多儷句、雖名古詩、實墮律體、唐初四子、研練精切、穩順聲勢、號爲律詩、然尙靡緝相矜、時或拗澀、未脫陳隋之氣習、神龍以還、卓然成調、雖不及古詩之高遠、對偶音律、亦文章之不可缺者也。

律詩大意

諸體詩則卷之下

は、行なり、太白は多く歌に近く、少陵は多く行に近し。

長篇中に間、對句を出だす

范德機云ふ、長篇古體は、參差の中に整齊の語を出だせば、猶ほ是れ筆力あり。

◎律詩

按ずるに、律詩は梁陳以下聲律對偶の詩なり、蓋擲風の閱を觀ること既に多く、侮を受くること少からずの句より、其の屬對已に工なり、梁陳の諸家、漸く儷句多し、古詩と名づくとも雖も、實は律體に墮つ、唐初の四子は、研練精切にして、聲勢を穩順にし、號して律詩と爲す、然れども尙ほ靡緝相矜り、時に或は拗澀あり、未だ陳隋の氣習を脱せず、神龍以還は、卓然として調を成す、古詩の高遠に及ばずとも、對偶音律も亦た文章の缺く可からざる者なり。

律詩大意

五一

用景情有通例。胡東越云、作詩不過情景二端、如五言律體、前起後結、中四句、二言景、二言情、此通例也。

三四句、一串非正體。又云、唐晚則第三四句、多作一串、雖流動、往往失之輕儇、非正體。

中四句、咸言景、初學難學。又云、沉宋王李諸子、格調莊嚴、氣象閎麗、最爲可法、第四句、大率言景、不善學者、湊砌堆疊、多無足觀、老杜諸篇、雖中聯言景不少、大率以情間之、故習杜者、句語或有枯燥之嫌、而體裁無靡冗之病。

情景之說、不可泥。又云、若老手大筆、則情景混融、錯綜惟意、又不可專泥。

景情を用ゐるに通例あり。胡東越云、詩を作るは情景の二端に過ぎず、五言律體の如き、前起後結、中の四句、二は景を言ひ、二は情を言ふ、此れ通例なり。

三四句一串は正體に非ず。又云、唐晚は則ち第三四句多く一串を作す、流動と雖も往々之を輕儇に失す、正體に非ず。

中の四句、咸な景を言ふは、初學は學び難し。又云、沉宋王李の諸子、格調莊嚴にして、氣象閎麗なり、最も法る可しと爲す、第だ中の四句は、大率ね景を言ふ、善く學ばざる者は、湊砌堆疊にして多く觀るに足る無し、老杜の諸篇は中聯に景を言ふもの少なからずと雖も、大率ね情を以て之に間ゆ、故に杜を習ふ者は、句語或は枯燥の嫌あり、而して體裁は靡冗の病なし。

情景の説は泥む可からず。又云、老手大筆の若きは則ち情景混融し、錯綜惟意のまゝにす、又た專ばら泥む可からず。

有兩聯疊景口訣 又云、李夢陽曰、疊景者

意必二、濶大者半必細、此最律詩三昧、如、
杜詔從三殿下、碑到百蠻開、野館濃花發、
春帆細雨來、前半濶大、後半工細也、浮雲
連海岱、平野入青徐、孤嶂秦碑在、荒城魯
殿餘、前景寓目、後景感懷也、唐律甚嚴、惟
杜、變化莫測、亦惟杜。

律詩不拘、定起承轉合、范德機云、作經義
文論之法、惟大講爲實、故昔人作論、謂之
論腹、作詩亦然、何獨第二聯爲承、第三聯
爲轉耶、泥此則非律詩之法度矣。

初唐五七言律、惟有杜審言、胡東越云、唐
初無七言律、五言亦未超然、二體之妙、杜
審言實爲首唱。

唐律詩則卷之下

兩聯景を疊むの口訣あり 又た云ふ、李夢陽曰く景を疊

む者は、意は必ず二つ、濶大なる者は半ば必ず細と、此
れ最も律詩の三昧なり、杜の詔は三殿より下り、碑は
百蠻に到りて開く、野館濃花發き、春帆細雨來るの如
き、前半は濶大にして、後半は工細なり、浮雲は海岱に
連り、平野は青徐に入る、孤嶂、秦碑在り、荒城魯殿餘
るは、前景は寓目にして、後景は感懷なり、唐律の甚だ
嚴なるは、惟、杜なり、變化測る莫きも、亦た惟、杜なり。
律詩は起承轉合に拘定せず、范德機云ふ、經義文論を
作るの法は、惟、大に講ずるを實と爲す、故に昔人論を
作りて之を論腹と謂ふ、詩を作るも亦た然り、何ぞ獨
第二聯を承と爲し、第三聯を轉と爲さんや、此に泥む
ときは、則ち律詩の法度に非ず。

初唐の五七言律は、惟、杜審言あり、胡東越云ふ、唐初
に七言律なし、五言も亦た未だ超然たらず、二體の妙
は、杜審言實に首唱たり。

◎五言律詩

按王元美云、五言至沈宋始可稱律、律爲音律法律、天下無嚴於是者、知虛實平仄不得任情而度明矣、二君正是敵手、蓋唐律之起、五言爲前、七言爲後、五律實古體所分、詞章改革之機也。

于鱗五言律格

按近體以聲律爲主、然考之唐人集中、雖盛唐名家間有失律拗體、況李杜大家乎、且其稱嚴密者、不過平仄二聲也、後世若王安石、論聲律嚴於唐、不止平仄二聲、當分平上去入、且有清濁、而自謂我能續李杜、伍高岑、若夫聲律則勝之矣、今讀其詩、以文字爲詩、以才學爲

◎五言律詩

按するに、王元美云ふ、五言は沈宋に至りて始めて律と稱すべし、律は音律法律たり、天下には是より嚴なる者なし、虚實平仄、情に任せて度するを得ざるを知ることを明けし、二君は正に是れ敵手と、蓋、唐律の起るは、五言を前と爲し、七言を後と爲す、五律は實に古體の分るゝ所にして、詞章改革の機なり。

于鱗の五言律格

按するに、近體は聲律を以て主と爲す、然れども之を唐人の集中に考ふるに、盛唐の名家と雖も、間、失格拗體あり、況んや李杜の大家をや、且つ其の嚴密と稱する者も、平仄の二聲に過ぎず、後世、王安石の若き、聲律を論ずること、唐よりも嚴なり、止、平仄の二聲のみならず、平上去入を當分し、且、清濁あり、而して自ら謂へらく、我れ能く李杜に續き、高岑に伍す、若し夫れ聲律は則ち之れに勝れりと、今其の詩を讀むに、文字を以て詩と爲し、才學を以て詩と爲し、

詩、以議論爲詩、殊不知、唐人之詩、聲律外別、又有一唱三嘆之音也、徒以四聲清濁得布置爲詩、天下文字之多、豈無同聲同清濁可填其位者乎、雖有亦唐人、不爲之、是以失律拗體多矣、獨明李于鱗先生、以絕世才、生於千載之下、具正法眼、以監古今學唐之得失、從最上乘、能悟第一義、遂以詩自任、欲使百世學唐詩者、取法於此、故聲律格體一守其正、而不倣其變、蓋亦其論聲律也、平仄二聲之間、而不過以唐名家所難爲己定格、然所稱于鱗者、未必在乎此、亦惟以一唱三歎之音、唐後獨有斯人也、故胡元瑞不左袒于鱗、亦稱于鱗爲名

諸體詩則卷之下

議論を以て詩と爲す、殊に知らず、唐人の詩は、聲律の外別に又た一唱三嘆の音あるを、徒に四聲清濁布置を得るを以て詩と爲さば、天下文字の多き、豈に同聲同清濁の其の位を填む可き者無らんや、有りとも雖も亦た唐人は之を爲さず、是を以て失律拗體多し、獨り明の李于鱗先生は、絶世の才を以て、千載の下に生れ、正法眼を具へ、以て古今の唐を學ぶの得失を監み、最上乘に従つて能く第一義を悟り、遂に詩を以て自ら任じ、百世唐詩を學ぶ者をして、法を此に取らしめんと欲す、故に聲律格體一に其の正を守りて、其の變に倣はず、蓋亦た其の聲律を論するなり、平仄二聲の間にして、唐の名家の難しとする所を以て、己が定格と爲すに過ぎず、然れども于鱗を稱する所の者は、未だ必らずしも此に在らず、亦た惟一唱三歎の音の唐の後に、獨斯の人あるを以てなり、故に胡元瑞の于鱗に左袒せざ

家有餘、知言哉、是以徠家諸公、欲逞才一時、垂法不朽者、一以于鱗爲模範、又以此勝矣、今作詩則、凡於唐體全取、法於于鱗其所爲、其所不爲、論出之各部、以示焉、學者從事於斯、則體裁明密、聲律諧順、且得一唱三歎之音矣。

平韻 平韻爲本色、故于鱗五律一百九十九首中、無一詩仄韻者、雖唐人亦太少。

不以韻起 五言不宜韻起、于鱗五律比七律尤寬、然韻起僅十一首、雖唐人亦太多。

二四反聲 此古今所同守、苟不守之、爲失粘、于鱗五律中、無一詩不守之者。

忌三五同聲 此唐人所不必忌、而于鱗忌之、蓋斯病得句所必有、而不忌、避

者也、然于鱗五律中、忌下三連、忌也、不三五

犯之者、僅十七句已、犯之者、僅九句、皆出、其不可已者也、說具、載七絕、又唐人犯

下三連者、忌一平、此亦古今所忌也、不三五

蓋不少、同聲、則自無斯病、于鱗五

律中、不己而犯之者、非所謂、凡

るも、亦た于鱗は名家と爲して餘りありと稱す、知言なるかな、是を以て徠家の諸公才を一時に逼ふし、法を不朽に垂れんと欲する者は、一に于鱗を以て模範と爲す、又た此を以て勝れたり、今、詩則を作るに、凡そ唐體に於ける、全く法を于鱗に取る、其の爲す所、其の爲さざる所、之を各部に論出し、以て示す、學者斯に従事せば、則ち體裁明密に、聲律諧順し、且つ一唱三歎の音を得ん。

平韻 平韻を本色と爲す、故に于鱗の五律、一百九十九首の韻を以て起さず。五言は韻起に宜しからず、于鱗の五律は、起は僅かに十一首なり、唐二四反聲、なれ、苟しくも之を守らずんば、失粘と爲す、于鱗の五律、古今の同く守る所人と雖も、亦た多からず。

三五同聲 此唐人所不必忌、而于鱗忌之、蓋斯病得句所必有、而不忌、避

下三連 此亦古今所忌也、不三五

犯之者 僅九句、皆出、其不可已者也、說具、載七絕、又唐人犯

一平 此亦古今所忌也、不三五

蓋不少 同聲、則自無斯病、于鱗五

律中 不己而犯之者、非所謂、凡

㊦ 仄平平 ㊧ 平平仄仄韻

㊨ 平平仄仄 ㊩ 仄仄平韻

右在「中」者、不必拘免、用平亦可、用仄亦可者耳、以下皆倣此。

平格、起句第二字、平入謂之平格、又謂之偏格也。

㊪ 平平仄仄 ㊫ 仄仄平韻

㊬ 仄平平仄 平平仄仄韻

㊭ 平平仄仄 仄仄平韻

㊮ 仄平平仄 平平仄仄韻

五言律要論

學唐人五律、有次序

胡東越云、學五律、母習王楊以前、母窺元白以後、先取沉宋陳杜蘇李諸集、朝夕臨摹、則風骨高華、句語宏贍、音節雄亮、比偶精嚴、次及盛唐王岑孟李、永之以風神、暢之以才力、

㊯ 仄平平 ㊰ 平平仄仄韻

㊱ 平平仄仄 ㊲ 仄仄平韻

右「中」に在る者は必らずしも拘はらず、平を用ふるも亦た可なり、仄を用ふるも亦た可なり、以下皆倣此に倣へ。

平格起句の第二字平入、之を平格と謂ひ又た之を偏格と謂ふなり。

㊳ 平平仄仄 ㊴ 仄仄平韻

㊵ 仄平平仄 平平仄仄韻

㊶ 平平仄仄 仄仄平韻

㊷ 仄平平仄 平平仄仄韻

五言律要論

唐人の五律を學ぶに次序あり。

胡東越云、五律を學ぶに王楊以前を習ふ母れ、元白以後を窺ふ母れ、先づ沉宋陳杜蘇李の諸集を取りて、朝夕臨摹せば、則ち風骨高華に、句法宏贍に、音節雄亮に、比偶精嚴なり、次に盛唐王岑孟李に及び、之を永するに風神を以てし、之を暢するに才力を以てし、之を和するに

和之以眞澹、錯之以清新、然後歸宿杜陵、究竟絕軌、極深研幾、窮神知化、五言律詩盡矣。

太白天仙、工部千古一人、

又云、太白風華逸宕、特過諸人、而後之學者、才匪天仙、多流率易、唯工部諸作、氣象鬼峨、規模宏遠、當其神來境詣、錯綜幻化、不可端倪、千古以還一人而已。

明仲默明卿、五律津筏、

又云、國朝仲默明卿亦是五言津筏、初學下手、所當并置坐右、

初唐句律、全類六朝者、

又云、唐人句律有全類六朝者、太宗、露凝千片玉、菊散一叢金、虞世南、竹開霜後翠、梅動雪前香、王勃、野花常捧露、山葉自吟風、韋承

眞澹を以てし、之を錯するに清新を以てし、然る後に杜陵に歸宿し、究竟を究め軌を絶ち、深を極め幾を研ぎ、神を窮め化を知らば、五言律詩は盡きん。

太白は天仙にして、工部は千古の一人なり、

又た云ふ、太白は風華逸宕、特に諸人に過ぐ、而して後の學ぶ者ねず、天仙に匪れば多く率易に流る、唯、工部の諸作は氣象鬼峨にして、規模宏遠なり、其の神來り境詣るに當れば、錯綜幻化、端倪すべからず、千古以還一人のみ。

明の仲默明卿は五律の津筏なり

又た云ふ、國朝の仲默明卿も亦た是れ五律の津筏なり、初學、手を下すに、常に坐右に并置すべき所なり。

初唐の句律は全く六朝に類する者なり、

又た云ふ、唐人の句律、全く六朝に類する者あり、太宗の「露は凝る千片の玉、菊は散す一叢の金、虞世南の竹は開く霜後の翠、梅は動かす雪前の香、王勃の野花常に露を捧げ、山葉自ら風に吟す、韋承慶の「山遠くして樹なきか

塵、山、遠、疑、無、樹、潮、平、似、不、流、蘇、味、道、月、華、連、
 畫、色、燈、影、雜、星、光、樊、忱、十、地、祥、雲、合、三、天、瑞、
 景、開、楊、庶、寶、鐸、含、鸞、響、仙、輪、帶、日、紅、陳、子、昂、
 鶴、舞、千、年、樹、虹、飛、百、尺、橋、杜、審、言、啼、鳥、驚、殘、
 夢、飛、花、攪、獨、愁、沉、佳、期、月、明、三、峽、曙、潮、滿、九、
 江、天、宋、之、問、野、舍、時、雨、澗、山、雜、夏、雲、多、張、九、
 齡、日、御、馳、中、道、風、師、卷、太、清、宗、楚、客、湛、露、飛、
 堯、酒、薰、風、入、舜、絃、孫、邀、漁、父、歌、金、洞、江、妃、舞、
 翠、房、若、置、梁、陳、間、何、可、辨、別、。

◎ 七言律詩

按李滄溟云、七言律詩、又五言八句之變、
 也、在唐以前、沉君攸七言儷句、已近其詞、
 至唐人始專此體、蓋又沉佳期宋之間、其
 濫觴也、其時遠襲六朝、近沿四傑、故體裁

と疑ひ、潮平にして流れざるに似たり、蘇味道の「月華は
 畫色に連なり、燈影は星光に雜り、樊忱の「十地祥雲合し、
 三天瑞景開く、楊庶の「寶鐸は鸞響を含み、仙輪は日紅を
 帶ぶ、陳子昂の「鶴は舞ふ千年の樹、虹は飛ぶ百尺の橋、杜
 審言の「啼鳥は殘夢を驚かし、飛花は獨愁を攪す、沉佳期
 の「月は明かなり三峽の曙、潮は滿つ九江の天、宋之問の「
 野は時雨を含んで澗く、山は夏雲を雜へて多し、張九齡
 の「日御中道を馳せ、風師太清を卷く、宗楚客が「澗路は
 堯酒を飛ばし、薰風は舜絃に入る、孫邀の「漁父は金洞に
 歌ひ、江妃は翠房に舞ふ、」は若し梁陳の間に置かば何ぞ
 辨別す可けん。

◎ 七言律詩

按ずるに、李滄溟云ふ、七言律詩は、又た五言八句の變
 なり、唐以前に在りては、沉君攸の七言儷句、已に其の
 詞に近し、唐人に至りて始めて此の體を専らにす、蓋
 又た沉佳期宋之間は、其の濫觴なり、其の時遠く六朝
 に襲ぎ、近く四傑に沿ふ、故に體裁は明密に聲調は高

明密、聲調高華、而神情與會、纏而未暢、至於開元、此體始盛矣、比之五律、五律宮商甫協、節奏未舒、至七律、暢達悠揚、紆徐委折、近體之妙始窮、可以爲萬世之法程。

于鱗七言律格、說已見五言律、○于鱗

平韻、平韻爲本色、故于鱗七律三百四十八

以韻起、以韻起者、如唐人、亦不韻起者、太少

二四反聲、于鱗七律中、無一詩不守之者、失粘

唐人五七律、往失粘有之、二六同聲、上

忌五七同聲、此唐人所不必忌、而于鱗忌之

避者也、然于鱗七律中、犯之者僅二十四句、至

第三五七句、所絕無、最深忌之、唐人亦率然也

忌下三連、此亦古今所忌也、不五七同聲

者僅二句、俱在寬法詩中、他詩所無、如唐人往往犯之

諸體詩則卷之下

華にして、神情與に會し、纏にして未だ暢びず、開元に至りて、此の體始めて盛なり、之を五律に比するに、五律は宮商甫めて協ひ、節奏未だ舒びず、七律に至りては、暢達悠揚、紆徐委折し、近體の妙始めて窮る、以て萬世の法程と爲すべし。

于鱗の七言律格、說已見五言律に見ゆ、○于鱗の

平韻、平韻を本色と爲す、故に于鱗の七律三百四十八首中に、

韻を以て起る、七言は韻起に立し、于鱗の七律中に、二詩の

韻を以て起さざる者なし、唐人の如きも、亦た韻起ならざる

もの太だ少し、二四反聲、此れ古今の同じく守る所に

失粘と爲す、于鱗の七律中に、一詩の之を守らざる者なし、唐人五七律の如き往々失粘之れあり、二六同聲、同

五七の同聲を忌む、此れ唐人の必ずしも忌まざる所にして、

ば必ず有る所にして、避け易からざる者なり、然れど于鱗の七

律中に之を犯すもの僅に二十四句なり、第三五七句のみに至り

ては絶えて無き所にして、最も深忌む、唐人も亦た率れ然り、下三連を忌む、此れも

六一

亦た古

格耳、唐人亦不太多。

忌仄間平、非所謂挾聲之謂也、並已見五律、

第十五句、蓋第三五七句所多、而第六八句所絕無也。

忌挾聲、唐人不太忌之、于鱗七律深忌之、其

一句則在寬法詩中、蓋于鱗挾聲平仄布置之法、具載七絕部中。

不必忌一三同聲、說詳見。

中間兩聯必對、于鱗七律中、無

有對起、于鱗七律、有對結、于鱗七律、

有徹首尾對、于鱗七律中、僅一詩、○

無隔句扇對、○無蜂腰格、無偷春格、以

三格、雖唐人、所希有、又無雜格、說已見五律、有拗體、于鱗七律中、

仄格、起句第二字仄入謂之

仄格、起句又謂之正格也。

①仄平平仄仄韻 ②平平仄仄平韻 ③仄平仄仄韻 ④仄平仄仄韻 ⑤仄平仄仄韻 ⑥仄平仄仄韻

だ多からず。

仄間の平を忌む、前はゆる挾聲の謂にあらざるなり、説は已に五律に見ゆ、于鱗の七律中に、已む

を得ずして之を犯す者八十五句、蓋第三五七句の多き所にして、第六八句の絶えて無き所なり。

挾聲を忌む、唐人は太だしくは之を忌まず、于鱗の七律は深く之を忌む、其の三百四十八首中に、挾聲僅に三句にして、其の一句は則ち寬法の詩中に在り、蓋、

于鱗の挾聲、平仄布置の法、具に七絶の部中に載す、必ずしも一三の同聲を忌まず、説は審に五律に見ゆ。

中間の兩聯は必ず對す、于鱗の七律中に一詩の對せざる者なし。

對起あり、于鱗の七律中に、對結あり、于鱗の七律中に、僅に五詩のみ。

首尾を徹する對あり、于鱗の七律中に僅に一詩のみ、○對起以下は唐人の多き所なり。

隔句扇對なし、蜂腰格なし、偷春格なし、以上三格、雖も、希れに有る所、又た雜格、拗體あり、于鱗の七律中に、説は已に五律に見ゆ、

仄格、起句は第二字仄入、之を仄格といふ、又た之を正格と謂ふ。

①仄平平仄仄韻 ②平平仄仄平韻 ③仄平仄仄韻 ④仄平仄仄韻 ⑤仄平仄仄韻 ⑥仄平仄仄韻

⑦仄平仄仄韻 ⑧仄平仄仄韻 ⑨仄平仄仄韻 ⑩仄平仄仄韻

⑪仄平仄仄韻 ⑫仄平仄仄韻 ⑬仄平仄仄韻 ⑭仄平仄仄韻

㊦仄㊦平平仄仄
 ㊦平平仄仄仄
 ㊦仄平仄仄
 ㊦仄平仄仄仄韻

右句上其分兩格者爲使不謂一三不拘有仄同平也以下做此。

平格起句第二字平入謂之平格又謂之偏格也。

㊦平平仄仄仄韻
 ㊦仄平仄仄仄韻
 ㊦仄平仄仄仄韻
 ㊦仄平仄仄仄韻
 ㊦平平仄仄仄韻
 ㊦仄平仄仄仄韻
 ㊦平平仄仄仄韻
 ㊦仄平仄仄仄韻
 ㊦平平仄仄仄韻
 ㊦仄平仄仄仄韻
 ㊦平平仄仄仄韻
 ㊦仄平仄仄仄韻
 ㊦平平仄仄仄韻
 ㊦仄平仄仄仄韻

七言律要論

七律古今名家

胡東越云、七言律、唐以老杜爲主、參之李頎之神、王維之秀、岑參之麗、明則仲默之和暢、于鱗之高華、明卿之沉雄、元美之博大、兼收時出盡此矣。

隨體詩則卷之下

㊦仄㊦平平仄仄
 ㊦仄㊦平平仄仄韻
 ㊦平平仄仄仄
 ㊦仄平仄仄仄韻

有句の上に其の兩格を分つ者は、一三拘はらずと謂て、仄間平ならざらしめんか爲がり、以下之に做ふ。

平格起句の第二字の平入、之を平格といひ又た之を偏格と謂ふ。

㊦平平仄仄仄韻
 ㊦仄平仄仄仄韻
 ㊦仄平仄仄仄韻
 ㊦仄平仄仄仄韻
 ㊦平平仄仄仄韻
 ㊦仄平仄仄仄韻
 ㊦平平仄仄仄韻
 ㊦仄平仄仄仄韻
 ㊦平平仄仄仄韻
 ㊦仄平仄仄仄韻
 ㊦平平仄仄仄韻
 ㊦仄平仄仄仄韻
 ㊦平平仄仄仄韻
 ㊦仄平仄仄仄韻

七言律要論

七律古今の名家

胡東越云ふ、七言律、唐は老杜を主と爲し、之を李頎の神、王維の秀、岑參の麗に參す、明は則ち仲默の和暢、于鱗の高華、明卿の沉雄、元美の博大、兼ね收めて時に出さば此に盡きん。

近體莫難於七律

又云、古詩之難、莫難于五言古、近體之難、莫難于七言律。

七律難於五律

又云、七言古、差易、五言古、七言律、顯難於五言律。

形容七律之至美至難

又云、七言律、如果位菩薩三十二相、百寶瓔珞、莊嚴妙麗、種種天然、而廣大神通、在在具足、乃爲最上一乘。

仄韻起之對起、不足學、

又云、對起則杜之風急、天高、猿嘯哀、渚清、沙白、鳥飛、翅實爲妙絕、而岑參、鷄鳴、紫陌、柳蠶、鶯嬌、二起、工麗、婉約、亦可諷詠、右丞多仄韻

近體は七律より難きはなし

又た云ふ、古詩の難きは、五言古より難きは莫く、近體の難きは七言律より難きは莫し。

七律は五律より難し

又た云ふ、七言古は、差易、五言古より易く、七言律は顯て五言律よりも難し。

七律の至美至難を形容す

又た云ふ、七言律は果位菩薩の三十二相、百寶瓔珞、莊嚴妙麗、種種天然にして、而して廣大神通、在々具足するが如き、乃ち最上一乘と爲す。

仄韻起の對起は學ぶに足らず。

又た云ふ、對起は則ち杜の「風急にして猿嘯哀しく、渚清く沙白くして鳥飛び廻る」は實に妙絶と爲す、而して岑參の「鷄鳴紫陌に鳴き、柳蠶鶯嬌の二起、工麗婉約にして、亦た諷詠すべし、右丞仄韻對起多し、風韻なし、

對起無風韻不足多效蓋仄起宜五言不宜

七言也仄起也

七律似歌行短章者

又云崔顥黃鶴樓歌行短章耳起句接句七律

字重復相似者沈佺期龍池龍殿已飛龍德先天天不遠崔顥昔人已乘黃鶴去此地空餘黃鶴樓李白鳳皇臺上鳳皇遊鳳去臺空江自流之類是也非近體篇首之正體也然亦皆絕妙矣

杜近體變多正少

又云杜公才力既雄涉獵復廣用能窮極筆端範圍今古但變多正少不善學者類失粗豪

唐開元之後又有明嘉靖

又云七言律開元之後便到嘉靖雖圭角巖巖銛穎峭厲視唐人性情風致尙自不侔而

諸體詩則卷之下

多とし效ふに足らず蓋韻起は五言に宜しく七言に宜

しからず仄起とは仄韻起なり

七律の歌行短章に似たる者

又た云ふ崔顥の黃鶴樓は歌行短章のみ起句接句七律の起句接句文字重復相似たる者は沈佺期の龍池龍殿りて龍已に飛び龍德天に先ちて天遠はず崔顥の昔人已に黃鶴に乗じて去る此の地空しく餘す黃鶴樓李白の鳳皇臺上に鳳皇遊び鳳去り臺空しくして江自ら流るの類是なり近體篇首の正體にあらずるなり然れども亦た皆な絶妙なり

杜の近體は變多く正少し

又云ふ杜公才力既に雄に涉獵復た廣し用ひて能く筆端を窮極し今古を範圍す但變多くして正少し善く學ばざる者は類ね粗豪に失す

唐の開元の後に又た明の嘉靖あり

又た云ふ七言律は開元の後ち便ち嘉靖に到る圭角巖巖銛穎峭厲にして唐人に視ぶれば性情風致尙ほ自ら

六五

傾大高華、精深奇逸、人驅上驪、家握連城、名篇傑作、布滿區區、古今七言律之盛、極於此矣。

◎排律

按五七言排律、五七言古詩之變也、故李滄溟云、排律之作、其源自顏謝諸人、古詩之變、首尾排句、聯對精密、與古詩差別、蓋唐時止多五言排律、而鮮七言排律、雖太白子美亦不多見、故于鱗亦太鮮矣、至應制、唐人專用五言排律、而不及七言也。

于鱗五言排律格

句數放六韻于鱗放六韻至二十韻、唐人放五韻至百韻、宋王黃州有百五
十韻者、○余博考華人詩式、未見以二十句以上爲長律、說惟和入詩式往往載之、未如其所
本也、蓋華人長律以大樂稱之耳、不
必定幾句以上爲長律、分界而可矣。

伴しからずと雖も、而も傾大高華、精深奇逸、人上驪を驅せ、家握連城を握る、名篇傑作、區區に布滿す、古今七言律の盛なる、此に極る。

◎排律

按するに、五七言の排律は、五七言古詩の變なり、故に李滄溟云、排律の作は、其の源は顏謝諸人よりす、古詩の變なり、首尾排句、聯對精密にして、古詩と差別ると、蓋、唐の時は止、五言の排律多くして、七言の排律少し、太白子美と雖も、亦た多く見ず、故に于鱗も亦た太だ鮮し、應制に至りては、唐人は專はら五言排律を用ひて、七言に及ばざるなり。

于鱗の五言排律格

句數は六韻より放つ于鱗は六韻より放ちて二十韻に至る、唐人は五韻より放ちて百韻に至る、宋の王黃州は百五十韻に至る者あり、○余、博く華人の詩式を考ふるに、未だ二十韻以上を以て長律と爲す院を見ず、惟、和人の詩式に、往々之を載す、未だ其の本づく所を知らず、蓋、華人の長律は大樂を以て之を稱するのみ、必ずしも幾句以上を長律と爲すの分
界を定めずして可なり。

平韻 無仄韻 不換韻唐人亦同、

不以仄起于鱗五言排律凡四十首、以韻起者僅一詩、

二四反聲于鱗無一句不守之者、

忌三五同聲于鱗犯之者僅六句、

忌下三連于鱗犯之者僅三句、 忌一平于鱗犯之者僅二句、

忌仄間平于鱗無一句犯之者、

不必忌挾聲于鱗用挾聲者七句、而不忌上仄間平、

對起于鱗用對起者、凡二十九詩、 對結于鱗用對結者僅二詩、

徹首尾對于鱗用此體者三詩、

首尾不對于鱗用此體者十五詩、

以四句爲一殺于鱗排律皆可四句一殺、唐人亦率然也、故起句第二四文字與結句第

二四文字同聲、

有從篇間變平仄者起用此格者、雖四句一殺、起句與結句、第二四文字不能同聲也、于鱗排律中僅一詩已盡、中

間變平仄者、即拗體、唐人亦此格甚少、

諸體詩則卷之下

平韻 仄韻なし 韻を換へず平韻以下唐人亦同、

韻を以て起さず于鱗の五言排律、凡そ四十九首、韻を以て起す者は、僅に一詩のみ、

二四反聲于鱗一句も之を守らざる者なし、

三五同聲を忌む于鱗の之を犯す者は僅に六句のみ、

下三連を忌む于鱗の之を犯す者は僅に三句のみ、 一平を忌む于鱗の之を犯す者は僅に二句のみ、

仄間の平を忌む于鱗一句も之を犯す者なし、

必ずしも挾聲を忌まず于鱗の挾聲を用ゆる者七句にして、上に仄間平あるを忌まず、

對起于鱗の對起を用ゆる者、凡そ二十九詩なり、 對結于鱗の對結を用ゆる者は僅に二詩なり、

首尾に徹する對于鱗の此の體を用ゆる者は三詩なり、

首尾對せず于鱗の此の體を用ゆる者十五詩なり、

四句を以て一殺と爲す于鱗の排律は皆な四句ごとに一殺起句の第二四の文字は、結句の第二四の文字と同聲なり、

篇間に從ひ平仄を變ずる者あり、

此の格を用ゆる者は、四句一殺すと雖も、起句と結句と、第二四の文字は同聲なること能はず、于鱗の排律中に僅に一詩のみ、蓋、中間に平仄を變ずる者は即ち拗體

忌出同字唐人往往犯之、至子麟排律、無復此病。

右仄格平格之韻、今省之、當以五律準知也。

于麟七言排律格

句數放六韻于麟放六韻至十二韻、唐人放五韻而至百韻者、惟施肩吾一人已、○長律說、見五言排律。

平韻 無仄韻 不換韻平韻以下、唐人亦同。

以韻起于麟七言排律、僅五言俱韻起。

二四反聲于麟無之者。 二六同聲同上。

忌五七同聲于麟犯之者、僅一句。 忌下三連同上。

忌一平于麟無之者。 忌仄間平于麟犯之者、僅二句。

忌挾聲于麟無一句。 對起于麟七言排律、僅五言而用對起者。 對結于麟偶無。 微首尾對同上。

以四句爲一殺說已見。

從篇間變平韻者于麟無此格、說已見五言。

なり、唐人と雖も亦た此の格は益だ少し、唐人は往々にして之を犯す、于麟の同字を出だすを忌む、排律に至りては復た此病なし。

右仄格平格の韻は今之を省く當に、五律を以て準知すべし。

于麟の七言排律格

句數は六韻より放つ、于麟は六韻より放ちて、十二韻に至る者は、惟た施肩吾一人のみ、○長律の説は五言排律に見ゆ。

平韻 仄韻なし 韻を換へず平韻以下は唐人も亦た同じ。

韻を以て起す于麟の七言排律、僅に五言俱に韻起なり。

二四反聲于麟は一句も之を犯す者なし。 二六同聲同上。

五七の同聲を忌む于麟の之を犯す者、僅に一句のみ。 下三連を忌む同上。

一平を忌む于麟は一句も之を犯す者なし。 仄間の平を忌む于麟の之を犯す者なし。

僅に二 挾聲を忌む于麟は一句も挾聲を用ゆる者なし。 對起于麟の七言排律は僅に五言にして對起を用ゆる者は二詩のみ。 對結于麟は偶、結の者なし。 首尾を微す同上。

以四句を以て一殺と爲す說は已に五言に見ゆ。

從篇間變平韻者于麟に此の格なし、○說は已に五言に見ゆ。

忌出同字說已見

右仄格平格之調、今亦省之、當以七律準知也。

排律要論

宋之問排律當熟習

胡東越云、沉排律工者不過三數篇、宋則遍集中、無不工者、且篇篇平正典重、瞻麗精嚴、初學入門所當熟習、右丞韻度過之、而典重不如、少陵閱大有加、而精嚴略遜。

排律一代大手筆

又云、排律自工部考功外、雲卿酬蘇員外、塞北必簡答蘇味道、伯玉白帝懷古、玄宗曉發蒲關、太白寄孟浩然、登揚州西靈塔、贈宋中丞、嘉州送郭僕射、摩詰玉霄公主山莊送晁監、感化寺、悟真寺皆一代大手筆、正法眼、學

隨體詩則卷之下

同字を出だすを忌む說は巴に五言に見ゆ

右仄格の調は、今亦た之を省く、當に七律を以て準知すべし。

排律要論

宋之問の排律は當に熟習すべし。

胡東越云、沉の排律、工なる者は、三數篇に過ぎず、宋は則ち集中に遍ねし、工ならざる者なし、且つ篇々平正典重、瞻麗精嚴にして、初學入門の當に熟習すべき所なり、右丞は韻度は之に過ぎ而して、典重は如かず、少陵は閱大加はる有り而して、精嚴は略遜る。

排律一代の大手筆

又た云ふ、排律は工部考功より外、雲卿の蘇員外に酬ゆる、塞北、必簡の蘇味道に答ふる、伯玉の白帝の懷古、玄宗の曉に蒲關を發する、太白の孟浩然に寄する、揚州の西靈塔に登る、宋中丞に贈る、嘉州の郭僕射を送る、摩詰の玉霄公主の山莊にて晁監を送る、感化寺、悟真寺は皆

六九

者、朝夕把玩可也。

學排律次序

又云、作排律先熟讀宋駱沉杜諸篇、倣其布格措詞、則體裁平整、句調精嚴、益以摩詰之風神、太白之氣槩、既奄有諸家、美善咸備、然後究極杜陵、擴之以閎大、濟之以沉深、鼓之以變化、排律之能事盡矣。

◎絕句

按、絕句截近體首尾、或中二聯之說、不足憑矣、胡元瑞辯既盡之、李滄溟云、五言絕始自漢魏樂府、如白頭吟、出塞曲、桃葉歌、觀聞歌、長干曲、團扇郎等篇、皆其體也、六朝述作漸繁、入唐尤盛、又云、古樂府挾琴歌、梁元帝烏棲曲、江總怨

な一代の大手筆、正法眼なり、學者朝夕把玩して可なり。

排律を學ぶ次序

又た云ふ、排律を作るには、先づ宋駱沉杜の諸篇を熟讀し、其の布格に倣ふて詞を措くときは、則ち體裁平整にして句法精緻なり、益すに摩詰の風神、太白の氣槩を以てし、既に諸家を奄有し、美善咸備る、然る後に杜陵を究極し、之を擴むるに閎大を以てし、之を濬くするに沉深を以てし、之を鼓するに變化を以てせば、排律の能事盡く。

◎絕句

按するに、絶句は近體の首尾、或は中の二聯を截つ、の説は憑るに足らず、胡元瑞の辯、既に之を盡せり、李滄溟云ふ、五言絶は漢魏の樂府より始る、白頭吟、出塞曲、桃葉歌、觀聞歌、長干曲、團扇郎等の篇の如き、皆な其の體なり、六朝の述作漸く繁く、唐に入りて尤も盛なり、又た云ふ、古樂府の挾琴歌、梁の元帝の烏棲曲、江總の怨詩行等は、皆

詩行等、皆七言四句、唐人始穩順聲勢、定爲絕句、可以見矣、其謂之絕者、亦起唐人截諸詩篇章長者爲絕歌、遂博稱四句詩曰絕耳、未必以截近體名之也、若夫對起對結多在唐絕者、唐此體之盛、何格不備有、雖六朝已有對結、卽江總怨詩是也、豈截近體者乎哉。

絕句大意

唐絕卽六朝短古 胡東越云、六朝短古樂目歌行、至唐曰絕句。

唐絕以漸大備矣 又云、唐初五言絕、子安諸作已入妙境、七言初變梁陳音律未諧韻度尙乏、杜審言度湘江、贈蘇綰二首、結皆作對、而工緻天然、風味可掬、至張說巴

な七言四句なり、唐人始めて聲勢を穩順にし、定めて絶句と爲すと以て見るべし、其の之を絶と謂ふ者も、亦た唐人の諸詩の篇章の長き者を截りて絶歌と爲すに起り、遂に博く四句の詩を稱して絶と曰ふのみ、未だ必ずしも近體を截つを以て之を名けざるなり、若し夫れ對起對結の多く唐絶に在る者は、唐は此の體の盛なる、何の格か備有せざらん、六朝と雖も已に對結あり、卽ち江總の怨詩は是なり、豈に近體を截つ者ならんや。

絶句大意

唐絶は卽ち六朝の短古なり 胡東越云ふ、六朝の短古は堅ね歌行と目く、唐に至りて絶句と曰ふ。

唐絶は漸を以て大に備はる、又た云ふ、唐初の五言絶は、子安の諸作已に妙境に入る、七言は初めて梁陳を變じて、音律未だ諧はず、韻度尙ほ乏し、杜審言の湘江を度る、蘇綰に贈る二首は、結は皆な對を作す、而して工緻天然に、風味掬すべし、張說の巴陵の什、王翰の出塞の吟に

陵之什、王輸出塞之吟、句格成就、漸入盛唐矣。

太白絕句之神 又云、太白五七言絕、篇篇神物、于鱗謂、卽太白不自知、所以至也、斯言得之。

凡詩語淺意深、語近意遠、則無間然。 又云、樂天詩世間淺近、以意與語合也、若語淺意深、語近意遠、則最上乘。

至絕句、盛晚之異大著。 又云、五七言律、晚唐尙有一聯半首可入盛唐、至絕句、晚唐諸人愈工愈遠、觀盛唐不啻累代、非苦心自得、難領斯言。

對結要語意俱盡 又云、對結者須意盡、如王之渙、欲窮千里目、更上一層樓、高達夫、

至りては、句格成就し、漸く盛唐に入る。

太白は絶句の神なり。 又た云ふ、太白の五七言絶は、篇々神物なり、于鱗謂ふ、卽ち太白も自から至る所以を知らずと、斯の言之を得たり。

凡そ詩は語淺きときは意深く、語近きときは意遠ければ、則ち間然する無し。 又た云ふ、樂天の詩は世に淺近を聞る、意と語と合ふを以てなり、若し語淺きは意深く、語近きは意遠ければ、則ち最上乘なり。

絶句に至りて盛晚の異は大に著はる。 又た云ふ、五七言律は晚唐も尙ほ一聯半首の盛唐に入る可きあり、絶句に至りては、晚唐の諸人は愈々工にして愈々遠し、盛唐に視ぶれば、實に累代のみならず、心を苦しめて自得するに非ずんば、斯の言を領し難し。

對結は語意俱に盡くるを要す。 又た云ふ、對結は須らく意盡くべし、王之渙の「千里の目を窮めんと欲して、

故郷今夜思千里、霜髣明朝又一年、添著一語不得、乃可。

杜不解絕句 又云、五七言絕各極其工者

太白、五七言俱無所解者少陵。

太白敬亭山詩、無含蓄 又云、絕句貴含蓄

青蓮相看兩不厭、唯有敬亭山、亦太分曉矣。

宋人議論詩、晚唐爲之祖 又云、晚唐絕、東

風不與周郎便、銅雀春深鎖二嬌、可憐半

夜虛前席、不問蒼生問鬼神、皆宋人議論

之祖。

絕句以第三句爲主 周汝陽云、絕句之法

以第三句爲主、首尾率直而無婉曲者、此

異時所以不及唐也。

更に一層樓に上る。高逵夫の「故郷今夜思千里、霜髣明朝又一年」の如き、一語を添著し得ず、乃ち可なり。

杜は絶句を解せず 又た云ふ、五七言の絶、各其の工を極むる者は太白なり、五七言俱に解する所なき者は少陵なり。

太白の敬亭山の詩は含蓄なし 又た云ふ、絶句は含蓄を貴ぶ、青蓮の「相看兩不厭、唯有敬亭山」は、唯、敬亭山のみありは、亦た太だ分曉なり。

宋人議論の詩は、晚唐之が祖を爲す。又た云ふ、晚唐の絶、東風周郎の與めに便せずんば、銅雀春深ふして二嬌を鎖さん、可憐む可し、半夜虚く席を前め、蒼生を問はずして鬼神を問ふは、皆な宋人の議論の祖なり。

絶句は第三句を以て主と爲す。周汝陽云ふ、絶句の法は第三句を以て主と爲し、首尾は率直にして婉曲なき者は、此れ異時の唐に及ばざる所以なり。

五絶易質、七絶易文、胡東越云、五言絶尙眞切、質多勝文、七言絶尙高華、文多勝質、摩詰五絶、少伯七絶、俱神品、又云、摩詰五言絶窮幽極玄、少伯七言絶超凡入聖、俱神品也。

浩然達夫各有其所長所短、又云、盛唐長五言絶、不長七言絶者、孟浩然也、長七言絶、不長五言絶者、高達夫也、五七言各極其工者、太白也。

◎五言絶句

按五言絶始自漢魏樂府、故貴調古、凡貴調古者、率拗體、是以雖于鱗精殿、亦不拘矣、然于鱗長斯道亡論、其調古、動輒協宮商、若夫喜文字寡少平仄不拘、而易成篇、

五絶は質なり易く、七絶は文なり易し、胡東越云ふ、五言絶は眞切を尙ぶ、質多く文に勝つ、七言絶は高華を尙ぶ、又多く質に勝つ。

摩詰の五絶、少伯の七絶は、俱に神品なり、又た云ふ、摩詰の五言絶は幽を窮め玄を極む、少伯の七言絶は凡を超へ聖に入る、俱に神品なり。

浩然、達夫は各、其の長する所短なる所あり、又た云ふ、盛唐の五言絶に長じて、七言絶に長ぜざる者は、孟浩然なり、七言絶に長じて、五言絶に長ぜざる者は、高達夫なり、五七言各、其の工を極むる者は、太白なり。

◎五言絶句

按するに、五言絶は漢魏の樂府より始る、故に調の古を貴ぶ、凡そ調の古を貴ぶは、率ね拗體なり、是を以て于鱗の精緻と雖も、亦た拘はらず、然れども于鱗の斯の道に長する、其の調の古なるを論するなきも、動もすれば輒ち宮商に協ふ、若し夫れ文字の寡少平仄拘は

妄作五絶則過矣、不得調古奚以爲、

于鱗五言絶句格

平韻于鱗五言絶句凡四十四詩。

仄韻凡仄韻詩、貴古體、故古今不拘、平仄況五絶乎、于鱗五絶中、用仄韻者十三詩。

○唐人亦平韻多、仄韻少。

不宜韻起于鱗韻起者僅六詩、蓋皆平韻。○唐人韻起、亦平韻多。

有起句用他韻于鱗用他韻者二詩、蓋俱仄韻。○唐人亦率仄韻已如王

維獨坐圖、蓋裏是也。

雖二四反聲不必拘、況其餘乎于鱗唐人俱然也。

無對偶爲正體于鱗五絶凡四十三首、其三十四首皆用正體。

對起于鱗對起者三詩。對結于鱗對結者五詩。

四句兩對于鱗兩對者二詩。

無隔句扇對、無蜂腰格、無儻春格以上

三格雖唐人有所希有。

諸體詩則卷之下

らずして篇を成し易きを喜び、妄りに五絶を作るは、則ち過てり、調古を得ずんば、奚を以てせん。

于鱗の五言絶句格

平韻于鱗の五言絶句凡四十三首、平韻を用ゆる者は三十詩なり。

仄韻凡そ仄韻の詩は古體を貴ぶ故に古今平仄に拘はらず、況んや五絶をや、于鱗の五絶中、仄韻を用ふる者十三詩

なり、○唐人も亦た平韻多く、于鱗少なし。

韻起に宜しからず于鱗の韻起の者は、僅に六詩なり、蓋皆平韻なり。○唐人の韻起も亦た平韻多。起句に他韻を用ゆる有り于鱗の他韻を用ゆる者は二詩にして、蓋俱に

仄韻なり、○唐人も亦た率れ仄韻のみ、王維の「獨坐幽篁の裏」の如き是なり。

二四反聲と雖も必らずしも拘らず、況んや其餘をや、

于鱗唐人俱に然り、對偶なきを正體と爲す、于鱗の五絶凡そ四十三首にして、其の三十四首

は皆な正體を用ゆる、對起者三詩のみ、對結者五詩のみ。

四句兩對于鱗の兩對の者は二詩のみ。

隔句扇對なし、蜂腰格なし、儻春格なし、以上の三格は、唐人と雖も希に有る所なり。

も希に有る所なり。

仄格 起句第二字仄入謂之仄格、又謂之正格也。

仄仄平仄仄 平仄仄仄韻

仄平仄仄仄 平仄仄仄韻

平格 起句第二字入謂之平格、又謂之偏格也。

仄仄平仄仄 平仄仄仄韻

仄仄平仄仄 平仄仄仄韻

五言絕句要論

作五絕、須先熟讀漢魏樂府

胡東越云、五言絕須熟讀漢魏樂府、源委分明、逕路諳熟、然後取盛唐名家李王崔孟諸作、陶以風神、發以興象、真積力久、出語自超然。

唐五絕、太白右丞以前、最古

又云、唐五言絕體最古、漢如葉枯、今何在、枯

仄韻 起句第二字仄入、之為仄格、又云、又た之を正格と謂ふ。

仄仄平仄仄 平仄仄仄韻

仄平仄仄仄 平仄仄仄韻

平格 起句第二字平入、之を平格と云ひ、又た之を偏格といふ。

仄仄平仄仄 平仄仄仄韻

仄仄平仄仄 平仄仄仄韻

五言絕句的要論

五絶を作るには、須らく先づ漢魏の樂府を熟讀すべし。

胡東越云、五言絶は、須らく漢魏の樂府を熟讀すべし、源委分明に、逕路諳熟し、然る後に盛唐の名家李王崔孟の諸作を取り、陶するに風神を以てし、發するに興象を以てせば、真積力久しくして、語を出だすこと自から超然たらん。

唐の五絶は、太白右丞以前は最も古なり。

又た云ふ、五言絶體は最も古なり、漢は葉枯、今何在、

魚過河泣、南山一桂樹、日暮秋雲陰、兔絲隨長風、皆唐絕也。六朝篇什最繁、唐人多有此體。至太白、右丞、始自成家。

盛唐五絕之工手

又云唐五言絕、太白、右丞爲最、崔國輔、孟浩然、儲光羲、王昌齡、裴迪、崔顥次之。

◎七言絕句

按七言絕亦起自漢魏樂府、然與五言絕有異矣。五絕專貴調古、七絕除古體樂府、其餘咸貴唐調、故律呂鏗鏘、句格穩順、語半於近體、而意味深長、過之節促於歌行、而咏嘆悠永、倍之爲百代不易之體。

于鱗七言絕句格

平韻、平韻爲本色、于鱗七言絕、凡三百三十八首、共三百三十七首、皆平韻。

諸體詩則卷之下

「魚過河」を過ぎて泣く、「南山一桂樹」「日暮秋雲陰」「兔絲長風」に隨ふ」の如き、皆な唐絶なり。六朝の篇什は最も繁し、唐人は多く此の體あり、太白、右丞に至りて、始めて自から家を成す。

盛唐五絶の工手

又た云ふ、唐の五言絶は、太白、右丞を最と爲す、崔國輔、孟浩然、儲光羲、王昌齡、裴迪、崔顥之に次ぐ。

◎七言絶句

按するに、七言絶も亦た漢魏の樂府より起る、然れども五言絶と異なるあり、五絶は専ら調の古なるを貴び、七絶は古體樂府を除き、其餘は咸な唐調を貴ぶ、故に律呂鏗鏘、句格穩順にして、語は近體に半して、而して意味の深長は之に過ぎ、節は歌行より促り、而して咏嘆悠永は之に倍す、百代不易の體たり。

于鱗の七言絶句格

平韻、平韻を本色と爲す、于鱗の七言絶、凡そ三百三十八首なり、其の三百三十七首は、皆な平韻なり。

七七

仄韻凡仄韻詩貴古體故古今不拘平仄于

以韻起詩而言宜韻起故于鱗七絕中仄起僅一

無出韻起句用他韻晚唐爲備于鱗七

二四反聲此古今所同守荷不守之爲失粘

詩其餘無一詩不守之者唐人則往往犯之

忌五七同聲此唐人不必忌而于鱗忌之蓋

蓋第三句所絕無尤深忌之

忌一平此亦古今所忌而唐人問犯之至于

不忌

忌仄間平說已詳五言律也于鱗有不得已

他句所絕無也若夫古體離在何句不拘矣

忌下三連此亦古今所忌不五七同聲則自

古體樂府素不忌矣

不忌挾聲唐人律絕俱不忌挾聲者五句蓋有

仄韻凡七子鱗之詩是古體故古今平韻不拘

韻于以起者七言宜韻起故于鱗七絕中

出韻起句用他韻晚唐爲備于鱗七絕

二四反聲此古今所同守荷不守之爲失粘

詩其餘無一詩不守之者唐人則往往犯之

忌五七同聲此唐人不必忌而于鱗忌之蓋

蓋第三句所絕無尤深忌之

忌一平此亦古今所忌而唐人問犯之至于

不忌

忌仄間平說已詳五言律也于鱗有不得已

他句所絕無也若夫古體離在何句不拘矣

忌下三連此亦古今所忌不五七同聲則自

古體樂府素不忌矣

不忌挾聲唐人律絕俱不忌挾聲者五句蓋有

平仄布置之
定格詳之下。

不必忌一三同聲說已詳五律

無對偶爲正體子鱗七絕凡三百三十八首

對起者子鱗對起對結者子鱗對結

四句兩對者子鱗兩對

無隔句扇對 無蜂腰格 無偷春格以上

三格、雖唐人有所希有、說已見五律。

有拗體子鱗拗體 有古體子鱗用古體

仄格起句第二字仄入謂之

① 仄平平仄仄韻 ② 平平仄仄平韻

③ 仄平平仄仄韻 ④ 仄仄平半仄仄韻

平格起句第二字平入謂之

⑤ 仄仄平韻 ⑥ 仄平平仄仄韻

⑦ 仄仄平平仄仄韻 ⑧ 仄平平仄仄韻

諸體詩則卷之下

者五句なり、蓋平仄布置の定格あり之を下に詳す。

必ずしも一三の同聲を忌まず。說已に五律に詳なり。

對偶なきを正體と爲す。子鱗の七絶は凡そ三百三十八首、其の三百二十九首は皆な正體を用。

對起子鱗の對起 對結子鱗の對結

四句兩對子鱗の兩對

隔句扇對なし、蜂腰格なし、偷春格なし、以上の三格は唐人と雖

も希に有る所なり、説は已に五律に見ゆ。

拗格あり子鱗の拗體 古體あり子鱗の古體を用ゆる

仄格起句の第二字仄入之を仄格といふ、又之を正格と謂ふ。

① 仄平平仄仄韻 ② 平平仄仄平韻

③ 仄平平仄仄韻 ④ 仄仄平半仄仄韻

平格起句の第二字平入之を平格と謂ふ、又た之を偏格と謂ふ。

⑤ 仄仄平韻 ⑥ 仄平平仄仄韻

⑦ 仄仄平平仄仄韻 ⑧ 仄平平仄仄韻

于鱗挾聲格

仄仄平 平仄平 仄 此于鱗七言絕之定格也若此

則聲韻順無碍口其七絕中用挾聲者五詩其三詩皆用此格也

平仄平 平仄平 仄 又有用此格者僅一詩

仄仄仄 平仄平 仄 又有用此格者僅一詩

格如五律不拘布風

借問何人賦搖蕩 莫按腰間鹿盧劍

九日空齋似寒食 以上爲一格 ○堪是尊前幾

知己 此爲第一 ○我亦頽陽飲牛客 此爲第二

右于鱗七絕中挾聲俱在第三句起句所絕無也

于鱗下三連格

地名 人名 物名 古言 連辭

古體詩 樂府題詩 反聲對聯者

俱不可率平仄改文字者若改之恐不謬賜矣唐人明人時有三連者蓋以此

于鱗の挾聲格

仄仄平 平仄平 仄 此れ于鱗の七言絶の挾聲平仄布設の定

して口に碍るなし其の七絶中に挾聲を用ゆる者は五詩にして其の三詩は皆な此格を用ゆる

平仄平 平仄平 仄 又た此の格を用ゆる者は僅かに一詩なり

仄仄仄 平仄平 仄 此の格を用ゆる者あり僅かに一詩のみ七律に至りては皆な此を用

ひて他の格なし五律の如きは布置に拘はらず

「借問す何人か搖蕩を賦す」腰間鹿盧の劍を按ずる莫れ「九日空齋寒食に似たり以上を第一 ○是れ尊前

幾知己に堪へん」此を第二 ○我も亦た頽陽飲牛の客」此を第三

右于鱗七絶中の挾聲にして俱に第三句に在り起句の絶えて無き所なり

于鱗の下三連格

地名 人名 物名 古言 連辭 古體詩 樂府題

詩 反聲對聯の者

俱に平仄に率かれて文字を改むべからざる者なり若し之を改めば惡て流暢ならず唐人明人時下三連ある者は

故也、其餘間犯詩法者、率此類也、若不_レ解然、而漫用之、失精耳、今舉在于鱗七絕中者、以_レ示焉、五七律亦做此。

請君聽我秋風辭、秋風辭、漢武古。○廣陵城

上秋瀟瀟、秋瀟瀟連辭、且下句有二四同

白雲湖上華陽山、華陽山、山名不可改、蓋華

山、字或作華、其餘雖○胡姬十五堪、當墟、

此樂府題少年行時、不忌之。

右于鱗七絕中下三連皆用起句、他句所絕無也。

于鱗仄間平格

仄平仄仄仄平、此七律所有、七絕所無也。

仄平仄仄平仄、此七律七絕所俱有也、蓋非挾聲之謂、說已詳、

五律也、于鱗不得已而用之、則必有平仄布置之定格、以若此、其兩仄間之一字平

皆在第二位、若在他位者、屬於一平或挾聲中之一格、或五七同聲等、殊太少矣、今舉七

絕中在第二位者、以示焉。

體裁時類卷之下

議し此を以ての故なり、其餘間、詩法を犯す者は率此の類なり、若し然るを解せずして漫に之を用ひば、失精の類なり、今于鱗の七絶中に在る者を舉げて以て示す、五七律も亦た此に倣へ。

請ふ君聽け我が秋風の辭を、秋風辭は漢武の古題名にして改むべからず、

廣陵城上秋瀟々、秋瀟々は連辭なり、且つ下の句に二四同聲なる者あり、蓋此の詩は古體の句法を用ゆる

のみ。白雲湖上の華陽山、華陽山は山の名にして改むべからず、蓋し華の字は華岳

華山の華に用ゆれば明ち、仄聲と爲る、字或は華に作る、其餘は山川邑里の名と雖も皆な平聲たり。

胡姬十五堪に當るに堪へたり、此れ樂府題少年行の詩なり、之を忌まず。

右于鱗の七絶中の下三連は皆な起句に用ゆ、他句の絶えて無き所なり。

于鱗の仄間平の格

仄平仄仄仄平、此れ七律の有る所にし、仄平仄仄平、此れ七律七絶の俱に有る所なり、○蓋挾聲の謂にあらず、

説は已に五律に詳かなり、于鱗は已むを得ずして之を用ゆるは、則ち必ず平仄布置之定格ありて、以て此の若くす、其の兩仄間の一字平は皆な第二位に在り、若し他位に在る者は

一平或は挾聲中の一格、或は五七同聲等に屬す、殊に太だ少し、今七絶中第二位に在る者を舉げて以て示す。

己拚十日平原飲、不因驍騎能深入、
 怪來不作人間夢、可知十載龍陽恨、
 座中楚客會三獻、自言此劍千金買、
 故人欲灑臨江淚、屬鏃不是君王意、
 鼓聲不爲將軍起、奈何一閉豐城後、
 可知按劍人相視、若教一奉瑤池御、
 府中但得平輿吏、漢庭此日推經術、
 共憐執戟人猶在、自從一爲蒼生起、
 到來縱遣柴門閉、若言長者無車轍、
 卽令解語應相笑、遠公此日應相笑、
 世情一薄如春雪、已知不及春醪色、
 但教日奉西園宴、不知澤畔行吟日、
 使君不爲憐同調、兔園一望渾如雪、
 不知此日登高處、老來卻解人間事、

「己に拚す十日平原の飲」「驍騎の能く深く入るに因らずんば」「怪む人間の夢を作さざるを」「知る可し十載龍陽の恨」「座中の楚客會て三獻す」「自ら言ふ此の劍を千金に買ふと」「故人は臨江の淚を灑がんと欲す」「屬鏃は是れ君王の意にあらず」「鼓聲は將軍の爲めに起らず」「奈何んぞ一たび豐城を閉ざして後」「知る可し劍を按じて人の相ひ視るを」「若し一たび瑤池の御を奉せしめば」「府中但だ平輿の吏を得たり」「漢庭此の日經術を推す」「共に憐む執戟人猶ほ在り」「一たび蒼生の爲めに起りてより」「到來縱遣す柴門閉ぢたり」「若し長者車轍なしと言はゞ」「卽し語を解せしめば應に相ひ笑ふべし」「遠公此の日應に相ひ笑ふべし」「世情一薄春雪の如し」「己に知る春醪の色に及ばざるを」「但、日に西園の宴を奉せしめば」「知らず澤畔行吟の日」「使君、爲めに同調を憐まずんば」「兔園一望すれば渾べて雪の如し」「知らず此の日高きに登る處」「老來却て解す人間の事を」「故人は自から相如の湯あり」

故人自有相如渴、可知不帶風塵色、

右于鱗七絶中仄間平皆在第三句矣、他句所絶無一也。

于鱗五七同聲格

與用下三連同格、七律七絶俱有之、即五律之三、五同聲也、今舉在七絶中者、以示焉、蓋太、少矣。

月下并刀明月環明月環三字器名、不可改。

繫馬青楓江上臺青楓江三字水名、江字不可改、他字。

濤聲欲來風色驕此詩素用古體、此句法者也。

三月漁陽春水來不、下、春字則失其、實、且、無、活、機。

昨日罷官今日貧已、稱、昨、日、焉、得、不、下、今、口、字。

北斗闌干南斗低同、上。

梁苑無人秋氣悲有、悲、秋、古、言、不、得、不、下、秋字、蓋、悲、字、亦、在、韻。

此日雙鳧何處飛此、純、詞、也、上、有、雙、鳧、字、頭、有、飛、字、不、得、不、下、何、處、字、也。

也。

諸體詩則卷之下

「知る可し風塵の色を帯びざるを。」

右于鱗の七絶中の仄間平なり、皆な第三句に在り、他の句に絶えて無き所なり。

于鱗の五七同聲格

下三連を用ゆると同格なり、七律七絶俱に之れあり、即ち五律の三五同聲なり、今七絶中に在る者を擧げ、以て示す、蓋、太、少、し。

「腰下の并刀は明月環明月環の三字は、器の名なり、改むべからず。

「馬を繫ぐ青楓江上の臺青楓江の三字は、水の名なり、江の字は他の字に改むべからず。

「濤聲來たらんと欲して風色驕此の詩は素より古體の句法を用ゆるなり。

「三月漁陽春水來春の字を下さずんば則ち其の實を失ふ、且つ活機なし。

「昨日官を罷めて今日貧已に昨日と稱す、焉くんぞ今日、の字を下さざるを得ん。

「北斗闌干として南斗低同上。

「梁苑人なく秋氣悲悲、秋、古、言、あり、秋の字を下さざるを得ず、蓋、悲の字も亦た韻に在り。

「此の日雙鳧何れの處にか飛ぶ、此れ純詞なり、上に雙鳧の字あり、韻に飛の字あり、何れの處の字を下さざるを得ざるなり。

于鱗用同字格

右于鱗七絶中五七句同聲在起句第二句結句者也蓋第三句所大忌惟已知無意二千石一句則第三句是其最不可已者與。

凡律絕用同字一句中未嘗忌之與句則太忌之然唐人往往失點檢者多矣惟至于鱗無此失蓋二字義殊者及承前句之餘勢者不忌之於七絶中舉以示焉。

白雲湖上白雲飛長自由中去不歸此承前句

兩白增見其妙亦一格也。

廬山北望楚天分君去揚帆入彩雲草色

秋迷彭蠡澤不知何處弔番君君字重出

指其人之通稱一則加古人之姓下故不相妨也。

漢江春水竟陵東江樹蒼蒼繞沛宮江字重出

承前句之餘勢尤奇矣。

楊子江寒月影孤秋風吹落射陽湖故人

欲灑臨江淚湖上明珠竟有無江字重出前字

右于鱗の七絶中の五七句聲の起句第二句結句に在るものなり蓋第三句の大に忌む所なり惟「已知」なる二千石に意無きをこの一句は則ち第三句なり是れ其の最も已む可からざる者か。

于鱗の同字を用ゆる格

凡そ律絶に同字を用ゆること一句中は未だ許て之を忌まず句を異にすれば太だ之を忌む然るに唐人は往々に點檢を失する者多し惟于鱗に至りては此の失なし蓋二字義殊なる者及び前句之餘勢を承くる者は之を七絶中に忌まず舉げて以て示す。

「白雲湖上に白雲飛ひ長自由中去て歸らず」此れ前句を承けて増し其の妙を見はす亦た一格なり。

「廬山北に望めば楚天分る君去つて帆を揚げ彩雲に入る草色秋は迷ふ彭蠡澤知らず何れの處にか番君を弔はん」君の字重出す一は則ち詩中其の人を指すの通ひ妨げなきなり。

「漢江の春水竟陵の東江樹蒼々として沛宮を繞る」江字重出す前句之餘勢を承けて尤も奇なり。

「楊子江寒くして月影孤なり秋風吹き落つ射陽の湖故人灑がんと欲す臨江の涙湖上の明珠竟に有りや無

句用之水名三
四所用泛然。

北風吹雪雪霏霏、雪裏開棾酒半酣、重出字

承前句之
餘勢亦奇。

右于鱗七絕中用同字者其餘若
早夏示殿卿詩則素古體已。

于鱗不忌犯大韻小韻正紐旁紐。

律絕不忌此四者雖五尺童若律者皆能
知之然有好舉人之瑕瑕者若其無可言者
則必及此四者作者或不暇引其例以對之
擬擬然退矣故今舉于鱗精嚴未嘗忌之者
以示焉七絕中太多此惟錄其尤著明者
已至正紐旁紐則不勝枚數一切省焉。

長陽明別子與子相 長楊江四詩中。

公中山中簡許 當梁寄吳明
鄒詩中。

霜堂送殷正 黃當殿卿詩中。

時誰答張秀 梁營殿卿乞
酒詩中。

郎妨戲東張茂 以上犯大韻。

愁秋對戶 花家同上。

諸體詩頭卷之下

「北風、雪を吹いて雪霏々、雪裏に棾を開きて酒半ば酣
なり、雪の字重出して前句の
餘勢を承く、亦た奇なり。」

右于鱗の七絶中同字を用ゆる者なり、其餘、早
夏殿卿に示す詩の若きは、則ち素より古體のみ。

于鱗は大韻小韻正紐旁紐を犯すを忌まず。

律絶に此の四者を忌まざるは、五尺の童と雖も聲律を拈する
者は皆な能く之を知る、然れども好んで人の瑕瑕を擧ぐる者
あり、若し其の言ふ可き者無くんば、則ち必ず此の四者に及
ぶ、作者或は其の例を引きて以て之に對ふるに暇あらず、
然として退く、故に今于鱗の精嚴も、未だ嘗て之を忌まざ
る者を擧げて以て示す、七絶中に太多し、此れ惟り其の尤
著明なる者を録するのみ、正紐旁紐に
至りては、則ち枚舉に勝へず、一切省く。

長陽、子與子相明卿元美 長楊、くを送る詩中。

公中、山中許鄒に、 當梁、吳明卿に寄
簡する詩中。

霜堂、殷正甫を、 黃當、戲れに殿卿に酒を
送る詩中。

時誰、張秀才に答、 梁營、乞ふ詩中。

郎妨、戲れに張茂す、 以上は大韻を犯す、

愁秋、對戸部を、 花家、同上。

日本詩話叢書

城聲送子相詩中。

章長僕明卿詩中。

空風同上。

堂陽嗣殿卿長史詩中。

鄉郎寄慰元美詩中。

知誰重寄元美詩中。

愁舟別元美詩中。

以上犯小韻。

宮東同元美賦詩中。

香郎寄伯承詩中。

舟愁答殿卿詩中。

離時九日同殿卿登南山詩中。

誰時春日聞明卿詩中。

陽王輓中丞詩中。

長黃汝寧徐使君詩中。

沉約犯大韻小韻

梁沉約造八病之制、若平頭上尾蜂腰鶴膝、則雖無意忌之、不常有惟大韻小韻、正紐旁紐、則所常有而易犯矣、是以雖沈約自遺之、自犯而千載人未察之、徒側目於嚴法、已義卿發近考昭明文選中、忽得其犯此二病者、今錄之、此以解千載學者之惑焉。

遊絲映空轉、高楊拂地垂、清晨戲伊水、

薄暮宿蘭池、絲垂同韻伊池同韻是

八六

城聲子相を送る詩中。

章長明卿を偑ふ詩中。

空風同上。

堂陽殿卿長史に酬ふ詩中。

鄉郎元美に寄慰する詩中。

知誰重れて元美に寄する詩中。

愁舟元美に別る、詩中。

以上は小韻を犯す。

宮東元美と同く賦する詩中。

香郎伯承に寄する詩中。

舟愁殿卿に答ふる詩中。

離時九日殿卿と同く南山に登る詩中。

誰時春日明卿の京に之を聞き寄を爲す。

陽王中丞を輓する詩中。

長黃汝寧の徐使君詩中。

沉約、大韻小韻を犯す。

梁の沈約は、八病の制を造る、平頭上尾蜂腰鶴膝の若きは、則ち之を忌むに痛なしと雖も、常に有らず、惟、大韻小韻、正紐旁紐は則ち常に有る所にして犯し易し、是を以て沈約と雖も、自から之を造り自から犯す、而して千載の人未だ之を察せず、徒に嚴法に側目するのみ、義卿發て近、昭明の文選中に考へて、其の此の二病を犯す者を得たり、今之を此に録し以て千載學者の惑を解く。

「遊絲空に映じて轉じ、高楊地を拂ふて垂る」「清晨伊水に戲れ、薄暮蘭池に宿す、絲垂は同韻にして、伊池も同處に之を犯す。」

以上犯大韻

洞房殊未曉、清光信悠哉、勝光同韻。

高車塵未滅、珠履故餘聲、車餘同韻。

以上犯小韻

七言絕句要論

唐七絕之工手

胡東越云、七言太白江寧爲最、右丞嘉州舍人常侍次之。

唐人七絕樂府不脫唐調者

又云、七言絕、李王二家外、王翰涼州詞、王維少年行、高適營歌、皆樂府也、然音響自是唐人、與五言絕稍異、

對結賞雖對猶不對

又云、若杜審言、紅粉樓中應計日、燕支山下

諸體詩則卷之下

以上は大韻を犯す

「洞房殊に未だ曉けず、清光信に悠なるかな」勝光は同韻

「高車塵未だ滅せず、珠履故に餘聲」車餘は同韻

以上は小韻を犯す

七言絶句の要論

唐の七絶の工手

胡東越云ふ、七言は太白江寧を最と爲し、右丞嘉州舍人常侍は之に次ぐ。

唐人七絶の樂府の唐韻を脱せざる者

又た云ふ、七言絶は李王二家の外に、王翰の涼州詞、王維の少年行、高適の營歌は皆な樂府なり、然れども音響は自らは是れ唐人なり、五言絶と稍異なり。

對結は對すと雖も猶ほ對せざるがことを貴ぶ。

又た云ふ、杜審言の「紅粉樓中應に日を計ふべし、燕支山

八七

莫經年、獨憐京國人南竄、不似湘江水北流、則詞竭意盡、雖對猶不對也。

七絶覺妙於盛唐、是未妙處

王敬美云、晚唐詩委爾無足言、獨七言絶膾炙人口、其妙至欲勝盛唐、愚謂絶句覺妙、正是晚唐未妙處、其勝盛唐乃其所以不及盛唐、絶句之源出於樂府、貴有風人之致、其聲可歌、其趣在有意無意之間、使人無處捉著、盛唐惟青蓮龍標二家詣極、李更自然、故居王上、晚唐快心露骨、便非本色、議論高處逗宋詩之選、聲調卑處開大石之門。

◎書品

采摭精詳、序次整密者、

古詩紀明選汝 唐詩紀事宋計敏夫選

下に年を経る莫れ、獨り憐む京國の人南竄せらる、湘江の水の北流するに似ず、の如きは、則ち詞竭て意も盡く、對すと雖も猶ほ對せざるが如し。

七絶、盛唐より妙なるを覺ゆるは、是れ未だ妙ならざる處。

王敬美云ふ、晚唐の詩は委爾して言ふに足るなし、獨り七言絶は人口に膾炙す、其の妙は盛唐に勝らんと欲するに至れり、愚謂ふ、絶句の妙を覺ゆるは正に是れ晚唐の未だ妙ならざる處なり、其の盛唐に勝るは乃ち其の盛唐に及ばざる所以なり、絶句の源は樂府より出で、風人の致あるを責ぶ、其の聲は歌ふ可く、其の趣は有意無意の間に在り、人をして捉著するに處なからしむ、盛唐は惟青蓮龍標の二家のみ詣り極む、李は更に自然なり、故に王の上に居る、晚唐は心を快くし、骨を露はす、便ち本色に非ず、議論の高き處は宋詩の選に逗し、聲調の卑き處は、大石の門を開く。

◎書品

采摭精詳に、序次整密なる者

古詩紀明の選汝 唐詩紀事宋の計敏夫の選

古今最上精選者

文選梁昭明太子選。 唐詩品彙明高廷禮選。

同拾遺同上。 唐詩正聲同上。

唐詩選明李于麟選。 明七才子詩集選者闕。注釋者多。

唐後詩本邦徂來先生選。

猶可列精選者

明詩正聲明穆光胤選。 明詩選明陳臥子選。

薰蕕錯雜失鹵莽者

文苑英華宋太宗詔。諸儒編之。 事文類聚宋祝穆編。

古唐詩歸明鍾惺選。蓋古詩歸。明詩歸。同上。

明詩彙選明朱篋風選。 唐詩鼓吹宋元好問選。

三體詩宋周伯敬選。 古文前集後集。書肆所僞選也。

圓機活法此非王弼州選。後之書肆僞選。詩林正宗。詩學大成等諸書。僞撰之。

已。若初學不得已而觀。此。謀。取。舍。於。其。人。可。矣。

諸體詩則卷之下

古今最上の精選なる者

文選梁の昭明太子の選。 唐詩品彙明の高廷禮の選。

同拾遺同上。 唐詩正聲同上。

唐詩選明の李于麟の選。 明七才子詩集選者闕く。○注釋者は逸失多し。

唐後詩本邦の徂來先生の選。

猶ほ精選に列すべき者

明詩正聲明の穆光胤の選。 明詩選明の陳臥子の選。

薰蕕錯雜して鹵莽に失する者

文苑英華宋の太宗詔に。諸儒に。之を編す。 事文類聚宋の祝穆の編。

古唐詩歸明の鍾惺の選。蓋し古詩歸は精や精廣なり未だ必しも廢せず。 明詩歸同上。

明詩彙選明の朱篋風の選。 唐詩鼓吹宋の元好問の選。

三體詩宋の周伯敬の選。 古文前集後集と共に書肆の僞選する所なり。

圓機活法此れ王弼州の選にあらず。後の書肆は、詩林正宗、詩學大成等の諸書を僞撰し之を僞選するのみ。

若し初學の已を得ずして此に頼らば。取捨を其人に譲りて可なり。

終身不讀而可者

瀛奎律髓元方同選、千家詩宋謝堯山選。

聯珠詩格元于濟、蔡正孫二子所選也。

他岐旁門大善正調者

東坡詩集宋、山谷詩集宋。

袁中郎文集明、錦繡段本邦建仁寺僧天隱選。

古今名家集、宜枕藉者

李太白詩集、杜詩全集、王維詩集

王昌齡詩集、孟浩然詩集、

高適詩集、岑參詩集以上唐。

李空同集李夢陽著、何大復集何景明著。

李滄溟集李攀龍著、弇州四部稿王世貞著。

四冥山人集謝榛著、天目山人集徐中行著。

青蘿館集同上、蓋略天山人集著、瓶瓢洞稿吳國倫著。

終身讀まずして可なる者

瀛奎律髓元の方同の選、千家詩宋の謝堯山の選。

聯珠詩格元の于濟、蔡正孫二子の選ぶ所なり。

他岐旁門大に正調に害ある者

東坡詩集宋、山谷詩集宋。

袁中郎文集明、錦繡段本邦の建仁寺僧天隱の選。

古今名家の集宜しく枕藉すべき者

李太白詩集、杜詩全集、王維詩集、

王昌齡詩集、孟浩然詩集、

高適詩集、岑參詩集以上は唐なり。

李空同集李夢陽の著、何大復集何景明の著。

李滄溟集李攀龍の著、弇州四部稿王世貞の著。

四冥山人集謝榛の著、天目山人集徐中行之著。

青蘿館集上に同じ蓋し天目山人集を略せる者なり、瓶瓢洞稿吳國倫の著。

蘭汀存稿梁有撰著。方城集宗臣著以上明。

古今詩話宜玩者

文心雕龍梁劉勰著。詩品梁鍾嶸著。

三家詩話宋嚴粲明徐昌穀著。

蕺苑卮言明王元美著。詩藪明胡元瑞著。蓋胡

確惟元美退于麟大失其正學者須知此意讀之。

注解書宜玩者

唐詩解明唐仲言解也此備之掌故則往往便于質訪至其解詩意謬妄居半。

唐詩訓解此詩全用子麟選出入一二注解劉夔仲舒仲言等以偽選者也謬

不少然會之未明解者初學不得

不惑之也若夫取會謀之其人可矣

明七才子詩集注解此亦非陳繼儒句解不選耳往往有差謬然不

得不應之猶訓解例也。絕句解本邦徂來先生所解明詩者也。

古今名題書宜玩者

諸體詩則卷之下

蘭汀存稿梁有撰著。方城集宗臣著以上明。

古今の詩話の玩ぶべき者

文心雕龍梁劉勰著。詩品梁鍾嶸著。

三家詩話宋嚴粲明徐昌穀著。

蕺苑卮言明王元美著。詩藪明胡元瑞著。蓋胡確惟元美推して子麟を退くるは、大に其の正

を失す學者は須らく此の意を知りて之を讀むべし。

注解の玩ぶべき者

唐詩解明唐仲言の解なり此れ之を掌故に備ふるときは則ち往々質訪に便なり其の詩意を解するに至りては

謬妄半。唐詩訓解此れ時は全く子麟の選を用ひ一二を出し居る。

解しする者なり謬り少なからず然れども之を會て未だ明解の者あらず初學は之に憑らざるを得ず若し夫れ取捨

は之を其の人に。明の七才子詩集注解此れも亦た陳繼儒の句解に非ず

爲選のみ往々差謬あり然れども之に憑らざるを得ず猶ほ訓解の例の如し。絕句解本邦徂來先生の明

詩を解する。同拾遺同上。

古今名題の書の宜しく玩ぶべき者

九一

古樂苑明梅鼎祚編、此書大益於學、樂府兼可解、名題尤。

樂府古題要解唐吳兢著。題苑、本邦鳴子陽撰、有益初學。

初學宜玩詩韻詩材書

五車韻瑞明凌以棟撰之、此元黃廣博者、不此中亦蓋猶錯雜、烏能辨之、若取韻瑞、觀各下所出證詩名、姓、詳、此則盛唐須從宜用之、其餘取會、在唐詩、碑、本邦石、唐明詩聯、本邦信、田、高、卿、二、近體韻選、本邦川、崎、詩韻、輯要、此雖稱子麟所撰、亦偽撰已、然詩韻書刊、得香韻之道、第初學、三、重、韻、易、曉、或、苦、此、書、無、國、譯、及、門、類、而、難、通、焉、悲、哉、詩、箋、本邦、撰。

◎附讀古今詩及詩選詩集大意。

古今詩聲異曲同工 胡東越云、國風雅頌、溫厚平和、離騷九章、憤惻濃至、東西二京、

古樂苑明の梅鼎祚の編なり、此の書は大に樂府を學ぶに益あり、兼れて名題を解すべし。

樂府古題要解唐の吳兢の著。題苑、本邦の鳴子陽の撰に就の著。題苑して初學に益あり。

初學の宜しく玩すべき詩韻詩材の書

五車韻瑞明の凌以棟之を撰む、此れ元黃廣博を貴ぶ者にして、村を此の中にも求むるも、亦た蓋猶錯雜し、烏くぞ能く之を辨せん、若し韻瑞を取らば、各下に出だす所の證詩の名、姓を觀て之を用ゆべし、其餘の取捨は其の人に在るのみ。

唐詩、碑、本邦の石、唐明詩聯、本邦の信、田、高、卿、二、近體韻選、本邦の川、崎、詩韻、輯要、此れ子麟の撰する所、得、香、韻、之、道、第、初、學、三、重、韻、易、曉、或、苦、此、書、無、國、譯、及、門、類、而、難、通、焉、悲、哉、詩、箋、本邦の撰なり。

◎附 古今の詩及び詩選詩集を讀むの大意。

古今の詩聲異曲同工 胡東越云、國風雅頌は溫厚にして和平なり、離騷九章は憤惻濃至なり、東西二京は神奇

神奇渾璞、建安諸子、雄贖高華、六朝排偶、靡曼精工、唐人律調、清圓秀朗、此聲歌之各擅也。

文選古今精裁 又云、昭明鑒裁、著述咸有可觀、至其學業、洪深行義、篤篤至、殊非文士所及、自唐以前、名篇傑什、率賴此書、功德詞林、故自匪淺、宋人至以五臣匹之、何其忍也。

讀文選詩、分三節、古人云、文選詩、東都以上、主情、建安以下、主意、三謝以下、主辭。

陶潛爲隱逸詩人之宗、胡東越云、子美之不甚喜陶詩、而恨其枯槁也、子瞻劇喜陶詩、而以曹劉李杜俱莫及也、二人者之所言皆過也、善哉鍾氏之品元亮也、千古隱

渾璞なり、建安の諸子は雄贖高華なり、六朝の排偶は靡曼精工なり、唐人の律調は清圓秀朗なり、此れ聲歌の各擅なるなり。

文選は古今の精裁なり 又た云ふ、昭明の鑒裁著述は、咸な觀る可きあり、其の學業の洪深にして、行發の篤至に至りては、殊に文士の及ぶ所に非ず、唐より以前の名篇傑什は、率ね此の書に賴る、詞林に功德ある故に、自から淺きに匪ず、宋人は五臣を以て之に匹するに至る、何ぞ其の忍へるや。

文選の詩を讀むには三節に分つ 古人云ふ、文選の詩は、東都以上は情を主とし、建安以下は意を主とし、三謝以下は辭を主とす。

陶潛は隱逸詩人の宗なり 胡東越云ふ、子美の甚だ陶の詩を喜ばざるは、其の枯槁を恨むなり、子瞻の劇は、陶詩を喜ぶは、曹劉李杜俱に及ぶ莫しと以へばなり、二人の者の言ふ所は皆な過てり、善いかな鍾氏の元亮を品するや、千古隱逸詩人の宗なりと、而も源は應璩

逸詩人之宗也、而以源出、應璩、則非也。

讀唐詩分三節、古人云、盛唐主辭情、中唐

主辭意、晚唐主辭律、唯杜甫上祖雅頌、下

友楚漢、俯於齊梁、體製格式備極諸變。

南朝唐朝宋朝所尙異、嚴羽卿云、詩有詞

理、意興、南朝人尙詞、而病於理、宋朝人尙

理、而病於意興、唐人尙意興、而理在其中

矣。

に出づると以へるは、則ち非なり。

唐詩を讀むには三節に分つ、古人云ふ、盛唐は辭情を主

とし、中唐は辭意を主とし、晚唐は辭律を主とす、唯だ

杜甫は上は雅頌を祖とし、下は楚漢を友とし、俯して

齊梁を拾ふ、體製格式諸變を備極す。

南朝唐朝宋朝の尙ぶ所は異なり、嚴羽卿云ふ、詩には

詞理意興あり、南朝の人は詩を尙びて理に病む、宋朝

の人は理を尙びて意興に病む、唐人は意興を尙びて理

は其の中に在り。

諸體詩則卷之下終